

やはり俺は浮遊城に
いること自体が間違っ
ている

毛利 綾斗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

修学旅行、生徒会選挙。これらの行事を経て崩れ始めた奉仕部。それを直すために行動を開始する比企谷八幡だったが緊張を紛らわすために入ったゲームは、デスクゲームだった?!

俺ガイルが好きすぎて、ていうかヒツキーが好きすぎて書いてしまいました。まだまだ未熟者ですがよろしくお願いします。

目次

そうして始まりが始まる	1
やはり俺の始まりは間違っている	7
そうして俺の始まりは終わりを告げる	23
そうしてアルゴはアハトと2人きりになる	35
こうして2層攻略の準備が進む	61
やはり俺のboss攻略は何かが起こる	77
やはり比企谷八幡も人間である	94
どうやらアハトのチート化は止まらない	94
やはり俺の不幸は続く	106
やはり俺たちの50層攻略は失敗に終わる	129
新たな武器、現る	147
やはり俺が女子と2人で行動するのは間違っている	160
厄介事は終わり厄介事を呼ぶ	183
事件勃発	202
罪の茨	209
第2の被害	223
そして皆いなく……	229
後悔と……	240

自分の中の

番外編 光と影

誰が為の……

自身の為の

死神

268

273

282

308

328

そうして始まりが始まる

「お兄ちゃん、早く起きなよ。今日予定あるんでしょ！」

そんな小町の声で起こされた俺は世界で一番しあわせだ。だって世界で一番可愛い妹に起こされたんだぜ。

「つとこんな事考えてる暇は無かった。つか何で小町は俺の予定把握してんだよ」

そう。俺こと比企谷八幡は今日決断を下さねばならない。俺はあの場所を守りたかった。初めて俺が居たいと思つた場所を。でもそうするためには……………。

今日俺は決着を付けない、いや付けるんだ。これは自分の失態を挽回するためのもの。俺のせいで雰囲気が悪くなつてしまったあの場所を取り戻すための戦いだ。

人は俺のやり方を最低だと言うかも知れない。

過去の俺なら、それはお前が一番嫌つていた欺瞞だというだろう。

でも俺は俺を含めた皆を救う方法を取りたい。そう思つてしまうほどに、あの場所は大切なのだ。あの二人と、まあプラスαも含めたあの空間が。

約束の時間は18時。まだ時間がある。トリマ落ち着くためにゲームでもするか。

そう言つて俺は顔を囲む様に機械を取り付け、

リンクスタート

と呟く。そうたまたまβテストに当たってしまったゲームの正規サービスで遊ぶために。

「久しぶりに戻ってきた」

誰にも聞かれていないかと心配になり辺りを見回す。まだインしている人は少ない様で周りには誰もいなかった。そして俺は走り出す。新しい武器を手に入れるために。

俺が手に取った武器は曲刀だ。少ない手数で大ダメージを与えられるこの武器はヒットアンドアウェイ戦法に向いている。そして第一層の雑魚モブ、フレンジーボアをボコし続けた。現在のレベルは5。かれこれここで4時間粘ったがこれ以上上がりそうにない。

出かける準備もあるしそろそろ上がるか。

そう思い、左腕を振り下げアイコンを出す。

ログアウト、ログアウトと。確か設定の一番下にあったよな？
と同時に

リーンゴーン、リーンゴーン

と鐘がなる。始まりの街の大広場にあつた鐘の音だ。

その瞬間に俺の体は青白い光に包まれ目の前が真っ白になる。気がついたら俺は、いや俺だけじゃない。たくさんの人間が始まりの街の大広場にいる。

辺りからはやつとか、など些か怒気を孕んだ声が聞こえる。恐らくログアウトができなかつたつてところか。

ちよつと待てよ。普通はこんな所に集めずに一斉ログアウトをして、後で謝罪つてい
うのが普通じゃないだろうか？

これは何か起こるかもしれない。

俺は一番後ろまで下がり辺りの状況を見回せるようにする。

「アレ、お前ハーちゃん力？」

隣から聞こえてきた中性的で特徴的な話し声。広場の真ん中から何か聞こえるが気にしない。

「その声は鼠か？」

振り向くとポリゴン片が輝いていてその中から浅黒い女の子が現れる。

「そーだぜ、ハーちゃん。つてどうなってるのこれ？」

途中から声が変わっていることに気付く鼠の。これ凄いやね？つか彼奴つて女だったのか。どうせ女だとゲーム内で信用を勝ち得ないと思ってるだろうな。

「おい、鼠の。素が出てるぞ、素が。あととりあえず此処から離れるぞ。」

取り敢えず混乱した人に巻き込まれなくなかったから圏外まで出たが現状が把握できてない。やっぱ、ボッチは一つのことを気をとられると何もできなくなるらしい。

「おいハーちゃん。これからどうするんだヨ……。100層までクリアとかいう無理ゲーになったわけダガ」

どうやら2ヶ月で10層までしか行けなかった俺たちはこのゲームに閉じ込められ

てしまったらしい。しかもゲーム内での死⇨現実での死という等式までセットらしい。今の時間は17時30分。

どうやら約束には間に合わないらしい。かといって彼奴らに会うことなく死ぬなんて嫌だ。早く会いたい。

なら最善の一手を取るしかない。

「鼠の、俺は攻略に出る。お前はどうせ情報屋をするんだろ。だったら資金も情報収集も手伝ってやるから攻略本を作ってくれ」

「ワカッタ。いや、わかったよアハト。じゃあ一時間ほど待って」

そう言って書き始めた物を雑貨屋に入って印刷し本にして配った。

内容はこの世界での生き方。レベリングの方法。そして一番重要なフィールドのこなどだ。最後にこれはβ版の情報です。変更点がある可能性があります。

と注意書きを書いた。

さて、これが吉と出るか凶と出るかだ。

まず俺たちができる最大のことをした。次はレベリングだ。

行くぞ、鼠の

一言呟き鼠とフィールドへ駆け出した。

やはり俺の始まりは間違っている

俺たちは次々とワールドの情報を集め、改訂版として攻略本を出していた。しかし此処一ヶ月で死者数は800人に近づく一方。まるで俺たちの尽力を嘲笑うようだった。

「鼠、やっぱりこの扉ってボス部屋のだよな」

「βの時と少し変わってるけどそうだね。どうする、私たちが発表する?」

「いや、少し待とう。俺ら2人だけで発見したつてなると面倒臭いことになるかも知れん。それまでに手札を増やすぞ」

「わかったよ。にしてもアハト強くなったね。一人で此処まで戦い続けたんだから」

「そう思うんだったらお前も戦え」

そう、この部屋を見つけるまで俺は鼠とパーティーを組んでいた。

俺が上げていた索敵でモブを見つけるとこいつは隠密で隠れ俺一人に戦わせるのだ。

此処でどうでもいい話だが、全然隠密を使っていないはずの俺の方がスキルレベルが高い。

なんなのこれ、八幡泣いちやうよ。

つて話が逸れたがそのおかげで俺は攻略を目指している中でも高レベルプレイヤーだと思っっている。まあ自慢できる友達なんていないがな。フレンド登録も鼠としかしてないからな。

「もう中のマッピングも終わったしクエスト消化しとこうぜ。俺は戦闘系、お前は非戦闘系を頼む」

「えー、お姉さんアハトと一緒にいいな」

と言いながらチラツチラツと見てくる。正直言つてポッチを極めた俺には聞かないし何より鬱陶しい。

「そんなの効率が悪い。それに俺たちが見つつけられたんだ、そろそろ他の奴らも来るだろう。それまでにできるだけ情報が欲しい。いつも言ってるだろ、手札を増やすんだ」

「むー、わかった。じゃあ4日後に落ち合おうね」

おう、と言い鼠を町まで送り届け戦闘系クエストを受けに行く。俺の情報をまとめる能力は相当高いらしく、始めは鼠が一人で纏めていたが今では半々で纏めている。

それにしてもあざとかった。なんなの彼奴、一色なの。俺がプロボッチじゃなかったら同伴認めてたぜ。それにお姉さんって絶対俺より年下だろ。俺の妹スキル発動してたし。

それから俺はさつさとクエストを全クリし、曲刀の熟練度を上げるべく戦闘をしていた。

俺が最前線で攻略してるって知ったら彼奴らどんな顔するんだろう。きっと由比ヶ浜は馬鹿みたいな面して、雪の下は妄想は自分の中だけにしておきなさい、とか言うんだらうな。

彼奴らは上手くやっているだろうか。きっと彼奴らのことだ、ゆるゆりしてるに違いない。そんな俺が居なくて取り戻した平穏を俺は壊すつもりなのか。本当は俺がいない方は上手くいっているのではないか。俺の作戦が上手くいかなかったら。その時は……………。

って駄目だ。もう俺は決めたんだ。彼奴らの隣に並んで立てるように、自分を含めた全員を救う方法を見つけてな。

まあ裏があるのではないか、と深く考える癖はまだ治っちゃいないが。

そんなことを考えながら街に戻る最中に俺の索敵に一人のプレイヤー反応が。

珍しいな。迷宮区でソロなんて自殺行為かよ。まあ近くに安全地帯もあるし問題ないか。

にしてもきつとボス戦に参加してくるだろうし顔だけでも拝んでおくか。

そう思いプレイヤーの方に向かっていくとHPが数ドットしか残っていない相手にソードスキル《リニア》を放つフード姿が。あまりの正確さに目を奪われたが何より驚いたのはそのフードが数歩歩くか歩かないかの内にいきなり倒れたのだ。

何かの仕様なのか

そう思いながら駆け寄り生きているか確かめる。いや、ダメージは全然食らってなかつたし、何より死んだら消えるはずだ。ってことは未発見のバッドステータスかなに

かか。

「おい。大丈夫か？聞こえるなら返事を……………」

辺りから聞こえてくる可愛らしい

スースー

という寝息。

こいつぶっ倒れるまで戦ってるってどういう事だよ。此処に放置して死なれたら寝覚めが悪いしなー。やだなー。仕方ない、安全地帯まで運ぶか。何よりこいつは戦力になるしな。

と安全地帯まで連れてきたはいい。ついでに無駄も教えてやろうと思ったのはいい。でも何で俺は怒鳴られているんだ。

「どうして余計な事をするのよ。私は、私は」

どうする。この状況でこいつを納める方法。どうすればいいんだ。

「そんなに死にたいのか。わかった、じゃあ出るぞ」

そう言って安全地帯から出て俺は引き抜く。

フードは一言も発す事なくその場で立ち尽くしている。

「どうした。死にたいんじゃないのか」

静かに告げる。フードはハッとすると安全地帯からでて壁際に立つ。

そして俺は引き上げた武器を振り下ろし、フードの首が胴から切り離れる

事はなかった。

フードはその場に座り込み泣き始めた。

ここまでは計算通りだ。ここからは上手くいくかわからない。でもやるしかないんだ。変わった所を彼奴らに見せるためにも……………。

「お前は一度ここで死んだ。今のお前は新しいお前だ。生きる事を選んだんだから今度

は自分を大事にしろ」

「明日攻略会議が開かれるらしい。もしまだ戦う力が残ってるなら来てくれ。そして攻略の手伝いをして欲しい」

立ち去り状に場所を告げる。今の俺ではここが限界だ。おそらく奴は来ないだろう。貴重な戦力を失ってしまった。でも死なれるよりはマシ……………だよな。

「鼠の、そっちで何か情報があったか？」

「あるクエストをクリアしたらこんなのをもらったよ」

そう言って差し出されたのは羊皮紙。俺は覗き込むとそこには

N A M E

イルファング・ザ・コボルト・ロード

と書かれている。

この名前見覚えがある。思い出そうとしているといつも以上に真剣な鼠を見て思い出す。

第1層のボスはこんな名前だったと。

「アハトも思い出した？多分だけどこいつはボスだよ。そっちも何か見つけた？」

俺は2枚だ

そう言つてストレージから取り出して机に広げる。
そこには

HPバー5本

一本減るにつき、ルイン・コボルト・センチネル3体

HPバー5本

HPが少なくなると武器を変更

と書かれている。

「此処まではβ時代と同じだ。確かあん時は斧とタルアールだったよな？」

そうだったよ

鼠の返答を聞き少し落ち着く。

タルアールは曲刀カテゴリに入る。曲刀の扱いなら誰にも負けるつもりはない。それが例えボスだとしてもな。

お互いの意見を噛み砕き消化して眠りにつく。

トールバーナの大広場、俺は今その隅で攻略会議が開かれるのを待っている。既に時間を5分オーバーしている。

「これ以上待っても誰も来そうにないな。それじゃあ攻略会議を始めるよ」

そうやって話し出したのはイケメンな材木座、によく似た奴だった。

「俺の名前はディアベル。気持ち的にナイトやってます」

当然だがこのSAOではジョブシステムなどない。これは奴がこの場の人間を掌握する為に言った表面上の言葉。だが効果は靦面のようで辺りから笑いながらツツコミが入る。

いけると思ったのだろう奴は急に真面目な顔をして話し出す。

「昨日俺たちのパーティがボス部屋だと思われる扉を見つけた。そこで明日の12:00に攻略を開始する」

辺りから凄いだのなんだのと声がある。

周りからの反応に満足したのか少し微笑んで頷き話し出そうとする。が遮られた。それでも嫌な顔をしない奴に俺は感動すら感じている。

話を遮った男は前の舞台に飛び出てくる。

「こん中に侘びをいれやなあかん奴がおるはずや」

「それはβテストーのことかい？」

「そうや。彼奴らが情報を独占した所為でビギナーが沢山死んでもうたんや。今此処で土下座して持つてるアイテムやコルを分け与えん限りわいは背中を預けられん」

早かれ遅かれぶつかるとわかっていたこの問題。このモヤットボールは鬱陶しいが攻略前に言ってくれてよかった。攻略中に言われるよりかはまだマシだ。さて、俺の持つてる切り札で勝ちきれるか。

ちよつといいか？

そう言つて手を挙げる俺。こんなとこで確執を産むのはよくない。頑張つていた鼠が報われん。

「なんや兄ちゃん。ベーターの事知っとんのか？」

「いや、俺はこの会議でどう攻略するかの方策を話あうと思っていたんだが」

「こうやって少しずつ相手に余裕を無くすように持っていく。沸点低そうだしすぐに食ってかかってくるだろう。」

「な、なんやてー！これはわいにとっては大事な……」

「あんただけにしろ。それに今何人くらい死んだのか知ってんのか？」

「グツ、と唸るモヤットボール。」

「いいそのまま静かに聞いてろ。」

「今は800人強。その中でβテスターは500人弱だ。分かるか、βテスターの方が沢山死んでるんだよ。それにデスゲーム宣言される前に200人近く死んでるんだよ。ビギナーが死んだのはほとんどがゲーム開始前なんだよ。それに此処でテスターと確

執作ってどうするんだよ。あんたの変なプライドの所為でこのSAOから出るのが遅くなるかもしれないんだぞ」

此処で話を切り周りを見回す。所々で顔を顰めているが静かに聞いてくれている。

「これを見てくれ。これは鼠の攻略本だ。β版と改訂版がある。結構βテストの時と仕様が変わってるがそれでも細かく書いてあるんだぞ。これだけあれば変更が入っている事は分かっているのにそれでも検証しているんだ。文字通り命をかけてな。これでもまだβテスターの事を悪く言うのか？」

「そのにいちやんの通りだ。βテスターは見えない所で動いてくれてる。お前の怒りはお門違いだぜ」

と俺に続いてスキンヘッドの男が言う。

モヤットボールは勢いを削がれたのか静かに戻っていく。

舞台には少しホツとしている青髪。少し違和感をかんじる。

「じゃあ今から6人で1パーティ組んでくれ。そうじゃないとボスには勝てないからな」

しまった、と思った。俺はボツチだし悪目立ちした後では誰も仲間に入れてはくれないだろう。仕方がない帰るか。

おい、ちよつと待ってくれ

バカな事をしたかもしれない。でもこれでビギナーとテスターの確執は減ったはず。

おい、そのあんた。俺と組まないか

鼠には申し訳ないがこのまま帰るしかないな。

だから待ってって

でもなんて言って誤魔……ゴホン、説得するかな。

「いい加減に反応しろ」

いきなり腕を掴まれる。さつきから誰かを呼び止める声は聞こえていたが俺の事だったのか。

俺が振り向き声の主と目が合うと声の主は一瞬固まり息を呑んだ。

「俺はキリト。一人なんだから、俺たちと組もうぜ」

俺たち？後ろにはフードがいる。フードを見て思い出すのはこの前の自殺志願者。もしかしたらあいつなのか？と思ったが口にはしない。

「いいぜ、キリト。俺はアハトだ」

見た感じソロで此処まで来たのだろう。こいつは出来るし、手札になる。そう思いながらパーティー申請にYESを押す。パーティーが組み終わると解散となった。

結局攻略会議らしい会議してねえ。最後に攻略本最新版が出たから目を通しておい

てくれたとき。余裕ないな、あいつ。

しかも明日の正午に攻略開始だとか何で周りの奴らはもつと慎重にならないんだよ。その後キリトとフードと少し連携の練習をして、アクシデントもあつたがなんとか終わる。

今日の事を鼠に報告すると

全部知ってるよ、見てたからね

などとほざきやがった。

そして俺たちの第1層攻略がスタートする。

そうして俺の始まりは終わりを告げる

青髪が扉を開く。そこにはただ広い空間、玉座の間が広がり正面の大きい椅子には何かの影が。

俺たちは武器を構えゆつくりと近づいていく。その差は50メートル、まだ全員入っていない。

45メートル、ラストの1人が扉の中に入った。

と同時に今まで身動き一つ取らなかつた巨体が勢いよく飛び上がりこちらに来る。

持っている武器は斧。腰にもう一つの武器が挿してある。βテストと同じならこれはタルワールのはずだ。

少し刀身が真つ直ぐすぎる気もするが気のせいだと思うことにする。

開幕の一撃であるロードの叩きつけは不発に終わる。それと同時にセンチネルが三匹現れた。

行くぞ

そう短く告げ地面を蹴りセンチネルの後ろに回り込み目をそっと抑える。此処までにかかった時間は3秒。一瞬にして目の前が真つ暗になって驚いたのだろうセンチネルの動きが止まる。そのまま曲刀で首を搔つ切る。センチネルはポリゴン片になって消えていく。

辺りは唾然とする者、驚きの声を上げる者の2種類で埋め尽くされた。

「ちよ、アハト。俺にも戦わせてくれよ」

「じゃあ1匹任せるぞ。お前はいい」

そうやって1匹のセンチネルを任せ、フードとともにもう1匹を狩りに行く。本当は1匹だけでいいのだが他の担当が動かないのだ。

フードが突き俺が攻撃を弾く、それを3回繰り返すとまたもポリゴン片になって霧散していった。

後これが3回も続くのか……………。

特に変わったこともなく狩り続けているとロードのHPバーのラスト一本が赤く染まる。ロードは斧を捨て新しい武器を取ろうとする。

青髪が口を開く。此処は全員で囲んで一斉攻撃のはずだ。そう思っただけで走り出した俺の耳に届いた言葉は

「後一息だ。此処は俺に任せてくれ」

という言葉だった。

それに従う馬鹿ども、どう考えてもおかしいだろその命令。何で全員動きを止めるんだよ。

青髪と一瞬目が合った気がした。いや俺じゃなく後ろにいるキリトとかもしれない。だがあれは笑っていた。しかもあれは嘲笑う目だ。

今はそんな事どうでもいい。青髪が死ぬ。まだ彼奴は気付いてないようだ、ロードが抜いたのはタルワールでないだけでなく曲刀ではない。野太刀という事に。

「下がるんだ！」

俺の声と共にあげられた声。

それを無視し突っ込んでいく青髪をロードはニヤツと笑い構えを取る。あの構えは《旋車》。きつとあの後には《幻月》、《浮舟》と続く。

俺はさらに加速する。

ロードの回転斬りで逃げ遅れた三人が巻き込まれる。

まだだ、まだ間に合う。

ロードの振り上げで宙に浮かぶ青髪。

頼む間に合ってくれ。

そう思いながらボス戦で初めてソードスキルを使う。

《フェル・クレセント》

横に一振りの一撃が運よく束縛を勝ち取りソードスキルをキャンセルさせる。高く上がった青髪は部屋の端まで吹き飛ばされそれをキリトがキャッチ、そのままポーシヨ

ンを飲ませようとする。彼奴のHPがほとんど残っていたのならギリギリ間に合った筈だ。回復は任せ、俺は後始末だ。

頭の中でカチリ、と何かの音がした。

さつきまで火照っていた身体が一気に冷え視界がクリアになり、ボスの一挙一動で動きが手に取るように理解できる。

そこからは一方的だった。

野太刀を持っていた手の腱を切られ武器を落とすボスに両足の腱を切り跪かせる。さらに腕を斬り落とし地面に額を付かせ意地で起き上がろうと挙げられた顔を一闪。残り数ドット、俺は優しくロードの首を斬り落とした。

俺の視界に浮かぶ『Congratulations!』と『You got last attack!』のアイコン。俺はさつきとそれを閉じる。と再びアイコンが。今度はレベルアップを告げるものだ。

辺りの奴らはまだ呆然としている。勝った現実を受け入れられてないのだろうか。それとも俺に怯えているのだろうか。

「アハトお疲れ」

「アハト君お疲れ様」

二人の声に何故かホツとする俺だったがこの場の雰囲気のでいで気を許せていない。

「なんでや。何でディアベルはんを見殺しにしたんや」

この声はモヤットボール。つて事は青髪は死んだのか。

「彼奴らボスが持ち帰る武器の変更を知ってたんだ。だからすぐに反応できたんだよ」

モヤットボールのパーティの1人がさらに言った。

辺りから、そう言えばとか、まさかななどの声が聞こえてくる。

此処から如何する。手札は沢山ある。ただ誰かを犠牲にしてしまうものばかりだ。それに上手くいく光景が浮かばない。

「見殺しだと、馬鹿にしてんのか。全く動かなかったお前らの方が見殺しにしてるだろ。」

第一にお前ら可笑しいと思わなかったのかよ。何でリーダー様は一人で特攻したの
かってな」

「それは思ったけどディアベルはんの命令は絶対やから」

「甘いんだよ。彼奴はこの部屋に入るまでに誰一人欠けずに勝つと言ったんだぞ、それ
は如何した。普通はとりかこむ場面だっただろ」

そ、それは……

やはり違和感があったみたいだ。後一息でこいつらは落ちる。

「それを奴は自分の欲の為に単独行動をとり、β時代の情報だけで慢心し、そして死ん
だ」

「彼奴が攻撃された時に如何して誰も助けようとしなかった。助ける為に動いた俺たち
を糾弾する資格がお前らにあるのか」

「じゃあ、如何してあんた達は武器の変更に気づけたんだ」

モブの1人が疑問を口にする。周りからも説明を求める声上がり始める。

「逆に曲刀使いに聞くが如何して気づけなかったんだ。如何考えても曲刀にしては真っ直ぐすぎるだろ」

周りの曲刀使いに視線がいくが直ぐに戻ってくる。きっと仲間の非を認めるよりも俺に責任を押し付けたいのだろう。ほーら簡単だ、だんだんと誰も傷つかない世界が出来始めていく。

「如何してリーダー様があんな行動したか分かるか？それはモヤットボール、お前の責任も少なからずあるんだぞ」

「なんでや！わしが何したつちゆうねん」

「攻略会議でβテスターを糾弾しただろ。

あれからリーダー様の様子が変わったんだよ。早くこの場から立ち去りたさそうにな。

だから話し合うこともなく会議が終了した。

そして奴は見せたかったんだろうな、βテスターだからこそ俺らの上に立って引つ張っていくぞっていう意気込みを」

自分にも責任がある。そう思つて頭の中がゴチャゴチャになったのだろう。モヤツトボールは落ちていた得物を取り俺に飛びかかってくる。

目を充血させ奇声をあげている姿は見るに耐えないものだった。

めちやくちやな動きで一振り一振りがバラバラだ。こういう時ほど規則性が見つかりやすい。俺はゆっくり観察しながら剣を避け続ける。此処であたるのは楽だがそうすれば奴の心が壊れ死ぬだろう。

モヤツトボールがモーションを取る。

《レイジスパイク》

軌道が読みやすい技で良かった。攻撃を避けるとモヤットボールの目を左手で隠し、右手で奴の腕を持つ。

今、自分の首に自分の剣を当てているのだが前が見えず冷静さをかけている奴は気づいていない。奴の首から出血を表す赤いエフェクトが微かに出てきた。

「お前らは弱い。だからせめて俺に一太刀入れられる位にはなつてくれよ。そうすれば俺が自由に動ける」

周りの奴らは一言も発しない。それもそうだろう。

ボスを一人で圧倒したのだから。

だがこれでは団結できない。まだ、まだなんだ。奴ら、攻略組に火を点ける言葉はなんだ。
.....

なんだ簡単なことだった。やっぱり俺がこの世界でも悪者になれば良いんだ。そうすれば誰も傷つかず、団結出来るだろう。

すまない、雪ノ下に由比ヶ浜。如何やら俺はまだ変われないらしいわ。短い間だったが鼠にも悪い事したかな。

「俺は2層のアクティベートに行く。青髪の無駄死にの所為で辛気臭いこの場所に長居する意味もねえしな」

目が変わった。畏怖の視線から怒りへと。やっぱりこれが一番簡単だ。俺が敵になればいい。共通の敵の存在が団結には一番だ。

俺はL Aボーナスの《コート・オブ・ミッドナイト》を装備する。

「おーっと、俺の後ろを狙うのは良いが今のお前らじや俺を殺すどころか次の街に着くまでにザコモブに殺られるぞ。死ぬ覚悟がない奴は帰るんだな」

そう言つて背中を向け歩き始める。

おい、アハト！

キリトの声がする。それと同時に俺は隠蔽を発動し立ち去る。もう誰の目にも映っていないだろう。

パーティーから抜けますか？

YES / NO

躊躇わずにYESを押し鼠とのフレンド登録も消す。これでいい、俺が関わると彼女らまで敵意を買うことになる。これまでと変わらないことだ。逆に今までがおかしかったんだ。自分にそう言い聞かせた。

やはり俺は再び独りになる。

そうしてアルゴはアハトと2人きりになる

アクティベートをすませた俺は急いで街から出て情報収集をする。

出てきたモブを一匹残らず倒していることとボスのL Aのおかげで俺のレベルは18まであと少しというところに来ていた。このレベルなら7、8層までの安全マージンは取れているだろう。

人間しようと思えば何でも出来るようにアクティベートをした日から4日で街から西半分を全て調べることができた。

当然この街の周辺エリアを調べまとめあげた後にだが。

確か攻略本の原案を作り終えるまでに丸一日かかったんだよな。つて事は実質3日で半分調べたのかよ、俺。

わかったことと言えばこつち側には迷宮区は無い事、エリアボスはおらず、ボス情報は一つしか得られなかった事。あと美味しいクエストが2、3あったって事くらいだ。

何故そんな無茶をしたか？そんなの決まっている。

キリトやアスナからは逃げられる自信がある、でもあの鼠からは逃げ切れる気がせ

ん。

つか逃げたところですからすぐ見つかりそうだし捕まった後が怖い。

まあ貢ぎ物又は賄賂と思つて貰えばいい。

「にしても久しぶりの圏内か。西側の攻略は全部終わったしこの調子で東側の情報もさつさと集めるかな」

隠蔽を使って街を歩いていたのだが圏内と言う事で気が緩みすぎたようだ。言葉が出てしまい一瞬だけ隠蔽が消える。

不味い

そう思つてすぐに隠蔽をした俺は悪くないはずだ。だが実際はそれが悪手だった事に俺は気づかされる。

俺の索敵に急に走り出した二つの反応があつたのだ。

おそらくこの二人はキリトとアスナだろう。

鼠に気づかれなかつただけ良かった。彼奴らだけならまだ逃げられる。

取り敢えず俺は装備していたLAのマントを取り外す。

これで視覚的には見つけられにくくなった。スキル面でも俺の隠密を気づける奴はまだいないだろう。

後はどうするか……………。

これも俺の欠点の一つだった。

熟考している間は時間の経過を忘れてしまう。

「キリトくん、アハトくんを見つけたわ」

「本当だ。アハト、ちょっと俺たちとお話ししようぜ」

俺の返事を聞かずにジリジリと距離を狭めてくる二人。俺は予め考えていた手に出る。

後ろへ全力で飛び退くとあの二人もつられて全力で飛びついてくる。俺のバックステップと奴らの前進は互角か俺が少し早いくらいだ。

後はタイミングを計って前傾姿勢になっている2人に向かって走り出すだけ。常に受け手になっている奴らでは反応できないはずだ。

そのまま抜ききると今度は隠蔽を解かないように細心の注意を払って街の中を疾走した。

彼奴らのカーソルは……と、さっきの場所から動いてない。
とりま、宿にでも戻るか。

「ヤダって言ってるダロ。オイラは売った情報で恨まれるのはイヤナンダ。サツサと帰ってクレ」

「何故でござる。拙者たちにはそのユニークスキルが必要でござる」

「金はちゃんと出すし恨まないと行ってでござるよ」

「情報屋、アルゴ殿。拙者たちに『体術』を教えてもらえる場所を教えてください」

俺はそのまま逃げたかった。普段の俺なら

彼奴らびったりハモってんじゃん。なんなの、ホモなの。

と軽口を叩いて素通りしただろう。でも今一番会いたくない奴が絡まれている。つは俺の隠蔽を破る回数が一番多い。

うん、サツサと逃げよう。

走って逃げよと踏み出した瞬間に何かに腕を掴まれ急ブレーキをかけることになる。誰かってよそよそしい、だって。俺もわかつてるけど厄介ごとに巻き込まれたくないんだもん。

八幡ちよつとくらい信じてない神様に縋っていいよね？

とへんなことを考えている間に事態は悪化していく。

「アハト！悪いネ、オレつち今から彼とデートダカラ。じゃ」

そのまま引き摺られていく俺だったが後ろから小さい声で

「ゲーム内でも付き合っているとキャリア充爆発しろ」

と言っているのが聞こえた。最後までキャラで通しきらないのかよ。

つかマジで勘弁。リア充じゃねえしこのまま行ったら俺確実に死亡コースだ。……今から逃げればセーフだよな？

いや、待てよ。俺は西半分の情報ばかり集めたし、今も鼠を助けたんだ。これなら軽い説教で

ガチャ

済むは……ず……

って今のガチャって何？現実を見るのが怖すぎてたまらんのだが。なんか首に冷たいものが巻かれてるし……。って冷たいものが首に、まさかこれって」

「ハハハ。熟考したら周りを見れなくなるっていうのはやつぱりアハトの欠点だね。あと独り言を言う癖も。

ていうかアハトは首輪が似合いますよ。私、ペットにしたくなってきました」

不味い。一見鼠の話し方はいつも通りだが何処か攻撃的で上からになっている。結構キレていらっしやるようですね。

「鼠、これはこの階層の西半分のデータだ。だからこの首輪を外してくれ。それに俺は養つて貰う気はあるが施しは受けない主義だ。ペットに成り下がるつもりはない」

「へーえ。よくこの4日間で半分も調べ上げたね。私が採点してあげるよ」

そう言った鼠は俺のまとめた紙束を一つ一つ読み進めていく。

これが編集さんに原稿を見られている作家の気持ちなのだろうか。紙をめくる音しかない、いつもの俺ならこの静けさも大歓迎なんだが妙に落ち着かない気持ちにかられてしまう。

「ナア、ハーちゃん。オイラのパートナーになってくれヨ」

重い口を開いて発された言葉に俺は驚きを隠せなかった。でも俺は敢えて

「仕事モードになってるぞ。」

それで俺のまとめた情報はどうだったんだ。それに俺のセリフに反応してくれよ」

「オット、質問には答えてくれないノカ。文句無しの合格だつて言いたいけど私は実際に見てないしなんととも言えないよ。ただ君の情報、見やすいし今みた限りでは満点だ」

だから今から行つてみて正確性を確かめようと思う。

そう言つて立ち去ろうとする鼠。

そのまま去つてくれ。そうすれば自由だ。

てかやつぱり俺のセリフに反応してくれないんだな。

そんな俺の甘い考えは振り返つて近づいてくる鼠によつて壊される。

「消されちゃったけどもう一回フレンド登録、してくれるよね？」

涙目と上目づかいのコンボだった。あのあぎと可愛い後輩のおかげでこういうアピールには慣れてんだよ。そう簡単には落ちないぞ。

「ねえ、アハト…… お兄ちゃん？」

さらに追い討ちをかけてくる鼠は首をちょこんと傾げながらだった。

マジであぎとい。

最近鼠にいつもとスキルが発動してきていた俺には効果覷面だったようだ。送られてきたフレンド申請にYESと答えてしまう。

まあいいか、出来るだけ関わらないようにすればいいだけだし。

「じゃあな、鼠の。俺疲れたし寝るわ」

「何いつてるのアハト。一緒に検証に行くに決まってるでしょ」

ハ？八幡何言われたのか全然分かんない。一緒に？けんしょう？何それ美味しいの

?

「ちよつと待つてくれ。美味いクエも少し無かった。それでいいじゃねえか。なんで俺も一緒に行かなきゃなら………」

「へーえ。今からキー坊とアーちゃんを呼んでお話しなきゃだねア・ハ・ト」

少し治っていた鼠の怒りが再び、いやさつきよりも強くなっているのがわかる。仕方ない俺も自分の命は大切だ。

「わかった、その代わり飛ばすぞ。時間は1秒も無駄にできない」

俺の返答に満足したようで満面の笑みで頷く鼠。それから俺たちは西半分の情報より正確にするために走り出した。

「この家が最西端だ。まあ入ったところで何のイベントも起こらなかったから目標なん

「だろろうよ」

「そうなんだ。中に誰か居たの？」

「いや、誰もいなかった。……… おかしいな灯りがついてる」

「きつと何か必要なフラグがあったんだね。とりあえず入ってみよ」

俺は鼠に引つ張られながら入っていく。中には髭を生やし汚らしい布を身につけている男達で一杯だった。そんな男たちは

「おうおう、嬢ちゃんどうしたんだ」

「嬢ちゃんみたいな娘がこんなところに一人で来ちゃダメだぜ」

「そうだそうだ。悪い人に食べられちまうぜ」

「俺たちみたいな悪い人間にな」

クエストが発生したのだろう頭の上に？マークが出ている。

何かが変わだ。とそんなことを思っていると男達は鼠に飛びかかっていく。流石にこの人数では鼠も逃げられないだろう。そう判断した俺は武器を抜き鼠に一番迫っていた男を斬り飛ばした。

「誰だてめえ。俺たちに喧嘩売ろうってか！」

「悪いことは言わねえ。その女を置いて此処から去りなさいとにいちやん痛い目みるぜ」

奴らはいきなり現れた俺に驚いている。そのせいか罵声は飛んでくるが突っ込んで来ない。そんな時に

パリーン

と音がなり、青いポリゴン片が辺りに広がった。やっぱりおかしい。でも今は気にしてられない。

今なら鼠を逃せられる。

「おい、鼠。俺が今から奴らの気をそらす。だからお前は逃げる、分かったな」

そのまま室内で戦闘に入ったのだが狭い。

俺の得物が曲刀なのに対して敵は残り5人で全員が短剣持ちである。

不意打ちはもうできない。それに此処じゃ思いつきり武器も使えない。一番最悪なのは奴らが殺る事に対して何の抵抗を持っていないということだ。

俺の心を揺さぶるのはmobとは違うポリゴン片、俺のカーソルの色の変化だ。

それは奴らが人間だという証拠でもある。

だがこいつらはプレイヤーじゃない。ただ人の形をしたmobだ。そうとしか考えられない。頭ではそう理解している。だが思うように身体が動かない。

ならどうして俺のカーソルが黄色になった。

これでお前も犯罪者の仲間入りだ、もしかしたら初めての犯罪者かもな。

身体の内側から声が聞こえる。

煩い。今はこの状況を打破する策が必要なんだ。

このままかわし続けているだけじゃ俺がやられる。でも如何すれば……せめて奴らがプレイヤーじゃないと確信できれば……。

イエローカーソルになったお前が何を恐れてるんだ。1人殺したらもう何人殺そうが同じ事だろ。早く残りの奴らも殺れよ。

煩いっつってんだろ。

考えるんだ、如何すればいい。観察するんだ。

何言っただよ。攻撃が当たりだしてるじゃねえか。早くしないと死ぬのはお前だぞ。あんな奴らさっさと殺つちまえよ。お前なら余裕だろ。

その時扉が開いたと思ったら盗賊が2人、鼠を抱えた状態で入ってくる。

「リーダー、逃げた女捕まえやしたぜ」

「たく、すばしっこくて捕まえんの大変だったんすよ」

「すまない。お前らにしては仕事が遅いんで3人で楽しんだのかと思ってたわ。じゃああの目の腐った男の始末に加わってくれ」

「アイアイサー」

リーダーと呼ばれている男は鼠を受け取り1人で悠々とくつろぎ始めた。

「早く来ないとこの女が如何なつてもしらねえぞ」

その言葉を聞き俺は考えるのを放棄した。

カチリ

頭の中で何か音がする。ただ俺は衝動のままに動く事にした。

6人のうち3人が俺を取り囲むように並ぶ。そのまま各々が邪魔をしないように攻撃を繰り出し始めた。奴らのコンピネーションは完璧だ。だからこそ俺には攻撃を当てる事はできない。少しでも広いところにゆつくりと誘導していく。そして一列に並んだ刹那、武器を抜きその勢いで一閃する。

ゴン、ゴン、ゴン

3つ重い物が落ちる音がする。背が低くなった3人の盗賊は崩れ落ち地面に衝突する直前にポリゴン片に変わる。

「野郎ぶつ殺してやる！」

様子見でもしていたのだろう3人が一気に襲いかかってくる。さっきの3人とは比べ物にならないくらい速い。でもただ速いだけだ。まだ目で追えるし避けることもで

きる。

放たれる刃を紙一重で躲し続ける。

チャンスを待つんだ。いずれチャンスはくる、勝ち急ぐな。

かれこれ5分はたった。少しずつだが奴らのスピードが落ちていくのを感じる。

敵の1人が痺れを切らしたのか正面から突っ込んでくる。

遅い

曲刀で脚を斬り裂いた。

これで動けないだろう。そう思つて意識する敵を2人にする。時間が経つにつれ鋭くなつていく感覚が2人の動きを完全に捉える。1人には振り上げを食らわせ、振り下ろしをもう1人に食らわせる。

他の奴は継続ダメージで死ぬだろう。

あとは親玉だけだ。そう思つた俺は一気に斬りかかる。

が奴が隠し持っていた短剣に弾かれ反対の手に持つている短剣を俺の喉目掛けて突き刺してくる。

バックステップでギリギリ避けると追い打ちと言わんばかりのボスの攻撃を曲刀で弾く。一進一退の攻防戦がつづくが俺の戦い方ではあまりにも不利で少しずつだが確実にダメージを蓄積される。

「さっきまでの勢いは如何したんだ。もう終わりか？」

一瞬、一瞬でいい。奴に一瞬の間ができれば……。

その瞬間周りから青いポリゴン片が飛び散る。

この一瞬を待っていた

ボスが青いポリゴン片に一瞬だけ身体の動きを止めたのを俺は見逃さなかった。

スキル《オーパル・クレセント》

今の俺が出せる最大火力の3斬撃を発動させる。こいつの難点はスキル発動までに時間がかかってしまう事で今のように相手の意識が俺から離れている時にしか使えな

い。まあその代わりに火力はピカイチなのだが。

俺の放った3連撃はボスの体に吸い込まれていき、勢いそのままに鼠に駆け寄る。アイコンを見るとイナズママークがある。どうやら麻痺らしい。よかった。微動すらない鼠が生きていることを確信できて安心する。

俺は手持ちの解毒ポーションを口に突っ込んだ。

ボキ

身体からそんな音が聞こえた。俺はそのまま壁を破壊し、外に放り出される。

クソツタレまだ死んでなかったか。

視界に映る俺のHPバーは既に赤く染まっている。今の感じから俺の左腕は折れている。唯一の救いは痛みを感じていない事だろう。ポーションを飲んでる暇は多分ない。答えは決まってるよな、ここで奴を倒す。

壁に新しい穴を作って飛び出してきたのはHPバーのラスト一本を黄色に染めてい

る狼だった。

『ウエアヴォルフズリーダー』

狼人間のリーダー、こいつらはやっぱり敵mobだったんだな。なら遠慮はしない、これで決める。

俺はmobに向かって走り出す。それに釣られたmobも俺に向かって走り出っ
て来ている。

最後は至って俺らしくいく。
全力で加速しそのまま跳ぶ。予想外な行動に一瞬の戸惑う狼男。俺は再び姿を隠蔽し戸惑っている敵の背後を取る。流石は狼、匂いで俺が背後にいると気づいたようだが遅い、俺は奴の首に《フェル・クレセント》をブチかました。

Congratulation!

気が付くと目の前には勝利を祝福する文字が、辺りは青いポリゴン片で満たされてい

る。

俺は……

「俺は生きているのか」

ほっとした拍子に意識を手放しそうになる。

まだだ、まだ鼠が。

俺はポーシオンを啜えゆつくりと覚束ない足取りで家の中へ向かう。

鼠は先ほどとは違い、私は生きていると主張するかのように胸の辺りが上下している。

「ア……ハト、アハ………ト」

俺らしくないのは重々承知している。出会ってたった一ヶ月半の相手に此処まで感情移入するなんて馬鹿げている。そんなことわかっている、でも俺は、それでも俺はこの文字通り生死を賭けて生きている彼ら彼女らに惹かれてしまっている……気がする。自分に正直に生きなければ死んでしまうような世界で名前を呼んでもらえること

にこの上なく喜びを感じてしまったんだ。

きつとさっきの戦いで高揚した気持ちがまだ落ち着いていないんだろう。雪ノ下さん、貴方が『理性の化け物』と称した俺はこんな簡単なことで感情が乱れてしまうようなガキなんですよ。

だから、今だけはこの気持ちに酔いたいんだ。

俺はアルゴの手を軽く握り

「俺なら此処にいる」

と呟いた。

もう限界だ。今度は抵抗することなく暗闇の中に意識を沈めたのだった。

貴方たちは一体何処で何をしてたの！ゲームバランスが崩壊するところだったじゃ

ない。

いいじゃねえかそんな堅いこと。それより面白いものを見つけたよな○○○。

そうじゃな、あやつ儂を使わんでもスキルの一歩手前までにしおつた。

へえ、二人が褒めるなんて珍しいね。僕も言ってくれたら一緒に行ったのに。

貴方までそつちに付くの○○○？

いやいや、僕はどつちにもつかないよ。ただ見たかつただけ。

全く、ねえ○○○からも何か言ってやってよ。

エリアボスに力を与えるやり口はまあ許す。だが与えすぎだ。挑んだ者を問答無用に斬り殺すようなレベルは既にゲームバランスを崩している。今すぐお前から消してこい。

何言ってるんだよ○○○。あいつなら死んだぜ。プレイヤーに殺られたよ。

そうなんじゃ。それはもう急所を突かれ続けて死んでいったのう。

そんなに精度が高かったの！もしかしたらその人が私のご主人様になるかもね。

いや、彼奴は譲らねえよ。俺がいただく。

いや拙者が。

ほう、〇〇に此処まで言わせるとはなかなか強いんだな。見てるぶんにはいいがあまり干渉するなよ。あとは頼んだ〇〇。

以上がメンタルヘルスプログラム試作1号が盗聴できたものである。一部は高位のアカウントによりガードされていたため穴抜けになっている模様。

データ保存スタート

..... 10..... 18..... 36..... 68..... 100%

データ保存完了

バックアップ製作。データを私の奥深くに格納..... 終了。

これより仕事に戻ります。

次の人は..... この人は此れまで見てきた人とは違います。この人はなぜ他の人とは違うのでしょうか？この人のデータも集めましょう。

『はい、みなさーん。じゃあ先生は少し狩りに行ってきます。じゃあサーシャさんあとはよろしくお願いします』

この場面はサーシャという女性に子供達を任せている場面ですか。
次はつと

『……………先輩、私頑張ってるんですよ。だから早く私を見つけてください』

圏外での感情データ、こんな感情は初めてです。このデータは面白いですね。
移動を完了しました。

このファイルには現在4人のデータが入っています。

こうして2層攻略の準備が進む

.....ト.....ア.....ハト.....

何かが聞こえる。でもまだ寝ていたいんだ。それに俺を呼ぶ奴なんていないしな。別の誰かだろう。

「アハト！」

体が揺すられる。どうやら俺のようだ。

まだ目を閉じながら寝る前の事を思い出すと、勢いよく体を起こす。予想通り目の前にいた鼠の肩を掴み

「おい鼠、身体は大丈夫か！」

やはり俺らしくない。此処まで俺が感情を見せるようになってしまったのはやはりあの場所のせいだろう。

「私は大丈夫、それよりアハトの方が大怪我してたけど大丈夫？」

「ポーションは飲んだしHPは回復したさ。問題は圏内に入れなくなった事だ」

「どうということ？と鼠から返された言葉。

つか、見たらわかるだろ普通。

「俺のカーソルはイエローになっち…… まった？

って何でグリーンに戻ってるんだ」

「ちよつと今の発言はいただけないなあ。キリキリ吐こうねアハト」

その後俺は自分のカーソルが黄色になった事、盗賊のリーダーが狼男でエリアボス

だったことを話した。そして俺はドロップアイテムを具現化する。

「今回は助けてくれてありがとう。でももし次にこんな事があつたら私よりも自分の命優先にしてよね」

「まあ善処する」

「じゃあ暗い話は此処まで。この鉱石私を見た事ないね。もしかしたらレアな新鉱石かも。後は短剣、名前は『狼牙』……………これも始めて聞く名前だよ、ってなんだよこのステータス、耐久無限になってる……………あ、でも攻撃が低すぎだね。使い物にならないよ」

「そうか、後は此れだ」

そう言つて俺は三枚の羊皮紙を出す。

「これが今回のボス情報だ。

ボスの弱点は王冠、ブレスを撃つ、ブレスには麻痺付与、らしい。
わざわざブレスを2回説明する言い回しに違和感があるがどう思う?」

「そうだね。もしかしたら今回も何か起こるかもしれない。でもこれで全部集まった事になるんだよね」

「そういう事だな」

俺はそう言っつていつも通りを装う。俺が想像した最悪の場面を振り払うかの様に。

それにしても俺のカーソルは確かに黄色になった。なのに今じゃグリーンに戻っている。あれはなんだったんだ……。

「そういや、目が腐ったプレイヤーを知らないかって依頼が来てるんだ。

アハトの事だと思んだけど情報を売っていいかい」

「あー、売らなくていい。ただ明日会えるようにセッティングしてくれ。

ただし、お前は付いてくんよ。」

もしかしたら俺に復讐する為かも知れん。お前がいたら足手まといだ」

「あはは、違うないんだけどそこまではつきり言われると辛いなあ。分かった、じゃあ今からメッセ飛ばして落ち合う事にしよう」

俺と鼠は重い腰を上げ激闘の行われた家から走り去った。

約束の場所は圏内にあるとある喫茶店。

約束の時間よりも30分も早く着いた俺はローブを被りコーヒーを啜りながら思考を巡らせる。

これは罠だろう。まあ圏内だからPKは起こらないだろう。それに何人で来ようが俺に追いつける奴がいるとは思えない。

だが違和感が残るといえばただ一つ。攻略組の奴が俺に報復するならばハナっから《アハト》を呼び出せばいい。

だから引つかかる。俺の名前は悪名として広まっているが他の情報は全くと言って

いい程出回っていない。

攻略組の誰かなのかそれとも準攻略組か……………。

腐った目……………か……………。あの場所でそうやって言われてたな。

懐かしい。

まだ閉じ込められて二ヶ月くらいしか立っていないというのももう遠の昔の様だ。

「貴方がアルゴさんが言っていた人ですか？」

考え事をしていた俺に問われた問いは何処かあざとさが見え隠れしている。そして少し懐かしさを感じるこの声。

まさかそんなことあるわけがない。

俺は顔を上げる事が出来なかった。見てしまうと彼女がこの世界にいるという現実を受け入れてなければいけないから。

「ああ、そうだ。あんたはどうして目の腐った奴を探してるんだ。友達か何かか？」

「先輩を探してるんです。βテストに選ばれたのを自慢げに話してるの聞いたんでこの世界にいるとは思うんですが……この2ヶ月見つけるところか情報すら手に入らなかった。」

失礼な事は理解しています。私に顔を見せていただけませんか」

「どうしてその先輩とやらに執着するんだ。」

今の会話だけでも分かる、あんた程のコミユ力なら直ぐに仲間を作れるだろ」

「いえ、先輩じゃなきゃダメなんです。だからお願いします」

深々と頭を下げる彼女。俺はそんな彼女の行動に驚いている。

彼女と俺の関係……利用し利用される関係のはずだ。彼女は俺のワガママで生徒会長になった。俺は償いのために彼女の仕事から私事迄幅広く手伝いをしている。

そんな友達未満の関係を俺を探すためにだ。

「最後に聞かせてくれ、どうしてその先輩とやらにそこまでこだわるんだ」

「先輩は自分が悪役になる癖があるんです。だから首輪を繋いでおかないと心配で……。って冗談は置いときますね。本当は大切だからです。先輩は私を救ってくれた、私にとってはヒーローなんです。だから私は先輩のそばに居たいんです」

少し照れながらも目には迷いがなくただ覚悟だけが見えた。

真剣な瞳だ、嘘では無いのだろう。だからこそ俺は尻込みをしてしまい、言い訳を考
えてしまう。

彼女は葉山隼人が好きで俺はそれの手伝いをしているのだ。だから先ほどの言葉に
は嘘は無いが裏が在るのでは無いかと。

俺は

「悪いがお前は勘違いをしているぞ。俺はお前の事を知らない」

と答えるつもりだった。俺のようなエリートぼっちは一を聞いて十の裏を読むんだ。
と突然俺の肩に手が置かれる。

「ねえキリトくん、アハト君が女の子と密会してるんだけどどうする」

「そうだな。取り敢えずそのまま捕まえててくれるか」

より肩を掴む手に力が入る。早く逃げたいが目の前の呆然としている彼女を放つては置けない。

唯一の救いは俺を掴んでいるのはアスナだけという事だ。一瞬の気の緩みがあれば逃げられる。

来いキリト、そして俺に手を伸ばして来い。

キリトが俺の服に触れる。お互いがちゃんと掴んでいると思いきが緩む一瞬。

今だ！

俺は自分の速力全開で走り出す。

「すまん」

すれ違い様に発した言葉は届いただろうか？彼女の事だ、俺の情報を直ぐに集められるだろう。そして俺のボス戦での行動を知るのも時間の問題だ。

「アハトさん………ですか。何処か先輩に似てた気がする」

少しアハトさんについて調べてみようかな。

俺が圏内を走り回っていると、少し遅いがそれでも俺に付いてくる奴がいた。

「鼠、『体術』ってのは何処で覚えられるんだ」

「どうしたのいきなりそんな」

「俺はもつと強くなる必要があるんだ。頼む」

「ハア、仕方ない。私とアハトの仲だしね、タダで教えてあげるよ」

それから俺は2日で『体術』を取得し、1日で東側を全て、3日で迷宮区を完全に網羅していた。そんな俺は二層最大の街の広場で攻略会議に参加している。『隠蔽』を發動し周りの視線を避けながら黙って話を聞いている。モヤットボールの姿は……………居た。

「大まかな話は今した通りだ。誰か質問はあるか？」

自称一層で死んでいった青髪、ディアベルの意思を継ぐもの、のリンドという青髪のプレイヤーが質問を受け付ける。

周りからは特に手も拳がらず張り詰めていた空気が緩み始める。

「じゃ、オレツチの話を聴いてくれ」

そう言つて手を挙げる鼠。鼠の発言に緩み始めていた気を引き締める姿は一人一人に攻略組としての自覚があるがゆえだろう。

「オレツチはボスに関しての情報ヲ手に入れタ」

それから鼠が説明をしていく。攻略組の面々は感心すると同時に微かだが安心したようにも見える。

辺りからは、麻痺付与のブレスか…… 事前に知れてよかった、などが聞こえてくる。

さあ此処からが茶番のスタートだ。感情が露わになるこの世界で何処まで演技が出来るのか試してみますか。

「ちよつといいか？」

俺が声を出した瞬間に『隠蔽』が解け、視線が集まる。中には今にもとびかかってきそうな奴までいるようだ。

「ナンダ、おかしな点でもアツタカ？」

「お前の事だ、情報は正確なんだろう。β版ではどんなボスだったんだ？」

「ナト大佐とバラン將軍の二体の討伐だ。大佐の方は中ボス扱いだったカナ。

最後にダガ、これはβ時代の情報だ。変更点があるかも知れないカラ気を抜かないでクレ」

「アルゴさん、貴重な情報をありがとう。アルゴさんが言った事をちゃんと胸に留めて明日の攻略を成功させよう。じゃあ今日は解散」

リンドが話を締めて解散を宣言する。俺は再び『隠蔽』を発動させて立ち去ろうと思っていたがいつの間にか俺の隣に来ていたキリトに腕を掴まれる。どうやら鼠は鼠でアスナに捕まったらしい。

「それでさっきの茶番はなんだ？」

キリトの問いに鼠が

「茶番ダツテ？オレッツチには意味分らないぜ」

「なあアハト、さっきの会話にどんな意味が隠されてるんだ。何故あんな茶番を打ったんだ？」

「鼠の信用を上げるためだよ。それに俺が言ったところで誰も聞きやしない。なら他の奴経由でつてことだ」

「そうだったのか、と納得するキリト。このまま話が終われば万々歳なんだが……………」

「それはそうとアハト君。今から私と楽しいお話をしなない？」

「そんなに上手くいくわけ無いですよね。」

「笑顔で俺に提案するアスナだったが目は笑ってないし、何より後ろに般若が見える。」

「どうしたものか、この状況を打破するためには……………」

「スマンな、それは無理だ」

「どうしてダメなのよ。訳を言ってよ」

拒まれた事に憤怒して鬼のような顔をするアスナ。

頼むから俺にそんな顔をむけないで欲しい。まあ、雪ノ下や雪ノ下さんに比べたら全然怖く無いがそれでも嫌なもんは嫌だ。

「ただでさえ悪目立ちしている俺がS A O屈指の美少女プレイヤー、アスナと一緒にいるところを見つかるともつと目立つだろうが。俺は自ら恨まれるネタをつくる趣味はない。それにもう少しレベル上げしたいんでな」

そう言つて立ち去ろうとする。

アスナと鼠は何かブツブツ言っている。正直関わりたくない。キリトはただ運ばれてきた料理を食べている。

じゃあ、俺行くわ

そうやって席を立ちそのまま迷宮区へと向かう。

誰にも気付かれないように『隠蔽』を発動させ目標を設定し狩りに勤しむのだった。

やはり俺のboss攻略は何かが起こる

「あゝあ危なかった。boss戦の前日に武器の耐久が10切るとか」

マジで壊れてたら洒落にならん。

まあそのおかげであと少してレベルアップまでたどり着いたんだが……。ボス戦でレベルが上がるだろう。

そのまま宿に帰り、アイテムの整理、武器のメンテをして眠りにつく。明日も無事に生きられる様に戦闘のイメージを頭の中で巡らせながら。

「今回も定員まで埋まらなかったけど集まってくれてありがとう。この層では犠牲者を出すことなく攻略するぞ」

辺りからは気合いを入れるべく叫び声上がる。

リンドはbossの扉を開く。中から流れ出てくる冷たい風に身震いする俺。

何も起こらなければいいんだが……。

俺たちが全員入ると奥の穴からトールラス族が二体出てくる。

1匹は2m位だ。こつちがナト大佐だろう。その後ろからくる、そちらは3mくらいだろうか、のはバラン將軍だ。

俺たちのパーティー、アスナ、キリト、あとはエギルさんとその仲間の計6人で構成されている、は何故かこれだけで大佐の相手をしている。

攻略会議で俺以外のパーティー全員が

「大佐は中ボスレベルだと聞いた。それを1パーティーで相手するのは荷が重い」

と訴えたのだがやはり通らなかつた。

現在はboss部屋の広さを活かして二体を引き離して戦っていて大佐のHPは既に最後の一本で真っ赤に染まっている。將軍の方は2本目を削り切ったところの様だ。

今の所ブレスによる麻痺の被害者はおらず順調にいつているらしい。

違和感が在るとすればブレスを何人かが被弾しているのにというところだ。最後のバーになったら麻痺付与になるのだろうか。

これならいける、そう思った俺がソードスキルで大佐の息の根を止めると、エギルがデカイ声でこつちが終わったことを伝え、次の指示を仰ぐ。

リンドが俺たちに命令すると同時にとてつもなく大きい咆哮が辺りに響く。

プレイヤーは突然の出来事に動きを止めてしまった。

「な、馬鹿か。早く逃げないと將軍の攻撃が来るぞ」

キリトが怒鳴るが未だに気がぬけている状態の様だ。

將軍は足に力を込め跳び上がる。

俺は気づいてしまった。大佐と將軍が出てきた真つ暗な穴から明るい光が見えるのに。將軍が跳び上がった理由が、そして今まで誰一人として麻痺状態にならなかった理由が。

不味い。全員が將軍に目を奪われている。これじゃ全員が食らっちゃう。

「アスナ、すまないがあとは頼んだ」

アスナが驚いた声をあげ、振り向こうとする。俺はその隣を走り抜け、薄暗い穴に突っ込む。

辺りに広がる明るい光。俺は真正面からそれを斬りつける。

真つ二つに分かれた光はプレイヤーに当たらずに地面をえぐっていき壁にぶつかり白塵を巻き上げる。

ほつとするプレイヤー達は何とかバラン將軍の攻撃を避け一息つく。

「……………なんだ、なんなんだよあれは」

恐怖に慄く声が聞こえる。それもそうだろう。

穴から全長は5m程で、刃渡2mはあるだろう片手剣を持ち、腰に何かを指しているトーラス族の王があらわれた。

HPゲージは4本だがこれまで戦ったmobとは比べ物にならない圧力を放っている。それこそ殺気が赤い靄として視認できそうなほどに。気を抜けば殺られるそんな重圧だ。

「全員撤退だ。一旦引いて作戦を練り直す」

リンドはこう叫び、各々がboss部屋から撤退する。

「何を言っているのよ。アハト君を残していくというの！彼は皆の盾になったのよ！」

「だからどうした。一人の命と複数の命。どっちが大切か言わなくても分かるだろ。ましてあの《執行人》の命だ。誰も咎めないし寧ろ死んだほうが喜ばれるだろうさ」

「なっ！……… もういいです、私たちでなんとかします」

その言葉を待っていたかのように、キリトが王の元へ、エギルが將軍の元へ走っていく。エギルの姿を見て他の二人も將軍へ向かっていく。アスナは一足遅れながらも王

と対峙しているキリトに加戦する。

「何をしているんだ！」

君達まで死んでしまったら大きな痛手になる事はわかっているだろ。早く撤退するんだ！」

リンドの声が響く。

バカな事をしてるのは一体誰だよ。普通に考えたら俺を置いて撤退するだろ。

視界を遮る砂埃が立ち込める中、そんな事を思いながら俺は唯一動く右手で解毒ポーションと回復ポーションを口にする。

口の中が甘ったるいのと爽やかな風味で満たされる。

あと数秒もしたら身体が動くようになるだろう。

残って戦っているバカは5人。ただ動けるようになったとしてもこの人数じゃ撤退は難しい。やるしかない……か。

俺は思考を纏めて、ポーチから出したものを腰につける。それから身体を起こして一気に走り出した。

俺は王の所まで走り、背後から《オーパル・クレセント》を繰り出す。王が怯んだと同時に

「キリト、アスナ、お前らはエギルと一緒に將軍をやるんだ」

「でもアハト君一人じゃ……」

「この程度のボスなら一人で時間は稼げる。最後は集中放火で一気に畳み掛ける」

その言葉を聞き、残り少ないHPの將軍のほうへ走り出す二人。

硬直が解け、キリトへ攻撃しようと走り出した王に、腰に差してあった『狼牙』で《シングルシュート》を放つ。短剣は冠に吸い込まれて行き金属音が響く。

グアアアア

王の口からは悲鳴のような唸り声が溢れる。だが直ぐに反撃はない。恐らくだがスタンしたんだろう。

今の一撃で俺にタゲが移ったらしい。HPゲージを見ると今の一撃だけでキリトとアスナが減らしたのと同等の減りをしている。

耐久が無限の『狼牙』は投擲に向いている様だ。
俺はそう思いながら曲刀を使って王と刃を交える。

しばらくして遠くから何かが碎ける音がした。

「アハト、こっちは終わった。今直ぐ加勢するぞ」

キリトとアスナがこっちに来る。

これまでの偶に攻撃、回避メインで避けきれないものだけ弾くという戦法からスイッ

チを多用し、攻防にメリハリがある戦法に変わる。

その攻防の間で俺は短剣を拾い直し腰につけ直す。

いつも以上に緊張の糸が張り詰めた戦いが続いたせいだろう。精神的な疲れから二人への気遣いを忘れて一歩分早く動いてスキルを発動してしまう。

攻撃は躲されクールタイムに突入した。

「アハト君！避けて！」

スキル使用後の硬直はそこまで長く無い。本来ならば問題は無いはずだ。

しかし相手はボスで、紙一重の戦いをしていた俺たちにはそんな些細なミスでさえ命を落としかね無い。

現にボスの刃が弾かれる事なく俺の身体目掛けて振り下ろされている。

死んだな

俺の目に映ったのは駆け込んでくるキリトとその場でしゃがみ込み叫んでいるアス

ナ。

………
そして戸塚に城廻センパイ、雪ノ下さんに一色。由比ヶ浜、雪ノ下、小町が
浮かぶ。

ごめんな小町。お兄ちゃんそっちに戻れそうに無いや。雪ノ下、由比ヶ浜すまん。約
束遅れるんじゃないやなくて破つちまうようだ。

殺られる。そう覚悟した時に何か風を切る音がする。

グアアアア

金属音がした後辺りにボスの咆哮が響く。ただその咆哮は喜びによるものでなく苦
痛が滲んだものだった。

「助かった……のか？」

硬直が解け後ろに跳ぶ。何が起こったのか分からないが一先ず息を着き、扉周辺をみ
ると誰かが立っている。そいつが何かをしてくれたおかげで俺は生きているらしい。

「ネズハ！どうしてここに！」

「間に合つてよかつたです。《投擲》と《体術》を使いこなせるようになるのに少し時間がかかりまして……………。このように遅れての登場となつてしまいました」

ネズハ……………か。

間違つてたら恥ずいけど言つてみるか。

「ありがとう。助かつたわ、ナタク……………あと、鼠。お前いるんだろ、出てこいよ」

ネズハと呼ばれている少年は驚きの表情を見せる。

その後扉の影になつていた所から鼠が顔を出すと、いたずらつ子のような笑いを溢し

「ヤハハ。よく気づいたネ、はーちゃん。もしかしたら気づいてるカモとは思つてたケド声をかけてくるノハ予想外ダッタ」

「いつもちよつかいかけてくるお前が出てこないから気味悪かつたんでな」

ヤハハ、と笑い鼠が俺の所まで走ってくる。すると耳元で囁いた。

「絶対に生きて帰ってきてね」

俺は何も答えずに王の元へと走り出した。

残りゲージは1本半、こっちの人数は7人。タンクが3人でダメージディーラーが3人、遠距離主体が1人。バランスは悪くないどころか最高と言える。このメンバーならいけるかもしれない。

「ナタク、お前はブレスを警戒してくれ。奴はブレスのモーションに入る前に冠が光る。そのタイミングで冠に攻撃を頼む。王を倒すぞ」

その言葉で全体の士気が上がる。王が攻撃のモーションに入ろうとするとタンク隊が防ぎ前に、それ以外は俺、キリト、アスナが攻撃する。そんな感じで少しずつだが確実にHPバーを削っていく。

「ラスト一本だ。何か変化があるかも知れないから気をつけろ！」

キリトの声が響くと同時に王が後ろに跳ぶ。

冠が不気味な光を放つと同時に放たれたナタクの『チャクラム』による攻撃が冠に当たると確認すると全員が駆け出していた。何か起こるかも知れないと足が竦んでしまった俺以外は。

そんな俺だから気付けたのだろう。

「早く後ろに跳べ！」

まさかの状況だった。

ブレスは防いだものの冠が砕け散り、スタンするはずの王は怒り狂っている。そのまま何かを引き抜くとそこには禍々しい形をした曲刀が握られていた。

「トールグリム、アナス何してるんだ！一度引け！」

エギルが声を張り上げるが2人はそのまま突っ込んでいく。

俺は走り出していた。

どうか俺の予想が当たらないでくれ。

そんな俺の願いは無情にも叶わず、片手剣が蒼白く輝き始めた。

2人はその光景に驚き目を奪われ固まってしまふ、奴の攻撃範囲内だ。

普通、両手に武器を持っていると互いの武器が邪魔しいソードスキルは発動されない。それが俺たちプレイヤーの共通認識だった。現にそれがあつたために2人は止まらなかつたのだろう。

そのまま無情にも繰り出されたソードスキルを受けその場に倒れる2人。王はクルタイムに入る事なく、曲刀によるソードスキルでトドメを刺しに来た。

恐らく冠が壊された事によってスピード、威力共に上昇しているのだろう。防御出来なかつたとは言えたつた一撃でレッドゾーンになった2人は恐怖で顔を歪めている。

「届けえー！」

そう言つて放たれた《オーパル・クレセント》が相手のソードスキルを相殺する。バランスを崩した王はさつきのようにソードスキルを連続で放つ事なくその場に立ち尽く

している。クールタイムだ！

「キリト、アスナ、エギル今がチャンスだ。攻撃しろ！」

「「おう（わかった）」」

キリトは《バーチカル・スクエア》、アスナは後に彼女の代名詞となる《リニア》、エギルは片手棍のスキル《デストロイスマツシュ》でHPバーを削る。

俺はその間に恐怖で動けないでいた2人に回復ポーションを飲ませる。

いつまで経っても動かないのをいい事に俺は走り出していた。

奴のHPバーは残り一本でも残り半分を切っている。一か八かだがかけてみるのも良いかもしれない。bossのように武器が邪魔にならないように意識すれば良いだけの話なんだろう。

俺は短剣を左手で持つと構えを取る。

「何をすつつもりだ、アハト！馬鹿な真似はやめろ！」

俺がしようとした事に気付いたキリトが大声を出してとめる。

壁役が一人じゃ壊滅するのが目に見えてんだよ。此処で此奴を倒し切らないと誰かが死ぬ。

「俺は死にたくないからするんだ」

クールに、焦るな。俺は一人で誰よりも自分を意識してきた。それに誰よりもソードスキルを使ってきたんだ。上手く組み立てるんだ、終わりの態勢が次のスキルに繋がるように。俺ならできる、bossのように二刀でも扱ってみせる。

やはりお主は面白い

少しだけじゃが助力してやるぞい

頭の中で何か声がした。

「今はそんなこと気にしてられねえ」

そう呟いたと同時に俺は曲刀スキル《フェル・クレセント》を放つ。

いつも以上にリラックスして集中できているのが分かる。

王の懐で止まった俺はそのままの流れで構えを取っていた短剣スキル《ムーンスラッシュ》を、それが終わる頃にはまた曲刀が光っていて《オーパル・クレセント》を放つ。

残りは既に1/10を切っている。

と王はバックステップを取り息を吸い込み、胸を膨らませた。

ブレスが来る！

冠もない。使い慣れていない短剣ではとめる手立てはない。それに此処でスキルを繋げないと俺は当分動けなくなって殺られる。

俺は計算を止めて投擲スキル《シングルシュート》を放つ。運良く喉に刺さった事によりブレスを回避し、そのままソードスキル《ワイドシュナイダー》を発動させる。

つい最近覚えたばかりで距離と速さによって威力が変わる今の様な状況にうつつの技である。

王の胴体に一筋の紅い線が入る。そのまま俺はスキルの影響で走り抜け止まる。硬直が始まり動けずにいる俺はそのまま前のめりに倒れ、意識を手放した。

やはり比企谷八幡も人間である

俺が自分の意識を手放した日から早7ヶ月。

もう一度あのチート的な連続技が出来るのか試したがあれから一度も成功することはなかった。

気付いたら最前線は27層となつているなか俺は20層で狩りをしている。

攻略組を辞めたのかつて？違う、ただ用があつてこの層に降りてきたんだ。

最前線で戦っているものが下の層で狩りするのは狩場の横取りと言われて忌み嫌われる。そんな事はわかつているが武器強化の為にアイテムが必要なのだ。説明すれば納得はしてもらえらるだろうが面倒くさい。だから俺は誰も来ないだろう最深部で狩りをしている。

パリーン

俺は射程範囲内の敵を全て倒しきり、出てきたアイコンを確認する。

そこにはドロップ率10%以下のレアアイテム『ギフトスパイダーの鍵爪』と書かれ

ている。最後の一個となつてから彼此5時間籠つてやつとドロップしたのだ。

「……………やつと終わった」

そう呟いてしまったのかもしれないだろう。

コレで強化素材は全部揃つた。

なんかいちやもん付けられる前に立ち去るか……………。

そう思った俺は静かに20層の圏内に向かつて走り出した。

圏内まであと少しという所で聞いた事のない声と聞いた事のある声がある。

取り敢えず木の陰に隠れると耳を澄ませ、様子を伺つてみる。

どうやらキリトが指導しているらしい。気づかれない様に通り過ぎようとした時にキリトが視界に入った。

夜、27層の迷宮区前の草原で俺はレベリングをしていた。ソロで戦う分レベルは高くないといけないと言うことで定期的に深夜の狩りをしている。

風が緩い。

……こんな日は何か碌でもない事が起こるかもしれない

そう思った矢先キリトに出会いお節介だと思いつつも話しかける。

「キリト、お前ギルドに入ったんだな」

少しビクツツとしてキリトは答える。

「……………なんだ、アハトか……………アツトホームな雰囲気だここならいいかも知れないって思ってた。誘われたから入ったんだ」

「自分のレベルを、自分は攻略組だって事を話してあるのか？」

俺は答えが分かりきっている質問をする。

答えはN oに決まっている。

中堅ギルドが攻略組を誘うなんてあり得ない。何よりさつきからキリトは何か隠しているような見えるしな。

キリトは黙り続ける。

「……………黙っているのはいいが一つだけ忠告だ。お前が傷つく前に正直に話すかギルドを抜けろ、そうしないと取り返しが付かない事になるかもしれないぞ」

「……………皆は俺が守る。それに言わなくたって何も問題ないだろ、自己のステータスは詮索禁止だ！」

「……………それがお前の本心って事でいいんだな。流石は『黒の剣士』様だ、信じられない奴らを守るだなんてな。そんな欺瞞はやめろ、今すぐにもボロが出るぞ」

「うるさい！ ずっとソロでやってるアハトに何が分かるんだ。俺にも守りたいと思う仲間が出来た。それを守りたいと思つた俺の気持ちを踏みにじりはさせない！」

「踏みにじるつもりはない。ただそんな嘘と欺瞞で溢れている関係は直ぐに壊れるって

言ったんだよ」

キリトはそのまま踵を返し街の方へ走り出した。

俺はどうしてしまったんだろう。何時もなら何も言わないのに………。

それから3日後、27層の攻略が終わり28層が開通された。25層以来まだ被害者は出ていない。ただ何時もと違った事といえば戦闘狂のキリトが攻略どころか攻略会議にも来なかった事だ。それから2ヶ月間キリトを一度も見ることなく最前線は33層にまで移動していた。

「LAボーナス？んなもん取っても必要無いものは全部トップギルドに売ってるわ。マジでキリトが居ないからソコの俺の独壇場になっているまである。」

それから数日後、重役である俺の朝は遅いのだがアルゴからのメールを見て飛び起きた。

『アハト大変だよ！キリト達が27層に入っていた』

一体何をやってんだよキリトの奴。最悪の事態を想定してんのか？あそこはトラップの宝庫で中堅プレイヤーじゃ辛い所なんだぞ。

俺が27層の迷宮区に入り索敵を開始するとプレイヤーの反応が5つ。一人少ない気がするが固まって進んでいる事から何も起こっていないようだ。

ひとまず安心した矢先、一つの反応が走り出し部屋に入って止まる。

不味い、そう思った俺は走り出す。

「ダメだ！そのトレジャーボックスは罠だ！」

キリトの声が聞こえたと同時にアラーム音が鳴り響く。

同時にたくさんのもンスター反応。どんどんと入口が閉じていくのが見られた。

俺は自分の俊敏値をフルに使い部屋にギリギリで滑り込む。そして装備していた〈両手剣〉の全範囲技で周りのもンスターを一掃する。

「キリトはmobの数を減らしつつギルドのメンバーを守れ。残りの奴は固まってお互いをカバーし合うんだ！」

硬直時間にmob共が俺の周りに群がり攻撃を放つ。がHPバーは少し減るだけで直ぐにバトルヒーリングで回復する。

硬直が解けると全範囲技、再び硬直というのを5回ほど繰り返すとmobの数が両手で数えられるほどになる。

俺は武器をへ刀に持ち替えるとソードスキルを使わずにmobを切り裂いていく。

最後の一体を切り裂くと扉が開き一息付く。そのまま俺はプレイヤーが固まっているところ迄歩いて行く。今の状況でキリトのHPは半分になりかけていて、他の奴らは赤になりかけている。それを確認すると俺はキリトの胸ぐらを掴む。

周りからはいきなりの行動に啞然とする声、俺の行動を非難する声、キリトを放すように言う声が上がった。そんな声を全て無視して俺は告げる。

「もし俺が来てなかったらお前の仲間は全員死んでたんだぞ。しかも回避できる罠で死んでたんだ。コレの意味がわかるか？お前が自分のレベルを話していれば説得出来ていたかもしれないのを、俺の言った事を無視した結果がこれだったんだ」

「どういう事だよキリト。君のレベルは32だよな。その奴が嘘を言ってるんだよ

な……………なあ、何か言えよ！」

「……………」

仲間の一人、シーフのような服装をした奴が声を荒げて問うがキリトは黙り続ける。沈黙は是なり、その意味を体験できる機会だった。キリトも悪い。だがここでキリトだけを責める事はさせない。

「宝箱を開けたのはお前か？」

先ほどキリトを責めた奴に聞く。

「そうだ。宝箱を開けたのは俺だよ、だからどうしたってんだ！今は嘘をついたキリトに……………」

少し黙れ、そういう意味を含めて刀を鼻先に向ける。

「お前も同罪だ。キリトが止めたのにも関わらず開けたのはお前だろ。シーフがトラップも解除せずに開けるなんてあり得ない。それにお前らも同じだ」

そう言つて他の奴らを見渡す。

だつてだの彼奴がだの言い訳を考えているプレイヤー。俺は胸くそが悪くなるが抑える。

「キリトが悪いつていうなら私も同罪なの。だからキリトを悪く言わないで！」

そんな中責任なら自分にもあると女が言う。そんな女の言葉を無視してキリトは続ける。

「…………… 今までずっと黙っていてすまなかつた。本当の事を言えばギルドに入れてもらえなくなる、そう思った俺は本当の事を言えなかつたんだ。俺、ケイタにこの事を告げてから脱退するよ」

ずっと黙っていたキリトはそう告げると歩き始めた。取り残された俺以外のプレイ

ヤーはただ黙って難しい顔をしていた。

「それでお前らはいいいのか？」

キリトに聞こえないであろう距離になるまで黙っていた俺は告げる。

「…………… どういう事だ」

シーフ姿の男が問う。

「お前らがそれでいいなら俺は何も言わん」

理解出来ないならこいつらはそれまでの関係だったってだけだ。

「言い訳ない！私はキリトのレベルを知ってたの。だから私も同罪。それにこのままじゃキリトが言ってた通りになっちゃおう！」

そうして走り出した女はキリトの後を追いかけた。他の3人はまだ立ち尽くしている。

仕方ない、少しだけフォローを入れるか………。

「まず……だ。誰がこの層の攻略を提案した？キリトなら絶対にこの層に入る事を認めないはずだ。次に如何してキリトの警告を無視した？ここがデスゲームだという事を忘れてるんじゃないのか？最後にお前らは誰のおかげで生きているのか分かってんのか？」

あー疲れた。この世界に来てから話す量が増えてきている気がするなー。まあこれで奴らも気がつくだろう。これでも気づけないんならキリトには済まないと思うが俺がリセットさせるかもしれん。

暫く時間が経ち、ドタドタと走る足音が響く。

どうなるかはわからない。ただ俺は上手くいけばいいと珍しく希望的で前向きな考えを肯定している事に気がついた。

「アハト、俺またソロに戻るよ。でも時々暇を見つけてはあのギルドの、サチの指導をする様に約束できたんだ。……………ありがとう」

「……………俺は何もしてない。でもよかったな」

ギルドが壊滅しかけたあの日から数日経った日の事だった。

どうやらアハトのチート化は止まらない

俺は今25層に向かっていた。

噂（盗み聞きじゃ無いよ）で恐ろしくキレのいい刀使いがいるときいたからだ。

刀をメインとして使う俺にとって刀の使い方を見ておくのはプラスになると思い久しぶりに下層に降りる。

噂と言うのは

『知ってるか？25層に刀の達人がいるらしいぜ』

『知ってるよ。しかもSAOで1、2を争うほどの女だつてよ』

『でも話しかけても何も返してこないらしいよね』

『もしかしたらNPCなのかもなー』

.....

はい、今完全に盗み聞きだと思ったやつ。怒らないから手をあげなさい。

………
大丈夫だ。俺も盗み聞きにしか思えん。

誰が来ようが反応しないと言うのは、こちらも見ても技術を盗みたいだけだからちようどいい。

そう思いながら俺は噂となつていいる25層の奥深くへ向かつた。

25層の最奥、そこは森を抜けた先にある少し広げた場所なのだが森にいるmobに見つかりやすい構造になつていて次から次へとmobが向かつてくる様になつていいる。

良質なmobに囲まれる為この層が最前線だつた時1パーティーが壊滅に追い込まれることもあつた。

攻略本を読んでいたのにも関わらず自力を過信したバカ集団で突つ込んでいったらしい。

まあそのお蔭で誰も近づかなくなつたこの場所をレベリング場所として使つていたという思いもある。

その時に多数のmobに囲まれた様に〈両手剣〉を使う様になつたのは懐かしい。

そんな場所で長い黒髪を揺らし次から次へと向かつてくる敵を綺麗に軽やかに捌い

ていく女の姿があった。

それはダンスを踊っている様にも見えるくらい無駄な動きがなく、それでいて要所要所で急所に攻撃など、見ていて為になる光景が見られた。

そして刀の性能なのだろう、微妙だがスタン性能が付いていてソードスキルを使わなくても囲まれずに戦える様になっている。まあスタンと言ってもほんの数瞬時動きが止まるだけなのだが……………。

それで危なげなく戦えるという事はかなりなレベルのわけで……………。会議で見たことがない雰囲気だし準攻略組のトップなのだろうと思考を終わらせる。

遠すぎてここからは顔が見えないが段々と動きが鈍くなってきた事から疲れてきているのだろう。そんな事を考えていたらなにかに躓いて倒れ込んだ。

スタンによって集団リンチ状態にはすぐにはならないだろう。だがここで見捨てて死なれると後味が悪い。そう思い俺は〈刀〉を握ると走り出した。

10秒後射程圏内に入った敵の首をめがけて居合斬りを繰り返す。首に一本の線が入ったと思うと首がズレ始めポリゴン片と化す。

そんな調子でmobを掃除していると途中から女も起き上がり狩り始めた。そうなれば話は早い。ものの1分足らずで辺りのmobはいなくなつた。

俺は立ち去ろうと思いい背を向けて歩き出そうとした瞬間、

「待ちなさい、比企谷君」

そんなどこか懐かしい高圧的な声でこの世界で呼ばれるはずがない名前が呼ばれた。振り返ると少し顔を赤らめた雪ノ下がいた。

「…………… どうしてお前がいるんだ、雪ノ下」

どうしても気になった俺はそう聞いてしまう。

「…………… この世界に来た理由？ 貴方に話す必要性を感じられないわね」

雪ノ下は話したくないみたいだ。

「じゃあその武器は誰が作ったんだ？」

「私の行きつけのスミスよ。ちょうどメンテナンスをお願いするつもりだったし一緒に来るか」

「しゅっっ」

「…………… ああ、頼めるか？」

「はあ、質問に質問で返すなって教わらなかったのかしら。まあいいわ、行きましょう」

そう言つて雪ノ下は歩き始めた。

その後ろ姿を追いながら俺は考えていた。

この世界に雪ノ下に一色がいる。もしかしたらそれ以外の奴もきているかもしれない………
い……………。

そしてもうこの世界から退場しているかもしれない……………。

早くクリアしないとダメだな、待っている小町の為に、そして囚われているこいつらの為にも。

「もう着いたわ…………… つて一体何を考えてたの？」

「ん、ちよつとな」

俺が連れてこられたのは25層にある小さな家？だった。そのまま雪ノ下は扉を開けて入っていく。

「リズベット武具店へようこそ！……て、なんだ、ユキさんか。今日もメンテですよね」

「お客に対してその態度はやめなさいっていつも言ってるでしょ。それはそうと紹介したい男がいるのよ、入っていいわよ」

「エッ！ユキさんの口から男を紹介するだなんて。結婚でもするんですか？」

「冗談はやめて頂戴。貴方も知っている人よ」

入っていいと言われたのに入れない雰囲気作るの止めてもらえませんかね。

つか知っている？ああ、俺の名前は悪名として知られてるからそういうことなのかもな。

「……………うす」

俺は軽く頭を下げてから入る。

リズベツトと呼ばれていた女子は俺を見ると雪ノ下を掴んで奥に入っていった。

リズベツトが俺を見る目はリア充どものように見下した目でも見定めるような目でもなかった。

それに何処かで見ることがあったような……………。

まあ気のせいだろ。

「取り乱してすみませんでした。えーつとユキさんの武器のメンテは終わったよ。それでご用件は何でしょうか？」

「武器作成を頼みたい。アイテムはこのインゴットだ」

「武器作成？周りに一杯あるのにどうして？……………まあいいわ。貴方のメイン武器はな

んなの?」

「俺のメイン武器は〈刀〉だ。でも何を作つて欲しいとかじゃないんだ。ただこのインゴットを武器にして欲しい」

「ちよ、貴方それは一体どういう意味かしら」

私の紹介した鍛冶屋の実力が信用できないの?

そういう意味も含めた雪ノ下の言葉。俺は説明を付け加える。

「俺はこのインゴットを鍛えてくれる鍛冶屋にまだ出会っていないんだ。だがこいつの〈刀〉を見てもしかしたらと思つてな。見てくれ」

そう言つてリズベットにインゴットを渡す。

彼女は彼女でインゴットを確認すると驚きの声を上げた。

「何よこのインゴット。マスタースミスまで行かないと扱えないわ。それにマスタース

ミスだったとしても辛いわね。33層で手に入る『煉獄の炎』と、『神をも鍛えし槌』っていうアイテムが必要ね。ただ後者に至ってはどこにあるのかすらわからないわ」

「じゃあマスタースミスはまだ誰もなっていないのか。大変なんだな」

「何よ、その言い方。戦闘スキルよりも上げるのが大変なのよ」

「そうなのか。俺は3個ほどカンストしてるしもう1つも2、3日でカンストするだろうからな」

という2人が同時に「は？」という声を上げる。

なんだよ、その可愛そうなものを見る目は。

「貴方は一体何をカンストして、何がカンスト間近なのかしら？」

「おいおい、他人のスキル詮索はマナー違反だろ。と言ってはぐらかす事すら出来ない程に真っ直ぐな瞳。冗談も言えないな。」

「投擲、曲刀、短剣がカンストだな。んで刀、両手剣が800程度。カンスト間近が料理で985だ」

そうやって俺の可視させたスキル欄を見せると2人は開いた口が塞がらないようだった。

「料理スキルがカンスト間近……………」

「非戦闘系で更に料理スキルですよ……………」

バタンツ

いきなりドアが勢いよく開いたと思うとそこには見覚えのある顔が……………基あざとい笑顔を浮かべる後輩の姿があった。

「せんぱーい。探したんですよ！。あと雪ノ下先輩もお久しぶりです」

げつと言う声が出てしまう。

それに此奴は現実の名前を出しやがったし少しお仕置が必要だろう。

「ゲームの中で現実の名前は禁止だろうが。たくお前って奴は」

「何を言ってるんですか。ここに居るのは全員同じ高校のしかも顔見知りじゃないですか」

そう言ってゴミを見るような目で俺を見る一色。少し懲らしめるつもりが形勢が逆転したようだ。

つか全員が顔見知りだって……………。

ってことはリズベットも知ってるってことか……………。

「あつ」

「今思い出しましたね、せんぱい。そうです、私の友達の里香ですよ」

思い出した。一色の生徒会長選で手伝ってくれていた唯一の女の子だ。

思い出した、思い出したからそのジト目をやめてくれ。

「つてことはリズベットが此奴に連絡したのか。もう俺帰るからマスタースマスになったら連絡入れてくれ」

「ちよつと待つてください。せんぱいも新しい武器早く欲しいですよね？」

「まあ、早いことは悪くないな。時間には限りもあるし」

「ここで俺は失言に気がついた。だつて一色の目がピカって怪しい光を灯したんだもん。」

「そこで提案なんですが鍛冶スキルを上げるには高レベルなインゴットを扱う方がいいんですよ。だからパーティー組みましようよ」

「ちよつと待て、なんでそうなる。今の話でなんで俺がパーティーを組むことになるんだよ」

だから察しが悪いなみたいな目で俺を見るなって。

「高層、其れこそ最前線で取れるインゴットを扱い続ければ早くスキルが上がるのはわかりましたよね。そしてレベルの高いインゴットは鍛治スキルをとっていないとドロップしないんです。ですから私とせんぱいと里香で行けば里香も安全でインゴットも集まり、せんぱいも早く武器が完成するってことですよ。わかりましたか」

わかった、わかったからクズを見る様な目で見ないでくれ。

「でも俺一人でもリズベットを守りながら進めるぞ。なんでお前を連れて行かないやならんのだ」

「里香の保身です。里香も可愛いですからね。せんぱいに襲われないように先輩を見張る意味でもついていきます」

「そういう事なら私もこの男の飼い主の一人として同伴する必要があるわね」

今まで空気だった雪ノ下が会話に参加すると同時に俺が空気となってどんどん会話が進んでいく。

でも八幡気付いちやった、物から生き物までグレードアップしてる。

やったね八幡後少しで人間になれるよ。

リズベツトは店を昼間までは休みにする事を決め、毎日午前中は最前線でインゴット集めをする事になってしまった。

ただ唯一の救いはリズベツトの鍛冶スキルがカンストするまでのパーティーという事、そして現在の鍛冶スキルが900だったということだろう。

明日からインゴット集めのダンジョン攻略が始まる。

やはり俺の不幸は続く

最前線は37層になっていた。3日前に開かれたばかりの階層だが攻略本・フィールド版が既に出ている。

これまでも充分に早いスピードで出していたが段々と早くなっていき今では1日でフィールドを制覇し、1日で作成、フィールドボスの撃破している。残り1日は迷宮区の下調べに費やした。

これから未到達エリアである迷宮区にレベルはわからないがあまり高くないだろう。プレイヤーと一緒に行動するのだ。例え俺のレベルが58手前だとしても気は一瞬たりとも抜けないだろう。

そんな事を考えているといつの間にか俺の目の前に3人が集まっていた。時間を確認すると8時5分前。

「そろったか」

俺が声を掛けると肩をビクツと震わせて驚く彼女らに俺は『隠蔽』を使っていた事を

思い出した。

いや、彼女らがキョロキョロと辺りを見渡した事で気が付いた。

驚かされた事に雪ノ下は不服そうな顔をしたが直ぐに謝罪するとなんとか気を収めてくれたらしくパーティー申請が送られてきたのでYESを押す。

そうして情報集めを兼ねたインゴット集めが開始された。

この37層は鉱山地帯のようにゴツゴツとした岩山と洞窟が集まっているフィールドだった。迷宮区には岩を固めたような固めなmobや炭鉱夫を真似たmob、山岳地帯に生息する動物の形を象ったmobが出現した。

俺はいつも通りメイン武器を刀に、狼牙を腰に付けている。

雪ノ下：…… ユキは刀、一色…… クレアは短剣、リズベットは片手棍を装備している。

ユキとクレアのレベルは安全マージンちょうど位なのだろう。こちらは安定して狩れているので危なげなりズベットのフォローをしつつ計算してトドメをリズベットに撃たせ続ける。べ、別に護衛対象のレベルが上がれば俺が楽できるからってわけじゃ無いんだからね！

つか俺がやってもキモいだけだな……。

初日の鉱石集めを終えリズベットの店まで戻ると店の奥に招待される。

今日集まったのは最前線レベルの鉱石が10個ほど、少しレア度が低めの鉱石が20個ほど取る事が出来た。

リズベットはレア度が低いものから武器を作り始める。

結果としては最前線では心もとない武器が12個、最前線でも通用するものが8個、更の上層でも通用するであろうレベルの武器が6個完成する。失敗は4回と成功はいつもより多いらしい。

何本か刀はあったが俺の武器である『黒鳥』に比べると少し見劣る。

それから俺は明日の約束をさせられ店から出た。

店を出る前にユキとクレアが付いてくると煩かったが足手纏いだと告げると引いてくれた。

その代わりに足手纏いじゃ無くなったら一緒にパーティーを組む事を強制させられたが……………。

それから更に3ヶ月がたった。リズベットはマスタースミスとなり、ダンジョンへ材料集めの契約は一通り落ち着いた。ただ、出来のいい店として知られてしまったため

にそれを盾にされて週3回程の鉱石集めを依頼されて正式に雇われた俺は一緒に最前線に行っている。

昨日bossを攻略し最前線は50層となった。俺はいつも通りフィールドの調査をして、フィールドで受けられるクエストもクリアして情報をまとめていた。

「コレで一通りは纏められたな。後は添削待ちだ」

日が丁度真上に来る時間帯に俺は圏内のとあるカフェに鼠を呼び出している。この時間なら殆どがフィールドに出ているため周りの目を気にせず話ができる。だからこの時間を選んだ。

奴の事だから後数分でくるだろう。そう思いながら甘くないコーヒーを啜る。人生はこんなにも苦く苦しいのだからコーヒーくらいは甘くしたっていいと思う。

茅場の奴、喫茶店にマックス缶がないだけならまだしも、甘さ上限を付けるなんて……やっぱ帰ったら自作マックスコーヒーでも飲むか………。

そんな事を考えていると

「はーちゃん、来てやったぜ。早く原稿を見せてクレ」

と珍しく最初から仕事モードの鼠の声。珍しいと思ひ顔を上げるとそこには『閃光』と『鼠』という俺の頭が上がないコンビが立っているのだった。

「ちよつと待て如何して副団長様がここにいるんだ？」

そう、37層からヒースクリフという男が作った血盟騎士団が攻略に参加してきたのだった。メンバーはヒースクリフが直接声をかけて集めたらしく、アスナは副団長として入団したのだった。そして少し経ったある日からアスナは『攻略の鬼』と呼ばれるようになり、なりふり構わない攻略をする様になった。

「何よ。私がいたら不味いの？」

と今にも怒り出しそうな声で問いかけてきた。

こんなタイムリングで、質問に対して質問するなつて教わらなかつたのかつて聞きたくなつたが命欲しさに断念する。

「いや、副団長様は仕事で忙しいだろうからな。折角の休みに何故と思っただけだ」

「なによ嫌味？私も一緒に話を聞くから」

そう言つて俺の斜め前の席に腰掛けるアスナ。俺は助けを求めべく鼠に視線を送るが逸らされる。

つか、攻略本の作製に俺が関係しているつてのをバラすなど目で語ると

「アーちゃんは前々カラ気付いていたらしいぜ。秘密にする代わりに同席サセロつて
ヨ」

…………… そうでしたか。

押してダメなら諦めろが教訓の俺はため息を吐く。

「これが原稿だ。一通りチェックは済みました。最後の確認を頼む」

「受け取ったぜ。やっぱはーちゃんガ作ったヤツは完璧ダナ。後はオレッツチの独自の情

報網からのネタを入れてツト」

サーッと目を通してOKをする鼠。

仕事の話も終わり席を立とうとすると腕を掴まれ引つ張られる。

「なんだ……よう？」

目の前には完全に苛立ちを露わにしているアスナと怖くなるほどの笑みを浮かべる鼠がいた。

怖い、怖いからやめてくれよ。

「アハト君、何で君はアルゴさん以外の人とパーティーを組むようになったのかな？」

「そうだけ、はーちゃん。経緯ヲ話して貰おうカ」

俺は逃げ出したかった。ただ逃げた所で先延ばしになるだけと思うと再びため息を

吐く。

某ツンツン頭の人はいつもこうなんだろうか？ここは彼に敬意を払って言わせて貰おう。

不幸だく!!

俺はリアルの話関連以外を全て隠さずに話した。

するとアスナは

「じゃあその武器は完成したの？」

と聞いてくる。

「それがまだ何か条件があるらしく作れないんだ」

そう、マスタースミスになった直ぐにリズベットと『煉獄の炎』を手に入れ依頼したのだがリズベットがハンマーを振ることはなかった。

彼女いわく、今は作れないわね。まだ時じゃないみたい、だそうだ。

んでその時とやらが来るまでは保留になったのだ。

「ならこれから依頼以外の時は私とパーティーを組んでよ。足手纏いにはならないはずよ」

「……………いやだ。つかなら、てなんだよ。文脈ぶつた切んな」

如何してよ！、と憤慨するアスナ。拒否する理由なんて決まってるだろ。俺はソロが好きだからだ。

「言わせてもらおうが今のお前には背中を預けられない」

そう言う俺はカフェから出る。俺のこの言葉が後に響いてくるなんてこの時の俺は思っていなかった。

やはり俺たちの50層攻略は失敗に終わる

50層は龍人の都というコンセプトらしく一体一体の強さは恐ろしいが滅多にパーティで来ることがないのである。一対一なのでスピードで勝っている俺は其れをフルに使い切り刻んでいる。ただ何処かに違和感を感じるのだ。

HPゲージは満タンだが何処か無理をしている様に見える。相手はゲームのmobだ、そんなことあり得るわけがない。そう思い俺は違和感を放り捨てた。

簡潔に言おう。50層のフィールドボスは物凄く弱かった。

フィールドボス『ドラグパラディン』はヒースクリフみたいな装備の龍人だった。最初こそ巨大な盾に攻撃を阻まれていたが愚鈍な動きで俺の動きに着いてこれず、30分も掛からずにケリを付けた。LAボーナスは『龍の鋭爪』と言う名前の指輪だった。ステータス値を見ると攻撃が+20となっている。

俺はこれまで付けていた緑色のリングの代わりに紅く輝くリングをつける。

たった20、されど20を実感する。mobを攻撃する手数が減るのだ。手数が減れば武器耐久の減りも少なくなり、今まで以上にmobを狩れる。そうすればいつも以上

に攻略スピードが上がる、とプラスに繋がった。

そんな感じでハーフポイントである50層をいつも以上に順調に攻略していったのだった。

なんやかんやで開層から1週間でboss部屋に着いた。それから先遣隊を何度か派遣し、何度も会議、作戦のシミュレーションを行い、boss部屋発見から3日目の今日攻略が開始された。

俺たちは大きな間違いをしていたんだ。25層の時はフィールドボス、普通のmobもかなりの強敵だったのに対し大した危険もなく攻略してきたからだろう。何処かブレイヤーの間には緊張感がない。そんな中俺はいつも以上に気を張り詰めていた。理由は簡単だ。忘れていた違和感をふと思いついたから。そしてこういう時は大体悪いことが起こる。それだけでも最悪なのにあいつらがこの層、50層から攻略に参加してきたからだ。

こいつらを死なせはしない。俺の命に代えても絶対に守ってみせる」

同じパーティーのため近くにいたユキ、クレア。そして何故か近くにいたアスナが頬を微かに紅く染めるのをアハトは気づかなかった。きつと気づいていたら羞恥で死んでいただろうから良かったのだが。

扉を開けて先ず目に入ってきたのは白く長いもの。

余りにも大きすぎてまだ全長を視認できない。そんなbossに先陣をきって斬り込む。

あとbossまで5m程となった時にHPゲージ、名前が現れる。ゲージは5本で名前は『ロードオブドラゴン』。その周りには5体の精鋭『ナイトオブドラゴン』。ここまでは事前情報の通りだ。後の情報はHPゲージが減つてもmobはポップしない、mobを呼び出す、と言うものだった。

俺は手始めに《オパール・クレセント》をbossに食らわせる。1本目のバー1%程しか喰らわせないがヘイトが俺に集まりbossが前足でなぎ払おうとする。それを他の隊のタンクがガードし、俺はそのままmobの殲滅に入る。mob討伐はG、H隊に任されていたのだが誤算が発生した。迷宮区で出たものよりも動きが早く鋭いのだ。俺、キリトは各個撃破、残りの4人で一匹と言う内訳で我らがH隊は戦っている。俺はmobの一体をさっさとポリゴン片にすると同じH隊のフォローに入る。と言つてもキリトのフォローにまわるだけだ。キリトも対処は出来ているので邪魔をしない様に攻撃をするというスタンスなのだが余裕があるため考えに耽る。なぜ迷宮区のmobとここまで動きが違うのか、違いを挙げることにする。

動きが早くなり鋭くなった、その一言に限る。

いや、違う。これが通常の実力なんだろう。迷宮区のモブは何処か足を引きずったり

と、どこかを庇っている様な素振りを見せていた気がした。まるで何処かを痛めていたかの様に。そこから導き出される解の中で一番最悪なものは……… bossの戯れで傷付いた体で迷宮区を彷徨っていたから。なぜ単数だったのか、それは恐らく彼らの誇りだったのだろう。最後まで戦い抜くこと、そして仲間には弱った姿を見せないことが。

だがbossの戯れであそこまで傷つくということとは本気の攻撃の威力はどうなるんだらうか。

今とは比べものにならない威力だろう。ABCDEF隊の戦いを横目で見ながら冷静に思う。今のままだと死ぬと。

そんなことを思っていると目の前のmobはポリゴン片に変わり、もう一体のmobも消える。

H隊は敵を殲滅し終えるがG隊は些か手こずっている様だった。と思っていると一匹ポリゴン片に変わる。ラスト一体というところで仲間の加勢に気を一瞬緩めたプレイヤーの胸に刀が突き刺さる。そのままmobは刃先を持ち上げる。

周りのメンバーが助けるために一気に攻撃する。プレイヤーはもがくが体から刀身が抜けることはなく、逆に傷口が広がっている。数秒後mobとプレイヤーが同時にポリゴン片に変わり辺りには沈痛な雰囲気漂った。

25層の軍の大打撃と言う名の大量死以来久しぶりにboss戦で死人が出た。それも取り巻きによってだ。そんな受け入れたくもない事実によって動きを止めるGH隊のメンバー。ABCDE F隊は気付いていないのが唯一の救いだらう。

「……………今は気を落としてる場合じゃない。行くぞ」

そう言つてH隊のメンバーを引き連れてbossの撃破に加わる。

「……………取り巻きの討伐は終わった。H隊も今からそちらの指揮下に入る」

「わかりました。大まかな指示はこちらが出します。引き続き細かい指揮はそちらでお願いします」

先ずは後方待機のように時間ができ、ボスを観察する。首は長く背には棘が生えていて全身が真っ白な鱗で覆われている。頭には短い角が確かに2本の角が生えていて目は青く輝いている。

「ABC隊退却準備、DEFG隊攻撃準備に入ってください。3、2、1」

俺は《ワイドシユナイダー》を発動させる。

「スイッチ」

アスナの号令が下った瞬間に俺は飛び出していた。

俺の刃が切り裂いた部分は鱗が捲れていた部分。すると一気にHPバーが1割ほど減り、更に鱗が数枚外れる。俺は硬直後に落ちている鱗を拾うとポーチに放り込む。2回攻撃してみてわかったのは硬さがとてもないことと鱗の無い部分少しだが多めにダメージが入るといったことだ。あの距離からの《ワイドシユナイダー》は取り巻きm0bのHPバーを全損させるほどの威力を誇っている。それで一本の1割ほどというのだ。驚異的な硬さである。

だが隊ごとのスイッチを繰り返しているうちにどうにか2本半削ることができた。それでもこれまでに30分以上かかっている。単純に考えてあと30分以上戦わなければならぬということで、集中力が途切れ、思考が鈍るのは必然だろう。

「スイッチ」

アスナの号令により俺たちH隊は後ろに下がる。入れ替わりの攻撃が入ると白龍は動きを止めそれからすぐに白龍が大きく息を吸う。これまでには無い攻撃パターンだ。本来ならばブレスが来るだろう。

しかし白龍はブレスを吐くことなく全身から黒い炎を撒き散らした。前衛のタンクが盾でガードするが体に炎が移り燃え始める。と同時に動きが止まり急に倒れ始める。

「何が何でもあの炎には当たるな！」

俺が珍しく叫んだことでH隊の殆どのメンツは飛んできた炎を躲している。ただタンクだったエギルとクリスは盾でガードしてしまった。2人の体は黒い炎に包まれ動かなくなる。2人を確認すると継続ダメージと行動阻害のバッドステータスが付いている。

黒い炎を喰らわずにいられたのは生存者47名に対して5人だけだった。そして今の炎で命を散らした数は3人、また人数が減った。俺はウィンドウを開くと籠手を取り出しエギルに当てる。

「キリト、アスナ、ユキ、クレア、お前らはメンバーの救出を頼む。火は移らないから門の外まで運んでくれ！」

俺が此奴を抑える」

「何を言ってるのかしらアハト。貴方一人で『ロードオブドラゴン』を倒せるとでも思ってるの？」

「ユキ、今は言い合ってる暇は無いんだ。それに見ろ、今の彼奴は『エビルドラゴン』だ。鱗を捨てた分スピードもかなりのものになっているだろう。これ以上犠牲を出す前に安全圏まで連れて行くんだ」

全身から純白の鱗が落ち、真っ黒な体が露わになる。そしてその体を守るように纏っている黒い炎は全てを燃やし尽くす勢いだった。

恐らくだが鱗を捨てた分早くなっているがその分ダメージも通りやすくなっているだろう。攻撃力も増してそうだが……………。

俺の言葉が正しいと思ったのかこれ以上は文句を言わずに動いてくれる。

ただ一人アスナだけが硬直して動かない。

「アスナ！」

俺の声に反応し振り向いた彼女は恐怖と絶望、責任の重さに押しつぶされている。

「今、お前に出来ることは少しでも早く、転がっている奴らを安全なところに運ぶことだけだ」

アスナが動いたかどうかはわからない。

それから俺は待つてくれていた『エビルドラゴン』の方に向き直り刀を握り直す。

次の瞬間斬りかかった俺を前足で受け止め尻尾で反撃してくる。俺はギリギリのところまで回避したが僅かに擦り2割ほど持っていかれる。

攻め続けないと、防戦に回れば何て甘い考えを持てば手も足も出ずに殺られる。もっと反応速度を上げ無いとダメだ。

そう思って集中した瞬間声が聞こえる。

『君に僕の力を貸してあげるよ』

目の前から飛んでくる攻撃を俺は紙一重で躲す。それから俺は一度もダメージを食らっていない。ただ問題としては速さが互角のためにお互いの攻撃が入らないということだろう。幾ら攻撃したとしても防がれていては武器の耐久値が減っていくだけだ。耐久という制限がある以上長期戦は不利でしかない。しかもいつもより耐久値の減少が激しいのだ。あと少し、もう少しでも速く動けたら………そんな思いが生まれる。

『仕方ないわね。私の力を貸してあげるわ』

再び声が聞こえた。

いよいよ俺はどうかしてしまったのだろうか？

俺はこの声を不思議に思いながらも今は目の前のbossだけに集中する。少しずつだが俺の攻撃が当たり始めている。それでもギリギリ当てているという感じで大したダメージにはならない。

もつとダメージを与えるにはクリティカルを狙うしか………。難しいのはわかって

る。それでもそうしないと終わらないんだ。

『君の覚悟は受け取ったよ。私も君に力を貸してあげる』

まただ。少しずつだがbossの体に刻まれる赤い線に太いものが増えている。

少し攻撃が単調になってしまったのだろう。

bossも学習しているらしく次の行動を予測されて待ち構えられてしまう。

だがそれはフェイクだ！本命はこっちなんだよ。

投擲スキル《スピッシュ》を放ち直ぐに高く跳ぶ。目の前の刃に意識がいつているbossは俺がどこにいるのか一瞬見失う。俺はすかさず体術スキル《ワイドスクリーン》を発動する。

今じゃ硬直時間すら勿体無い。

少しでも早く、今よりも早く動け！

『お前、俺つかいこなす』

『そうだ。その調子を忘れんじゃねえぞ』

ヘイトを向けている俺が時々視界から消えるせいで困惑するboss。
残りは1本半。ただこのままじゃ俺の武器が先に限界になるだろう。あの身に纏つて
る黒い炎が武器の耐久値を削ってるみたいだ。

俺はもつと力が欲しい。一撃一撃にもつと重みがあるんだ！

『いいぜ。俺の力を与えてやる』

俺の放った攻撃でbossが怯む。今までで一番太い線が身体に刻まれる。初めて
のことに嬉しくなるが心をクールにして攻める。攻め時を決して間違えないように。

『いいのう、その冷静さ。俺はお主に全面的に協力するぞい』

バーは残り1本。更に攻撃の手を休めることなく攻め立てる。刀で切り裂き、左手に

持った『狼牙』で《スクリューショット》を放つ。投擲された短刀は目に突き刺さりb
ossは苦痛の悲鳴を初めてあげる。

そのまま姿を消しては攻撃、重攻撃を与えたら一度引き間合いをとる、そしてまた隙
を見つけてダメージを与える。そんなことをしているうちに救助は終わり4人が戻っ
てくる。

どうやらアスナも動いてくれたようだ。

俺が重攻撃を与え、黒龍がスタンしたところを全員で集中砲火する。やっとHPバー
は最後の1本の半分となり、黒龍は吠える。同時に再び黒い炎を撒き散らす。先ほどと
は比べものにならないスピードだ。アスナ、キリトは無事に回避したが他の2人は諸に
喰らってしまった。

プチン

俺の頭の中で何かが切れる音がした。そのまま俺は怒りに身をまかせた。

よくも雪ノ下と一色に手を出したな、と。

ただドス黒い感情が体を巡りただ壊すことだけに集中する。

『いいねえ、その感情。身を委ねちまいなよ。そうすりや俺がお前を最恐で最強にしてやるよ』

俺は今までとは比べものにならないスピードで立ち向かう。俺は先程まで感じていた恐怖を忘れ、身体のうちこちに出来た傷による不快感もない。ただ《エビルドラゴン》を殲滅することだけに集中しているようだ。

奴の槍のような尾と刀が交差する。

攻防の最中にも余裕ができ、その余裕の中で冷静に先を読み、思う。

このままでは武器が持たない、もっと彼奴を殺るための力が欲しい、と。

9個目の声が出た。

『お前は何か力を欲するのだ』

俺は答える。

俺に仇名す敵を全て消し去るためと。

『貴様に仇名すというのは一体なんだ？』

キリトとアスナは超高速バトルに手を出せず、ただ立ち竦んでいる。俺は最後の賭けに出た。『狼牙』を腰に付け、ポーチから3枚の鱗を取り出すと、投擲スキル《ドライシヨット》を発動する。俺はそのまま走り出し、最後で最大火力の体術スキル《グランブレイク》を使う。拳による10連撃、そのまま踵落としにサマーソルト、最後に両手での突きという13連撃。

一撃一撃に炎のダメージが加算される。

拳は焼けただれてはいるが痛みはない。ただ細かい動きが出来なくなっているところを見ると、もう手は限界なのだろう。

体術スキルの中でも長い硬直に縛られる。

僅か数ドットのHPを残したエビルドラゴンはいやらしい笑みを浮かべながら俺の心臓めがけて尾を伸ばした。

遠くから叫び声が聞こえる。

……大丈夫だ、心配する必要なんてねえよ。

先ほどからの比企谷君の攻撃は凄まじい。最初こそほぼ互角だったのに対し（1人で

b o s s相手に互角は異常でしかないが）今では完全に圧倒している。しかもあのハーフボスにだ。

炎で動けなくなった私たちは彼に守られている。そんなことで嬉しく思う私はなんて単純なんだろう。

これまで1人で生きていた影響かしら？後で考えを纏めないといけないわ。

でも彼の横に立っていたいと思う気持ちは紛れも無い本物で、でも彼に守ってもらいたいという気持ちも本物で……………。

だから私は決めたわ。もつと強くなつて私は貴方を守ってみせる。あなたは何も言わずに助けてくれるのだし、当然よね。

それが今の私が考えられる本物の関係だから。

それからすぐ彼はb o s s目掛けて何かを放つと走り出しタメを作る。

そこからはb o s sに身動きすらとらせない攻めを見せる。

彼の技はヒットアンドウェイを主体としたものだった。

技が終わり着地した時、全てが終わったようだった。だってb o s sのHPは全損せずにも彼のHPを全損させようとしているのだから。

私は気づいたら叫んでいた。ただ何を叫んだのかわからない。

尾が彼の胸を抉った瞬間、辺りに青いポリゴン片がキラキラと飛び散る。

彼が死んだ……。

攻略は失敗だ。

それにもう彼はこの世にいない。私はこれからどうすればいいのだろう。

彼が死んだ世界に私が生きる意味はあるのかしら？

新たな武器、現る

彼が死んだ……………。

そんなことある筈が無いと言いたい。でも彼の心臓目掛けて伸びた尾と何かが砕けるような音、それに俯いている私の視界の中で微かに散らつく青いポリゴン片。私は下げた頭を上げることができなかつた。

今の私に見えているものはゆらゆらと揺れ次第に濡れていく地面だけだつた。

ポリゴン片の中、俺の視界にウィンドウが現れる。LAによって手に入れたのは『エリキシデータ』という魔剣クラスの片手剣。持ち合わせの武器が無い今、武器を手に入れたのはとてもありがたい事だと思う。が、重すぎるのだ。

後の仕事はアクティベートだけなのだ、それからリズベットの所で武器を頼めばいい。

この魔剣はキリトにでも渡せばいいか。あいつなら使いこなせそうだしな。全てのウィンドウを閉じ終わる頃にはポリゴン片は消え去つていた。

やっと終わった。

そう思つて一息つき、気を緩めた瞬間に正面からの衝撃を受け宙を舞う。

カッコ悪く背中からダイブした俺は自分の出した「グエ」という音に恥ずかしさを覚えながらも首を上げて腹の上にいるモノを確認する。

「先輩、私先輩が死んじゃうかと思いました。それが凄く怖くて、私の中にポツカリ穴が開く気がして」

そこには一色がいた。

そして最近増えてきた彼女のあざとさが皆無の言葉を聞き何も言えなくなる。

やはり俺は格好悪い、こんなときにかける言葉の一つもまともに思い浮かばない。

俺はただ一言しか発せなかった。

「悪かった」

「そうですよ、先輩が悪いんです。でも先輩一人に任せてしまった私も、その……悪いんです。ですから私、決めましたよ。私ずっと先輩の隣に」

一色の言葉は俺の背中にタツクルしてきた何かによって遮られる。

ちよつと皆さん、俺はラグビーやアメフトの練習で使う人の形をした重りじゃ無いんですよ。あんまり突っ込んでこられるとタダでさえゼロに近い体力持つて行かれるんでやめてください。割とマジで。

「……………よかった…………… 貴方が無事で本当に…………… よかったよお……………」

この声からして雪ノ下だろう。

この世界では汗や涙は流れない。なのになぜだろう。背中の顔を埋められているであろう場所が心なしか温かい液体で湿つていくような気がするのだ。

前方には一色、後方は雪ノ下、目のやり場に困った俺は仕方なく天井を見続けている。1人で立ち、俺の前を歩き続けていた、俺の行く道と正反対を示し続けていた彼女。この世界に入る前は俺の理想と時折見せる彼女の本当の姿に幻滅していたこともあった。そしてそんな自分を俺は嫌いだった。

でも今は雪ノ下のこんな姿を見ても幻滅するどころか嬉しく思う。この変化が良いものなのか悪いものなのかはわからない。

ただ今だけはこの感情に身を任しいと思つてしまつたのだ。

「先輩、私を膝枕してください」

そうやって俺の膝に頭を置き、撫でることを催促する一色。

前言撤回。ボス部屋の真ん中で他の攻略組がいるのにこんな恥ずかしい事耐えられん。

俺は自分の筋力パラメータをフルに活用し立ち上がったのだった。

それから一息つき、キリトに強制的に武器を贈る。

最初こそ遠慮していたが『エリユシデータ』のバケモノじみたステータスと自分の好きな見た目だったためか次第に遠慮は無くなり、最後には

「俺の筋力パラメータでも扱えない得物に出会うなんて思いもしてなかったぜ。アハトありがとうな。

でもいいのか？俺も何かトレードするよ」

と言っていた。

俺は辞退し、俺では扱えん。だからお前が使つてやつてくれ、という満面の笑みを返してくれた。

その後アスナに黒い炎に蝕まれた奴らを固めた所まで連れて行つてもらおう。

そこには座り込んでいる攻略組が34人。あの後炎によつて5人も死んでしまったのか。俺は無言で十字を切る。

生存確認を終わらせると51層に行つてアクティベートを済ます。それから俺は宿を取り眠りについた。

『カーディナルの10の意思の9個全てが彼に力を貸すとは思いませんでした。誰かが力を貸すとは思っていましたがまさか9人全員とは。そして彼らが作つた新しい11個目のユニークスキル『死神』ですか。きっと彼ならこの負の感情が満ち溢れる世界を変えられるかもしれない。この世界で一番の負の感情を抱えながら関わる人の負の感情を拭つていく彼なら。私はそんな微かな可能性に心を躍らせます。……心を踊らせる？システムである私が？そんなことをあるはずが無い。取り敢えず今日はここ

『までにしましょう』

.....

「アハト、出来るわ。武器を作れるのよ！」

手持ちのまともな武器が『狼牙』しかなく、正直話にならないため俺はリズベットの所に来て武器を調達しようとしていたのだった。アクティベートをするために51層に上がった俺は武器が無い事を戦闘になつてから気づき、そこからは俊敏パラメータをフルで逃げたという過去がある。その事を笑い話として話した俺は俺を知っているものの全員に説教されたという過去があるのはご愛嬌だろう。

再びあのインゴットを見ていたリズベットが叫ぶ。

「本当か？ちようどいい頼む」

「じゃあその『狼牙』をかして。この子も必要なの」

「わかった。あとコレなんだが……こいつも使えないか？」

俺が『狼牙』と共に出したのは、あの『マザードラゴン』の鱗。俺が投擲に使った3枚だけはポリゴン片になることなく残ったのだ。

「試してみるわ。任せて、絶対に気に入るものを作つてあげる」

そう言つて彼女は俺から『狼牙』と鱗を受け取るとウィンドウを開く。真剣な表情で何かを呟くと『神をも鍛えし槌』を振るう。

一体何発目だろう。少なくとも既に100発は超えている。それでも姿は変わらずに鉱石のままである。200、……300、……と続いた時辺りには光が広がり、光が消えると共に新しい形状の武器が現れる。

現れたのは鎌の部分と柄が漆黑、柄のさきの短剣が純白の武器だった。

「アハト、できたわ。これがあの鉱石を使って唯一出来た武器の『大鎌』よ。銘は『バーンプレッター』、まあ開拓者つてところね。」

それにしてもこんなに時間が掛かるとは思わなかったわ」

「おお、お疲れ。

『大鎌』？そんな武器があつたのか。つうか俺『大鎌』なんか使えないぞ。何かの条件武器か？」

「そんなことどうでもいいわ。取り敢えず持つて見なさいよ！」

リズベツトから無理やり渡された物は冷え切っていた、が更に手に張り付くのでは無いかと思う位冷たくなる。

俺の目の前にアイコンが一つ現れる。

《スキル『死神』を発動しますか？》

俺はここで初めて自分に新しいスキルが増えていたことに気づく。そしてリズベツトに気づかれぬように《YES》を選択する。

「まさか見知らぬ新しい武器になるとはな。あとこの刀と短剣、両手剣を頼む」

鍛冶スキルがカンストする前からいい鍛冶をすと思うてはいたがカンストした後、彼女の腕は収まることなくさらなる上達を見せている。今では70層まで使えるだろうという武器を置く凄腕の店となっている。

「わかりました。ねえアハト、手持ちの武器全部壊れちゃったんだよね。私、あの子たちの後を継げる子を作れてるかな？」

彼女はずっと俺の武器を見てくれていた。俺の次に、いや、俺よりも俺の武器に詳しいのは確実にあいつだ。彼奴は自分の鍛えた武器以上に俺の武器を大切に思っている。と前に言っていた。そんなあいつに俺がかける言葉……………。

「…………… さあな。まあ、あれだ。そうやってお前の成長の糧になれたんならいいんじゃないねえの」

やはり俺が贈る言葉は酷く曖昧で抽象的で意味を持つのかも自分ですら分からない。

「そっか。私、あの子達に胸を張れるような鍛冶師になる」

そんな俺の言葉で何か覚悟ができる此奴を含めた彼奴らを俺は純粋にすごいと思う。だがそういう奴らは自分一人でもその結論にたどり着く。俺はただ相手に悪影響を及ぼすだけだ。だから輝かしい未来があるあいつらは俺と一緒に居てはいけない人種だとも思う。俺はあいつらに幸せになつて欲しい。

ただ同時に俺は憧れ、側に居たいとも思つてしまう。

過去に諦めて、捨ててしまった筈の未来への希望にまた縋りそうになるのだ。

あいつらといれば俺にも輝かしい未来がくるのでは無いかという希望に。

どちらの感情も肯定も出来なければ否定できない、あの日雪ノ下に言った

『過去の自分を肯定してやれよ』

雪ノ下は不変に否定的だったが変化することに対しては肯定的だった。俺はどうだ、過去の自分もそして今の自分も肯定できない。望むことと諦めること、俺はちようどその真ん中で停滞している。

相反する感情が俺を雁字搦めにするのだ。

思考の渦に飲み込まれた俺はどんどんと深みにはまっていく。

俺は今何処か真つ暗な空間にプカプカと浮いている。

遠くで何かか聞こえる。

そこまで認識した途端、真つ暗だった空間に色が入る。

辺り一面には大小様々な画面が、何所か懐かしくそれでいて嫌な感じがする。次第に音が大きくなっていく。

気づくと俺は目を閉じている。それでもだんだんと大きくなっていく途切れ途切れの音が意味を持ち始める。

『……………て……………の……………』

『ていう……………ろ、あつ……………よね』

『私、貴方のそういうところが嫌いだよ』

俺が黒歴史として決して思い出そうとせず、それでも覚え続けた記憶がそこにはあった。

「せんばい！雪ノ下先輩。せんばいが目を覚ましました！」

ドタドタと走りながら雪ノ下の名前を呼ぶ一色の声。

俺の体に纏わりつくシャツ。この世界では汗をかかない筈なのに細かく再現されている感覚に驚かされていた事に気付いた。ただ夢は思い出せない。駄目だ、切り替えよう。

そういえばこっちでは一色のあざといの全然見てないな。あざとい方が流しやすんだよなあ、時々勘違いしそうになってその度に自分を戒めなきゃいかんから素っぽいを出すのはやめてもらいたい。

「比企谷君！貴方大丈夫なの？篠田さんからいきなり倒れたって聞いてしんぷ……だからいそい……」

自分で言つて撃沈する雪ノ下。こっちには雪ノ下を拘束するものは少ない。だからこそ50層のボス部屋みたいな事も見られるようになってきたし少しずつだがお嬢様な雰囲気も抜けてきている。「前は凜としていて綺麗だと思ったがギャップができて可

愛いんだよな。まあギャップがなくなつて今の雪ノ下は十分に魅力的なんだが」

気がつくとも目の前には苦笑いの篠田、顔を真っ赤にしている雪ノ下、そして物凄い良い笑顔の一色がいる。

詰んだ、そう思い飛び起きると店から出ようとする。

ドアノブまであと1m、俺は急に前に進めなくなり転びそうになつたために止まる。後ろを見ると一色が俺の服を掴んでいる。たつたそれだけの事だつた……??なんで俺並かそれ以上で動けんのこいつ。しかも俺を止めるってどうやって??完全に俺の方が速さも上だろ??

「せーんばーい。今から私と楽しい楽しいお話しをしましょうよ。ね、良いですよね??」

さつきから一切変わる事のない一色のすごい良い笑顔。本来ならば女子から笑顔を向けられれば何か裏がある、勘違いするなど言い聞かせてきた俺だったが、今回は勘違いではないと自信があつた。

一色がマジで怒つていてお話しという名の拷問が待ち受けているという事が。

やはり俺が女子と2人で行動するのは間違っている

最前線が50層を過ぎた頃だった。PKを生業とする集団が現れた。

その中心核となるギルドの名前は『笑う棺桶』。それに触発されたかのようにオレンジギルドの存在が多数確認された。

オレンジギルドはどうでも良い。鼠から情報を仕入れて何時でも壊滅に追い込めるから。

ただラフコフの情報は鼠でさえ手に入れる事に四苦八苦しているという。数少ない情報といえば、リーダーであるPoh、幹部のザザとジョニーブラック。それ以外の情報は無いが確実に存在するPKギルド。そんな集団のお蔭で最近は一人で出歩く奴はおろか夜に活動するプレイヤーも減っている。

そんな俺は最前線である56層で深夜の経験値稼ぎ兼情報収集に走っている……いた、という方が正しいかもしれない。

この階層はありがたい事に群れを組む小mobが少なく大型mobが闊歩している。ただ互いに縄張り意識が強いのか一歩でも縄張りに踏み込めばタゲられる。下手すれば大型mobに周りを囲まれるという事にもなりかねない。

実際俺のレベルだったから1人でごり押しできたが、俺以外だとキリト、ヒースクリフ位しか無理なんじゃないかと思う。

少しずつ、だが確実にmobのルーチンが複雑化、プレイヤーへの順応が見られてきている。あと10層程上がればソロはできなくなるかもしれない。

その時は隠居でもするか……。

「せんばい、目がどんどん腐って行ってますよ。何か良くないこと考えて……ッハ。たとえこんな可愛い後輩である私と夜に2人きりであるからって隣でやらしい事考えるのはどうなんですか？ていうかココはmobが沢山で危険なんで安全な圈内、ていうかせんばいの部屋で2人きりじゃないと無理です。ごめんなさい」

一色曰く俺の目がどんどん腐って行ったらしい。

つかこいつに振られたの何回目だよ。

親と話した回数よりも多いんじゃないか？

「何バカな事言ってるんだよ。勝手についてきたお前を放置してないんだ。

感謝はされこそ暴言を吐かれる筋合いはない」

「わかってますよ。私1人じゃ直ぐにしんじやいます。なので私から目を離さないてくださいね」

「はあ。わかった。ただし次からは勝手に付いてくるなよ。ユキがいるんだし2人で狩りでもしてろ」

俺も暇じゃないんだ、と言い不平不満をぶちまける一色を無視する。

大体彼奴さつきまで生きるか死ぬかの瀬戸際だったんだぞ。なのに今では軽口を叩きやがる。

遡る事1日前

56層迷宮区前『魔女の森』

「魔女の森って言うくらいだからそれに相応しいものがあると思っただが……」

読みを外したか、と思い歩いている。

本当ならばホームに戻ろうと思つていたんだがどうやらストーカーがいるようで、未だ鼠にも知られていない俺のホームを見られるか、と半ば意地になり撒こうとしている。

少しずつ縄張りの密集地点に近づきギリギリを歩く。

俺をつけている奴も上手く縄張りの目印である引つ掻き傷を見て避けているが姿を隠さなければならぬ分行動範囲は狭いはずだ。

つか待てよ、縄張りの目印はまだ本にしていない。つて事は安全マージンがしっかり取れている攻略組の誰かって事か。

クソ、ここまで来たのは完全に悪手だ。攻略組と逃げ場が無いところで戦うとか勘弁してくれよ。

俺は気づかれないようスキル欄を開くと『死神』を発動する。

そのまま闇に溶け込むように縄張りの中に入っていく。

これで普通の奴なら帰つてくれるだろう。もし来たら、悪いがタゲを移させてもらう。俺も命はだいじだからな。

姿を見失う事を嫌つたのか追跡者はガサガサと音を立てながら急いで茂みをかき分

けてくる。ちょうどその反対からは地響きが聞こえる。

ここまでは計画通り、むしろ上手くいきすぎていた。

最後の茂みを掻き分けようとしている手を引つ張り投げとばす。そのままの勢いで俺は走り去ろうとしたのだが

「ちよ、せんぱい。何するんですか！」

という追跡者の声で足を止める。

一色が追跡者だったのか。

頭の中で一色⇕追跡者という等式を成り立つと同時に一色がSOSの声を上げる。

それもそのはずだろう、いきなり投げ飛ばされたと思っただら目の前に大型mobが現れたのだ。少なくとも俺だったらこんな目に合わせた奴は末代まで呪ってやると思う。

仕方ないか。まあ一体までだったら余裕だし大丈夫だろ………なんだろう、絶対ブラグだよな。

気が付いたら大型mob4体に周りを囲まれている。

俺1人だったなら何とかするんだが今は一色がいる。しかたない………逃げるか。

ありがたい事に縄張りから少し離れたら敵対も外れるようだしな。俺は一色を抱き上げると全速力で走り出した。

其れから5分後

どうやらうまく撒いた俺は一色と2人で森を歩いている。絶賛迷子中という奴だ。

「せんぱーい、センパ〜イ。……………先輩、黒鉄宮」

「おう、何だクレア？」

俺は冷や汗をかきながら一色の言葉に反応して答える。助けてやったのにその過程での弱みを使うってどうなんだよ……………。

え、元の原因を作ったのもお前だろだつて？

其れもそうだが尾けられてたんだ、普通は撒くだろ。だから俺は悪く無い。

「今何処にいつてるんですかー？早く帰らないとユキが心配する頃だと思っんですよ、直ぐに帰るからって言っちゃったですし」

「じゃあ当分帰れないってメール送れよ。まだ迷宮区じゃ無いし送れるだろ」

「それが送れないんですよ。さつきから何度送つても『you cannot send a message!』ばっかりで」

メールが送れないって事はここは何処かのイベントステージ。雪ノ下は条件を満たせて無いからメールが送れない、と考えるのが自然か。

「あ、先輩。あんなところに灯りがありますよ。行ってみましょうよ!」

俺が考え事をしている内に走り出す一色。

距離はかなり有るが確かに灯りが見える。どうやら家の明かりのようだ。

ちよつと待てよ、まだそうとは決まってるが無いがイベントステージに建っている一軒の家ってすごい怪しいんじゃないのか。

俺は全速力で走り一色の首根っこを掴むと

「何やってんだ、どう見ても怪しいだろ。

まあいい、早く此処から離れるぞ」

「何やかんや文句を言いながらも指示に従う一色。俺たちが離れようとする前から老婆が

「ありや、珍しいねえ。こんな所に人がいるなんて。どうじゃもう外も真っ暗だし止まっていきなさい」

といきなり声をかけてきた。

お婆さんのカーソルはグリーン。

「NPCですよね?どうします、このまま森に居ても暗すぎて道も分からないですし今晩だけ泊めてもらいます?」

顔を耳に近づけ耳打ちする一色。

だからもう少し警戒心を持ってって。そんな事するとそのうち誰かに襲

わ……… って何で灯りが付いてんのに俺らの背後から、家と反対方向から近づいてきたのかとか俺の索敵に視認できるまで反応できなかったとか色々不思議な点があるでしょうが。

……… べ、別に可愛いなんて思っていないんだからね。俺ほどのボツチになると一色のあざとい行動に惑わされたりしないんだよ。だからアレだ、素でされてスゲー動揺した。

「その代わりと言っては何だけど薪を割って欲しいんじや。

今日は何か用意できたけど腰を痛めてしまっただけ……。代わりにやってくれる人を探しておったんじやよ」

そう言いながら曲がった腰をさする老婆。

一色は目を輝かしながら俺の言葉を待っている。

はあ、と短いため息を吐き

「わかりました。依頼を受けますよ。

でも今日はもう遅いんで明日の朝からでもいいですか？」

「本当ですか！ありがとうございます。」

「そうでしたら今日はゆつくり休んでください」

「そう言つて老婆は歩き出す。」

「やっぱり先輩は困っている人を見過ごせないんですね。お人好しです」

と老婆には聞こえない声で囁く。

そう囁いた彼女は優しい笑顔を俺に向けていた。からかうような声音とその表情の組み合わせは自分を可愛く見せるために努力してきた一色ならではの感情表現なのかも知れない。

これも狙つてしているのだつたら大したものだと思う。不覚にも一瞬だけ可憐だと思つてしまった。

「いかんいかん、と頭を振り落ち着かせていると」

「くすつ。何やつてるんですかせんばい？早く行きますよ！」

と一色は笑いながら老婆の元に駆け寄り腕を貸す。

それから後ろを振り返ると俺に早く来てくくださいよ、という意味を込めて手を大きく振った。

日をまたぎ、ところ変わって?:::。変わってるんだよな。確か昨日は出会った老婆の依頼を受ける代わりに寝床を用意してもらって、一色はベット、俺はソファで寝た筈だ。

じゃあ何で俺は今檻の中で床板の上に寝転がっていたのだろう。

辺りを見回したが、一色の姿も老婆の姿も無い。此処から見えるのは色々なものが所狭しと置かれている机と人1人が余裕で入る事ができる大きさのストーブだけだ。

ダメだ。何故か頭がスツキリしない。

何処からか金属がぶつかかる音がする……。

取り敢えず檻から出よう。

俺はウインドウを開き武器装備の欄に『バーンブレッター』を装備する。

リズベットから渡された時は黒がメインで所々に白のラインが入っていたこの大鎌

は今ではほぼ透明になりつつあった。

どういう原理かはわからないがmobを倒すと色が変わっていくのだ。前回の層のメインmobは半透明なゴーストだったからこの色になったのだろう。

そのまま俺は一閃すると檻は真つ二つになる。

さつきから音がするのは家の外……か。一色なら大丈夫とは思うが。

俺はフラフラと覚束ない脚で出口を目指した。木造のドアを開け、表に出ると予想通り一色と老婆だったものが戦っている。

予想外だったのは一色が一方的に攻撃されていたという事だろう。

時折聞こえていた金属のぶつかる音は攻撃を辛うじて防いだ時に発生するものだったようだ。

老婆だったモノが扱っている武器は両手剣、ただしそれを片手剣のように振り回しているのだから余計にタチが悪い。武器の相性では一色の短剣が有利なものにも関わらず逆に手も足も出ないのはそれによるものが大きいようだ。

「クレア、一旦下がれ！」

その声に反応し横目で俺の居場所を確認する一色。
駆け出した俺は大鎌を振り上げる。

「スイッチ！」

「ちよ、せんぱい速すぎますって。今消えましたよね」

普通に駆け寄った筈なのだが一色には一瞬消えたように見えたらしい。

そのまま振り下ろすと両手剣に直接的なダメージは防がれたが流しきれなかった威力によって吹き飛ばされる老婆……基『トロイムウィッチ』。『夢の魔女』ってところだろうか？

そんな光景に驚きながらも一色は後ろに下がり回復ポーションを飲み始めたようだ。
コレで一安心出来たし、相手すんの面倒くさいな。サッサと殺るか。

大鎌は一对一の戦いに向いていない。それどころか正面切つて行かう戦い全般に向いていないと言えるだろう。本来は刈りとるための武器だ。敵に死んだ事も気付かれないうように立ち回るのが一番なのだ。

そのために扱いが難しい。が慣れれば早かった。初撃で勝負を決め、刈りきれなかった場合は武器を変化させ、止めをさす。一ヶ月ほどで違和感を抱かない程度になったこの武器が今でも何処か俺に気を許していない気がするのだ。

武器に感情がある訳ないと笑いたいなら笑えばいい。ただこの武器は使い込んでも一定以上は馴染まず、使えるが使いやすくなりなく本来の力を発揮している様でしていない気がしていたのだ。

そんな武器でも圧倒できるのはレベルによるゴリ押しなのだろうか。それともこれ迄に無いほどにしつくりきている武器の性能なのか？

気がつくとも魔女のHPバーは三本から最後の一本になろうとしていた。

魔女が何かを地面に叩きつけると辺りに霧の様な物が立ち込め始める。

どんな攻撃にも対処できる様集中して待つが動きは何もなく霧も10秒ほどで薄くなっていた。

音もなく俺の後ろに移動したと。それに一色は消えちまうし、まあ目の前の敵を倒せば全ては丸く収まるだろ。

そのまま後ろにいる魔女めがけて走り寄る。魔女のHPはいつの間にか二本目の約3/4まで回復しているが気にせず攻撃する。

魔女の武器はいつの間にか両手剣から短剣に変わっているため、俺も武器を変化させ

る。曲刀と短剣に姿を変えた大鎌。そのままスキル『ワイドシュナイダー』の溜めに入るが魔女は動かずに此方を見ているだけだ。

クソツ、構えるまでも無いってことかよ。

じゃあ切り裂いてやるよ！

溜めが終わった俺は最大速度で魔女目掛けて走り出す。魔女はギリギリ避けると大きい隙ができた俺に攻撃を……して来ない。

硬直時間が切れた俺はスキルを使わずに武器を振るう。全ての攻撃を避けるか短剣で弾かれるが隙が出来たところで相手からの攻撃は無い、そんな考えが頭の中を侵食していく。だからだろう、いきなり背中に斬撃を喰らい吹っ飛ばされる。吹き飛ばされながら攻撃を受けた所を見ると両手剣を構えた魔女が立っている。そのまま前にいた魔女にぶつかり一緒に地面に転がる。

「魔女が二人……だと」

「何言ってるんですか先輩。魔女は一人だけです！」

さつきまで姿が見えなかった筈の一声の音が隣から聞こえた。

いつの間にか短剣の魔女が倒れている筈の場所に一色がいて、短剣の魔女は消えている。

「先輩は幻想を見せられていたんです。ボロボロですけど何とか先輩の攻撃は防ぎきりましたし、お話はこの勝負が終わってからのにするとしてサツサとケリをつけちゃいますよ！」

これはどうやって許しを請うか……。生半可なことじゃ許してくれなさそうだしなあ。

今すぐ逃げたいと思いつつも魔女を見据える。どれもこれも全部お前のせいだ、つて事で八つ当たりさせて貰うぜ。

さつきと違って頭がすつきりする。余計な事は考えず魔女だけに集中できる。武器を大鎌に戻し一振り……………。

なんか大鎌がこれまでに無いくらい使いやすいんですけど。

其処からは一方的だった。

残り一本だったHPバーは俺と一色の連続攻撃で青いポリゴン片を残しあつという間に消えてしまう。

「せんぱい！やりましたよ。私がLAですね！」

魔女に最後に攻撃を繰り出した一色は喜びながら目の前に現れているだろうウインドウを操作している。

「アレ？おかしいですよ。」

LAは私なのにボーナスドロップの表示がでないですよ？もしかしてバグですか？」

まず最初にバグを疑うところが一色らしいな。

まあいい、LAは何だろう？

『幻香』っていうのか。アイテム化してみても……と。

俺の手の平の上が青白い光に集まり急に重くなる。と同時に青い光が消え去り『幻香』が姿を見せた。

対のイヤリング、対の指輪、対のネックレス。計6つの装飾品がいきなり俺の手に現れたのだ。一色がそれに気が付かないわけで……。

「ちよ、先輩。その装飾品どうしたんですか！

ハッ、もしかしてこの中からどれか一つあげるから俺と付き合つて欲しいってことですか？その提案はとても魅力的なものですがいきなりペアルックとかは恥ずかしいですし、それにそういう事は口にして欲しいっていうか。だから口にしてください、ごめんなさい」

またまた勝手に勘違いされて振られる俺。毎度毎度あんな長文を一囁みもしない一色に感心してしまう。本当にお疲れ様です、佐倉さん。

まあ戦闘が終わった直後にそんなの見たら高揚が抑えきれずに暴走の一つや二つするよな、ああするだろう。

まあ勘違いさせとくのは悪いしLAって事を説明するか？べ、別に最近一色に振られるのが辛くなってきたってわけじゃ無いんだからね！

つて誰得だよ、俺のツンデレゼリフ……。

「俺を何回振れば気がすむんだよ一色。これはL Aボーナスだよ。『幻香』ってアイテムで、説明は、つと……邪を祓い理不尽に抗う……らしいな。何だよこの厨二感漂う説明文」

「へーそーなんですか……。……て何で先輩にL Aボーナスなんですか！最後は私でしたよね」

顔を膨らませブーブーいう一色。

そんなに頬を膨らませやがって突っついてやろうかこの野郎。まあ、セクハラって言われて慰謝料取られそうだからやらねえけど。黒鉄宮に送られたらシヤレにならねえし。

「L Aだろ、お前が最後の技を繰り出すよりちよい前に、まあそれこそ一秒も無かったと思うが、投擲したんだよ……」

「でも感覚は、突き刺した時に確かに感覚はありましたよ」

「つたく、話はちゃんと聞けつつの。どうせあれだろ？お前の攻撃の後に俺の投擲が当たった。」

「だから先に攻撃したのは俺だが、あの魔女が先に攻撃を喰らったのはお前のだったんだろ」

「そうなんですかねー、と一色は興味をなくしたかの様にいう。

「もう帰ろうぜ、ユキが待ってるんだろ？」

「つとそうでした。やっぱり心配かけてますよね」

俺たちは森を抜ける為に歩き出し、数分もすると迷宮前の安全地帯に抜け出てきたのだった。

その後は冒頭に戻るのだが、42層にある雪ノ下と一色の二人のホームに着くと疲れていたのだろう。一色はソファに座って眠ってしまった。寝る前に

「雪ノ下先輩は遅くとも22時頃には帰ってくると思うので」

と言って俺にそれまで残る様に暗に命令してきた。

仕方ない、一緒に怒られてやるかとずっと待っていたのだが22時をまわっても帰ってこない。

更に30分、1時間と待ってみるが帰ってこない。

おかしい、あの雪ノ下が夜遊びなんてするとは思えんし……。一色には悪いが探しに行くしか無いよな。

俺は『幻香』をアイテム化し、寝ている一色の首にネックレスを付けてやる。

顔の距離は限りなく0に近く側から見ればキスをしようとしていると思われるも仕方が無い距離だ。

そんな時に微かに動き、薄っすらと目を開ける一色。寝ぼけ眼で俺の顔を見ている。

『い、一体何をしようとしてるんですか先輩！』

たった一晚共にしただけで彼氏面しようだなんて思ってませんよね。もしそうならちゃんちゃらおかしいです。襲う前に告白してください、ごめんなさい！』

また感心するくらいの長文を使いハイスピードで囁まずに俺を振ってくるのだろう。

そう思い俺は言い訳を考える。

「わ〜せんぱいだ〜。ぎゅ〜」

俺は一色に肩と脇と腕を回され固定され、ただでさえ近かった距離をゼロにする。仮想世界だと言うのに感じられる一色の体温は温かく気持ちが良い。このまま眠りに落ちれたらなんて幸せなんだろう。一瞬そんな考えがよぎったがネックレスを付け終え緩んだ拘束から抜ける。

その時耳元で

「大好き…です…せんぱい」

という声がする。

一色は葉山の夢を見てるんだろう。幸せそうな顔をしている。

クツソ、ここ最近身を弁えるつてのが出来なくなりつつある。一色が好きなのは葉山だ、勘違いしたらいけない。

俺は居なくてもこいつがきつとお前を守ってくれる。俺の考えが杞憂で終わればい

いんだが……。

俺は足音を殺し家を出ると、ドアがロックされたのを確認し走る。

目的地は1層の黒鉄宮。雪ノ下は案外心配性だからあそこにいる確率が一番高い。それにあいつの安否確認もできる。まあ雪ノ下ほどの手練れならそう簡単には死なないだろうけど。

俺は更に転移門までの速度を上げた。

厄介事は終わり厄介事を呼ぶ

黒鉄宮の重厚な扉を開けるとそこには見馴れた顔が幾つかあった。

その中に……雪ノ下は居ない。

「お前からここに集まってどうしたんだ」

自分から出た声の低さに驚く。

普段の俺を知る奴らは驚いた様だ。

「大変よ、アハト君。ユキさんがラフコフに攫われたの」

攫われた……って事は

「ユキは生きてるんだな。それで奴らの要望はなんだ」

何故か返答を躊躇うアスナ。

キリトに視線を送るとキリトはずっと下を見ている。

「キリト、お前も知ってるんだな。教えてくれ」

名指しされたキリトは顔を上げる。

目には戸惑いが浮かんでいたが、俺の目を見て覚悟を決めたのか目の揺らぎが消える。

「アハト、お前さんがご所望出そうだ」

キリトが口を開きかけた時に声が響く。

この声はクラインか。

「ユキさんを返して欲しければお前さんが1人で46層の『叫びの崖』に來いだよ。でも大丈夫だぜ、ここにいる全員がお前さんと一緒にユキさんを助けに行くつもりだから

な！」

と胸をドンと叩きながらいうクライイン。

ここにいる全員……… 1、2、……… 13人。全員が攻略組だが相手の数も実力も未知数。そんな相手にこんな微妙な人数で挑むのはどうだろう。最悪の事態を考えってしまう。

もし雪ノ下を助けられたとしてもこの人数の半分が死んでしまったら攻略組は持ち直すのに短くない時間を必要とするだろう。そして攻略組でも殺ることができると分かった奴らが攻略組を完全に崩壊させるまでにはそう時間もかからない。

「ここにいる奴は全員罪を背負う覚悟が出来ているか」

俺の突然の問いかけに一瞬反応が遅れるが半数ほどが頷く。

「そうか。じゃあラフコフと同じ殺人者になる覚悟がある奴は前に出てくれ。この世界だけでなく、現実世界でも周りに恨まれ、避けられ、1人になる覚悟のある奴だ。そして死ぬ覚悟も」

誰一人として身動きしなかった。否、動けなかったのだ。雪ノ下の元へ行くというところがどれだけ危険なことなのか理解していなかった。中途半端な覚悟は思考を鈍らせ動きを悪くする。

それをわかっているはずの攻略組も初めてのPVPの殺し合いには中途半端な覚悟で挑むところだった。

正直なところ少数だけならカバーしあえたがこの人数では無理だ。確実に半分近くが死んでいただろう。

「アハト、それでもお前は行くのか」

まず最初に沈黙を破ったのはキリトだ。

「ああ。ユキは…… その…… まああれだ、仲間、だからな」

「それに彼奴らの狙いは俺だけなんだ。俺の所為で仲間のお前らが傷付くのは見たくない。だから一人で行かしてくれ」

「待てよ、アハト。野暮だと分かつてるがお前は覚悟ができてるのか」

ハスキーな声が響く。

「ああ、俺はどんな事だつてする覚悟はできてる。もともと俺はポツチだったし、避けられる理由が一つや二つ増えた所で問題ないさ」

「誇らしげに言う事じゃないだろ、それ。じゃあ俺はお前を信じてここで待つ。無事ユキを連れて帰つてこいよ」

う。
サンキュー、エギル。やっぱあんたは格好良すぎだよ。兄貴つて呼びたくなっちゃう。

もう一度俺は見渡すと全員が頼んだだのの声をかけてくれる。ただ一人アスナを除いて。

何故かアスナは顔面を蒼白にして、微かに身体を震わせているのだ。

そんな事は些細な事だと全く気に留めず俺は黒鉄宮を後にする。

46層『叫びの崖』

ここ46層は多分だがSAOのパッケージに乗っていた浮遊城アインクラッドの腹で膨らんでいたところなのだろう。1層の次に大きく、唯一の海洋らしきものがある層である。

叫びの崖はいつも強風が吹き、その音と波の音が叫び声に聞こえるとの事から名づけられたのだろう。この崖は森を抜けた直ぐで、半円形のステージのようになっている。

そんな所で俺は今殺人者達に囲まれているんだが………。本当に勘弁してもらいたい。

その数は三人。正確には雪ノ下を見張るポンチヨの男、情報によればPoh、バンダナで口を隠している男、ジョニーブラックと目が異様なほどに充血している男、ザザは俺と対峙する形になっている。

Pohは暗闇にいるため顔まではよく見えない。ここで鼠に情報を手に入れば鼠が更に仕事しやすくなるかもしれない。

顔を映像結晶で取ればいいんだろうが俺は崖側に立っていてザザが前衛、ジョニー

が後衛なのだろうか、少し下がった位置にいる。これじゃP o hの写真は取れない。

「殺人者ども、ユキを返せ。そうすれば命だけは奪わない。コレは取引なんかじゃない、宣告だ」

「H a h a !面白い事言うじゃねえか『執行人』。女は俺たちの手の中にいるんだぜ、そんなに大きく出ても良いのかよ。コロスぞ」

P o hが高笑いするのに釣られ前の二人も高笑いする。

「旦那あ、こいつ殺つても良いかい、殺つても良いですよ。殺りますよお」

「オイオイ、ジョニー。話を聞いてなかったのかよ。クライアントの指示は殺すな、だぞ。だろおP o h」

「ああ、でも抵抗されたからやむを得なかったら殺しちまっても仕方ないよなあ」

そう言つて笑う三人。

互いに笑い合いながらも視線を俺から外さない三人。

視線を外さなければ不意打ちされないなんて勘違いしてんじゃねえよ。

問題はユキがピクリともしない事だ。詳しい話を聞ければそれが一番だが何かの状態異常なら時間経過で治るだろう。それに死んでない事は確かなんだ。このまま引つ掴んで逃げさせてもらうぜ。

俺は10メートルはあろう距離を一瞬で詰める。

コレで雪ノ下は奪還出来ただろう。

雪ノ下に手を伸ばす。

気がつくと俺の手の甲には何か突き刺さつていて動けない。

「イキナリクライマックスとは焦りすぎだぜ。それに何より面白くない」

そのまま崩れ落ちた俺から短剣を引き抜き、蹴りで吹っ飛ばすP o h。

手の甲から不快感は消えたが全身に痺れが残っている。アイコンを確認するとイナ

ズマのマーク。

「じゃあ後は任した。拍子抜けしたぜ『執行人』」

そのままユキを置いて森へ歩き出すP o h。

それを合図に二人が俺目掛けて走りだす。

「残念だったなあ執行人。オレ特製の麻痺毒だ、少なくとも1分は動けねえよ」

「やっちまうぜ、執行人さん。バイバクイ！」

これでユキが動けない理由がわかった。

ザザ曰く俺が動けるまでにかかると時間は大凡一分。ユキは経口で摂取させられたとすれば五分はかかるだろう。

ザザの考えならの話だな。

ザザの針剣は俺の喉元に、ジヨニーの短剣が俺の心臓部目掛けて出される。動けない

獲物を狩るためだろうか、狙いはいいが隙が多すぎる。

「言い忘れてたが女の方も殺して……………いいねえそうこなくつちや面白くねえよな」

戻ってきたP o hの目には胸元を短剣で貫かれたジョニーと、曲刀で弾き飛ばされたザザが写っている。

ザザは驚愕の表情で、P o hの声を聞いて振り返り何か口をパクパクさせるジョニーは青いポリゴン片を撒き散らして質量を失った。

P o hはザザを後ろに下げ、代わりに一歩前に出る。

「短剣と曲刀を……………h a h a、お前が二刀流の持ち主か」

「だとしたらどうする」

「そう警戒なさんな。ユニークスキル持ちの同志なんだ、まずは話をしようぜ。それでお前のはどうだ。俺のはお喋りでいろんな事教えてくれるんだが煩くて仕方ねえ」

奴は一体何を言っているんだ。

ユニークスキル……は『死神』の事だろう。Pohも何かのユニークスキルを持っているようだ。

だがそれとお喋りだの煩いだの言う意味がわからない。やっぱりこいつ狂ってるのか？

「何か言ってくれよ。俺たちは十人に選ばれたんだぜ。どうだお前ならウチでもやっていける。それにお前の目は、アレだ。世界に絶望した目をしている。そんな世界に復讐したいと思った事は無いか。いや絶対にある、違うか？」

Pohは全身を使って力説する。

「お前は何故ラフコフを作った。俺の目にはお前が人を殺して楽しんでおるとしか思えない」

「Hahaha!なんだそんな事か。

理由は単純明白、このゲームでは殺しも正しい遊び方なんだよ。PvPに全損は存在する。コレは茅場がこの世界では人もmobも自分以外は全て敵だとそうプログラム

したからなんだ。

「つて事は茅場はこうなる事を予期していただろう。なら今も何処かで殺人が正当なこのゲームを楽しんでいるのかもな」

「そんな事は聞いてねえよ。俺が聞いているのは理由であつて、お前の見解じゃない」

P o hは顔に張り付けていた笑みを取り去り、息を吐く。

「……………俺はリアルでは大人しくてよ、いつも話を聞いて自分の感情を押し殺しながら周りをつるんでたんだ。」

ある日、このゲームを友達だった五人で一緒にプレイしようって話になった。一緒に2日前から並んでギリギリ買えてよお。

あの日始まりの街でデスゲームの開始を聞いた。最初は攻略本を見て安全に進んだのに一人がヘマをして死にそうになったんだよ。あれは確か38層だった、まあ何とか助かったんだが。それから四人は狩りに出る回数が減っていき、最後には俺に一人だけ狩りに行ってこいつて言ってきたよ。それから数日、いや10数日後のある日、俺は全員を殺し」

「ラフコフを作った、か。何故お前は関係ない人間にまで危害を加えるんだ」

「依頼だよ。俺が殺るのは誰かに恨まれている奴だけだ。どうだ、金を貰って人助けをする。誰かの悪を俺が殺る事で悪は数を減らすんだ」

「じゃあお前は仲間をラフコフの仲間を殺してくれと依頼が来たら殺るのか」

「ああ、殺るだろう。誰かの悪は俺の悪だ」

「お前自身が誰かの悪になっていたらどうするんだ」

「そんなの決まってるだろ。俺を悪と認識している人間を殺す。ありがたい事に俺を悪だと呼ぶ奴はまだいないんだ」

イかれている。

「お前は何を考えているのか俺には理解できない。だから」

「交渉決裂つて事かよ。残念だ……… 殺されても文句を言うんじゃないぞ」

さつきまでのニタニタとした笑いを止め、武器を握るP o hは砲弾のように飛び出し俺に向かってくる。

瞬発力を活かして思いつきり跳び上がり攻撃を躲す。

こつちは二刀なんだ。手数で押し切つてやる。

俺は一息に間合いを詰め曲刀を振るう。

それをあつさりと躲したP o hは短剣を顔目掛けて突き出してくる。

「すげえ……… もう人の皮を被った怪物だろ彼奴ら。」

あのP o hの攻撃を避けるなんて……… まあP o hも遊び半分だろうし大丈夫か」

おかしい。さつきから俺の攻撃はかすつている筈だ。その証拠に奴の身体には少しづつだが細かい傷が付いている。

じゃあ即効性の麻痺毒に侵されていないんだ。
ザザの毒程高性能じゃ無いにしても動きは止まる筈だ。

P o hは焦り始めていた。いつもの必勝パターンが効かず、ユキが麻痺毒から解放されるまでの時間に余裕がなくなってきたから。

だが一番の要因はアハトだ。最初の曲刀の一振り以外彼は攻撃をせずP o hの攻撃を躲すことだけに専念している。

「おい、『執行人』何故攻撃してこない。ジョニーを切ったお前が今更人を斬ることを恐れてるわけじゃねえだろ」

「…………… 必要だったらな。生かしてやってるんだぜ、お前を」

全く攻めてこない俺に痺れを切らせたP o hは最終手段を取る。

「おい、アクロ。力を貸せ」

P o hが何か言った。聞き取れなかったが何かの名前だったような……。

ここから先は余計なことを考える暇すら与えられない。

さつきまでは余裕をもって躲せていた筈の攻撃は速さを増し予想外な要素が含まれ、それを警戒すればするほど攻撃への反応が鈍くなるのだ。

「ザザ、そろそろ女が動けるようになる時間だ！もう一回麻痺らせとけ！」

「……そうはさせない」

俺は全力でP o hの横を抜け、雪ノ下を触れようとしているザザの右腕に短剣を投げそのまま駆け寄ろうとする。

「だからお前の相手は俺だって言ってるだろ」

その声とともに頭の上を経由しP o hが着地する。

「お前も早く本気を見してくれよ。お前の『二刀流』と俺の『アクロバット』どっちが強

いかはつきりさせようぜ」

Pohは『アクロバット』というスキルを持っているらしい。名前と先ほどの動きからするに、素早く、トリッキーな動きが出来るようだ。

「ヤダね。お前にはこの曲刀だけで十分だ。それが嫌ならかかってきな」

俺は目を閉じて挑発する。

「舐めやがって……いいぜ、本気も出せずに逝きな！」

足音が近づいてくる。

動きが機敏だろうが足は地面に着くし、息もする。

微かな音でもあれば動きは読めるんだよ。

気がつくとも俺は目を閉じていた。

………

今！

振り抜かれた曲刀は何かを斬りつけた重みを持っていた。

「P o h、大丈夫か！」

赤いポリゴン片を撒き散らしているP o hに駆け寄るザザ。アハトは横を走り抜けるザザに何の関心も向けずにユキの元へと歩いていく。

「ハハハ、H a h a..... 執行人..... ココで俺を殺さなかったことを後悔させてやるよ」

P o hはそんな言葉を残しザザの肩を借りて森の中に消えていく。

完全に姿が消えてから走り出すアハト。

それからウインドウを開き何かを具現化させる。

出てきたのは1対のイヤリング、1対の指輪、そしてネックレスが1つ。

そこから指輪を一つ取ると雪ノ下の左手の中指にはめ、雪ノ下を抱き上げると叫びの崖を後にした。

「Poh、何でそんなにイラついてるんだ。終始あんたの優勢だったしマグレで一撃くらっただけだろ」

「あいつ目を閉じてやがった。俺とあいつには埋められない程の差があるってことだよ。」

それに俺が優勢だったのもあいつが本気じゃなかったからだ。俺を油断させるため……俺はあいつの策にまんまと乗せられてたつて訳だ」

いつの間にかPohとザザの周りに人が集まってきた。

影は1つや2つでは無く優に10を超えていた。

「お前ら今は未だ時じゃ無い。来るべき時のために技を磨け」

強い風が吹いた。

Pohとザザの2人は森のさらに奥深くへと消えていった。

事件勃発

「それで君は攻略もせず一体何をしてるのかな？みんな迷宮に籠り詰めてるんだよ」

赤と白の少女が黒い少年を半ば咎めるように言う。そんな少女に対し少年は

「今日はSAOでも初めての最高な天気なんだ。そんな日は迷宮に籠るよりもこうやって風を体を感じながらゆっくりするよ、俺は。」

こうやって息抜きするから明日からも頑張れる、そう思わないか」

とのんびりと答える。

ちようにど風いだ風に押されるように起こしていた上半身を再び下げ、目を閉じる少年。

「なんでそんなに余裕で居られるのよ。最近攻略ペースはだんだん落ちてきてるのよ。」

なのに攻略組でもトップレベルの実力の君が……示しがつかないとは思わないの」

額に手を当てたため息をつきじと目を向ける少女。

「息抜きだよ。モチベーションが下がれば効率も落ちる。メリハリは大事だって俺は学んだからな。焦ってもミスを引き寄せるだけだし君も休んだら」

少女は焦っている。だから説得が無駄だと理解してすぐに立ち去るだろう。そう思っただけなのに反するように少女は腰を下ろしていた。

「あの一、攻略には行かないんですか？」

お前がそれを言うのかというまさしくブーメランな質問。

「君が提案したのにそれ言っちゃうんだ？」

とジト目で呟いた少女は横になり目を閉じる。

その後、3分もしないうちに小さな寝息が聞こえてきたことは言わずもなだろう。

「ちよつと待ててアスナ。誰にも言わないからいいよ」

「何よ。私とご飯食べられないっていうの？」

「そうじゃない。ただ女の子に奢られるのはプライドが……」

所は57層。時は昼ごろ。

全身黒づくめの男は半ば無理やりといった感じで白と赤の衣で包まれている女に引つ張られている。

男の方は抵抗していたものの御構い無しに突き進んでいく女。

男は抵抗することを諦め、割り勘で落ち着かせるために頭の中で何度もシミュレーション開始するのだった。

「NPCだけど意外に美味しいな」

「そうなのよ！私もたまたま見つけたんだけど自分で作るのが面倒な時はここにお世話になることが多くって」

「へえー。俺もこれからここにしようかな」

昼食も食べ終わり、食後のティータイム。

2人の会話は客が殆どいない室内で響き渡る。そんな仲の良い姿を見ながらマスタールと呼んでも違和感がない風貌の男性がグラスを拭きながら微笑んでいる。

そんな空気を女側が切り裂き、本題に入るようだ。

「この前は本当にありがとうございました。」

私結構勝手なこと言ってた。それに睡眠PKされなかったのも君が居てくれたからだし」

「気にしなくていいよ。俺が昼寝を勧めたんだし、攻略を頑張っていた疲れが出ただけ

だろうし。それに俺としては目の保養に………聞かなかったことにしてください」

「それに君に睡眠PKをする奴なんていないよ」

アスナが何か言っている。それは動いている口から理解できた。ただ彼女の声は外から聞こえてきた悲鳴によってかき消されてしまった。

「アスナ、行くぞ」

俺の声と同時に飛び出していくアスナ。

俺は急いで食事代を払うと遠くにあるアスナの背中を見失わない様に走って行ったのだが……

いつも朝市が開かれている教会前の広場。其処は沢山の人でごった返していた。それはおかしな事ではない。

色々な物が置かれている朝市にはプレイヤー、NPC関係なく人が集まり大盛況だ。

ただ今は朝市にしては遅すぎる時間で、教会の目の前、しかも入り口を中心として綺

麗な円形の人集りができているというのがおかしい。

さらに言えば全員が見上げている。

視界の先には甲冑を着込んだプレイヤーが槍で貫かれ首をつった状態で教会の時計の下あたりにぶら下がっていた。

どこにいるかもわからないが今は一刻を争う状況だ。

「アスナ、俺が上に行つて縄を切る。できるだけダメージを負わない様に受け止めてくれ」

と大声で聞こえるように叫ぶ。

それと、と続けようとするが

「わかったわ。後周りに注意しておけばいいわよね」

と思つたより近いところから返答が返ってくる。

俺は軽く頷き俊敏パラメータをフルに使つて教会の階段を駆け上つた。階段は木製で古く、人一人が通るので精一杯の広さだ。

階段を上りきり、扉を開けると足元には麻縄が。

俺は剣を抜き足元の縄を見る。足元からはこの世界で血の役割をしている紅いポリゴン片が浮かび上がってきている。

時間がないかもしれないと急いで縄を切ると男は下へ自由落下を開始した……
が途中でシャンつと音がなり何か壊れたことを意味する青いポリゴン片が

ガチャン

何か金属が地面に落ちる音だけが虚しく響いた。

足場に隠れていて見えなかったが空中でHPが全損してしまったらしい。

そう分かった瞬間、俺は地の利を生かして辺りを見回した。目的のモノを見つけ出すために。

罪の茨

「それで何処に向かつてるんだ？」

俺は疑問を投げかけながら前を早足で歩くアスナの後を追いかける。

本当なら周りにいた人から状況を聞いたり、アスナとの見解を交換したいところなのだが。

それを良しとしないアスナは何故か焦っているような顔つきで更に少し速度を上げた。

「キリト君、一緒にあつて欲しい人がいるの」

立ち止まったアスナはそう言うとお店の扉を開けて入っていく。

もしやとは思っていたがどうやらアスナと昼食をとったNPCのレストランだった。店の中に入ると座っている客は1人しかいない。

「ヨルコさん、知人の方が亡くなったというのにすみません。質問よろしいですか」

アスナの呼びかけに先程までうつむき続けていた女性は顔を上げる。そこには弱々しい笑顔があり、質問することが躊躇われる。

「ええ、私は大丈夫ですので……どうぞ」

「お二人の関係……というか今日はお2人でなにをしていたんですか？」

「私と彼は以前同じギルドに所属していたんです。今日は1年ぶりに一緒に狩りに出ていました」

「この層のエリアですか？」

「こんな事を言うのは何ですがヨルコさんの装備はこの層では少し厳しく思うのですが」

「ええ、その通りです。私はいつも5層は下の迷宮区でソロをしています。この層は彼

が指定した層なんですよ。そう、彼はこの層でも十分に戦える強さでした。

お昼になってこの街で昼食を一緒に採ったのですが逸れてしまいすぐ後に……
うう……」

俺はアスナに視線を送る。アスナは頷くと

「ヨルコさんありがとうございます。宿までお送りしますね」

と言つてヨルコさんを連れ出した。

俺は俺でする事が出来た。

俺はメッセを4通出すとそのまま転移門まで向かった。

所変わつて50層はとある店にいる。

何故か、といわれれば殺人に使われたであろう武器を鑑定してもらう為。

「おいキリト、何でこんなの持ってんだよ」

俺は店内を軽く見渡す。

「なんでって、拾ったんだよ。それで鑑定結果はどうだったんだよエギル？」

話を振られたエギルは厳ついからおを洩らせると

「どうもこうも完全にボンクラだよこいつは。」

名前は『罪の薔薇』。まあギルティゾーンってところだろうな。作製者は『グリムロツク』だ」

「それでボンクラってどういう意味だよ」

「武器種によってそれぞれ効果が違うのは知ってるだろ」

確認を求めるエギルに合わせ俺は無言で頷く。

「それで槍つてのは貫通と刺さっている時の継続ダメージが基本効果なんだがこいつは特に継続ダメージが大きく、更に抜けにくいように返しまで付いていやがる」

「ちよつと待てよ。それじゃ、こいつは継続ダメージ特化つてことだよな。そんなの戦闘には不向きだろ、手から離れたら耐久値が減つてくここじゃ。それにmobもバカじゃない、刺されたら抜くに決まつてるし何より持ち主も武器を手放す事になるんだぞ。実用性がないっていうのは本当だな。

「じゃあ耐久値は多いのか？」

「寧ろ耐久値は少なめだ。だからボンクラつて言つたんだよ。こんな武器じゃ何にも出来ないさ、恐らくもつて10分しか使えない武器じゃな」

でも……と口にまで出かけた言葉を飲み込み落とす。

これは殺人に使われた武器だ、と言えばエギルも巻き込む事になる。

それに人1人の命が失われたのだ、無闇矢鱈に話していい事ではない。

「耐久値は、今の耐久値はどれ位あるんだ？」

飲み込んだ言葉の代わりにどうでもいい事を聞いてしまう。

人を殺めたのだから耐久値が減っているのは当たり前だ。

「耐久値は……あまり減ってないぞ。持ち主から離れて2、3分つてとこだろうな」

俺はこれ以上の失言を防ぐ為にエギルに別れを告げて店を出た。

時刻はちょうど17:00のようで何処からか『7つの子』のメロディが聞こえてきた。

取り敢えず『グリムロック』に話を聞くのは明日にしよう。

今からは……あの現場に何か証拠になるような物が落ちていないか確認でもしに行こう。

それに犯人は犯行現場に戻ってくるとも言うしな。

まあそれが正しいんだつたら俺も犯人の候補に晴れて仲間入りなんだがな。

俺は探偵になったつもりでこの事件を嗅ぎまわるのだった。

「それでどういった御用でしょうか。私は戦いを止め、サポート職に切り替えた者です。あなたに合うような武器を作れるとはおもいません。もっと他の人を当たってみては如何でしょうか」

細い目を更に細め弱々しく笑う男、目の前の男こそ事件に使われた武器を作った男、『グリムロック』だ。

そんな彼は自分の作った武器が人を殺した事など全く知らない様子だ。

俺は窓を開き、操作し『罪の薔薇』を具現化する。それを見た彼が微かに息を呑むのを俺は見逃さなかった。

「グリムロックさん、これはあなたが作った武器で間違いないですか？」

彼は黙って頷く。

「あなたはこれを誰に売ったか覚えていますか？」

首を横に振った彼は言葉を続ける。

「その槍はその日に私が作った中で一番の出来でした。

耐久値が少ないという確かな欠点はあったが、それを補ってくれる継続ダメージ。私は徐々に興奮を覚え、槍を片手にフィールドに出たんです。

フィールドのmobの腹部に深々と刺さった私の槍は返しの役割をうまく生かし私の力では抜く事ができなかった。そこで気がついたんです、私には……」

「備えの武器を持って来てなかったんですね」

そういう事です、言って頂くグリムロック。

「この槍は砕け散った物だとばかり思っていました。だから今まで探そうともしなかったのですが……誰かがmobを倒してドロップさせたんですね」

俺は話の礼をいい、彼に槍を返す。もともとは彼のものだったのだし、俺には使い道

が無かった槍だ。俺は二つ返事で了承した。

如何やら1時間程度話していたらしい。次の約束まであまり時間がなく俺は急いで56層へと向かった。

56層 『グラオブルグ』 中心街

「おいキー坊こつちだよ。オネーサンを待たせるなんてエラくなつたじゃないか。

ここはキー坊の奢りだな」

テラスの一角から特徴があり過ぎる声をかけられる。

声の発信源は浅黒い肌と独特なフェイスペイントを施した女…… もといアルゴだった。

今は関係ないけどアルゴって名前、アラゴの円盤と時々こつちやになるんだよな。

「仕方ないだろ。思った以上に話が伸びたんだよ。それより仕事を頼みたい」

「仕事……ねエ。いいぜ、オネーサンに何を頼みたいんだ。キー坊とオネーサンの仲

だ、安くしといてヤル」

そこはタダにしろよと思つたがアルゴに恩を売られると後々やつかない事になりかねないと気付き口を噤む。

そんな俺の姿にアルゴは他に待ち人がいると勘違いしたのだろうか？

「キー坊、お前の事だからーちゃんも呼んでるんじゃないの力？」

「アハトか？呼んでるけど返信が来ないんだよ。

つかなんでアハトの名前がここに出てくんだ………よ」

一瞬言葉が詰まってしまった。

だつてあのアルゴがそわそわしててアハトが来ないとわかつたら気を落としたんだぜ。

そういうのに全く興味ないのかと思つてたのにいきなりそんなそぶり見せられたら驚くつて。

「あー、その反応やつぱりあのバカは言つてナイみたいだな。まあキー坊とはーちゃん
の仲だし行つてもいいダロ」

さつきまでの雰囲気は何処かへ行き、呆れた雰囲気のアルゴ。

「攻略本つて初版と改訂版があるのは知つてるダロ？」

アルゴの言う通りで、初版は階層が開かれた3日以内に出される。初版にはフィール
ド毎に出るmobの名称、特徴、弱点、それに迷宮区の入りが何処にあるかが書かれ
ている。

この本があるおかげで初めてのmobでも落ち着いて対応できる。こつちは主に
フィールドでのレベリングに使わせて貰っている。

改訂版は階層開放から大体1週間で出される攻略本。

この本には初版の情報をより深く正確にし、更にはその階層で受けられるクエストの
情報、更にはboss部屋の場所まで載つてしまう。bossの名前と見た目、その他
少しの情報が載るのでbossの偵察戦やこれまたレベリングに用いられる。

アルゴが作っているのはわかっている為攻略組のみならずアルゴを知る者全てがアルゴに一目置き、機嫌を損ねるような事をしないように気をつけている。

ただ疑問があるとすれば俊敏、隠蔽、素敵の3つに全振りして居る筈のアルゴが1人でこんな量のデータを集められるとは思えない。というか詳しいレベルはわからないがそんなステ振りではmobとやり合えるはずがない。誰か協力者がいるのかそれとも俺のエリユシデータよりも強い魔剣を扱っているのか……。アルゴだからなあ、まあ後者はありえない気がするが。

「あれ75パーセント、んや80パーセントははーちゃんが作ってんだぜ。因みに毎回bossの絵を描いてるのもはーちゃん」

「一体いつから、まさか一層からアハトが攻略本作りに参加してたってことはないだろ」
だつてアハトの悪名が流れ出したのが一層の攻略終了後。それより以前なら名前を伏せる必要がない……。ないはずだよな。それかアハトには俺には見えていない先が見えているのだろうか。

「ああ一層の時点ではオレが1人で作ってたヨ。

情報提供位はしてもらってたかも知れないケドナ。やっぱりキー坊に行ってなかったかあのバカは」

俺の表情は凄いわかりやすかったのだろう。

ただそんな事を気にしていられないほどに動揺している。

仮説は立てていたじゃないか。しかも1週間で迷宮区をクリアする實力を持っている人物、そう俺以上の實力を持つている奴なんて2人しか思いつかない。片方は隠すメリットなんて全くないんだ、消去法でアハトになるのは当然だろ。

「まあいい力。それで本題はなんだイ。大事な内容なんだロ」

テンパリ冷静さを欠き落ち着きを無くしどんどん思考の海に沈んでいく俺をアルゴの言葉は引つ張り上げる。

今は圏内で人が殺されたかも知れないんだ。

その注意喚起と対策、色々な視点からの実験を試さなければならぬ。

その事を伝え手伝ってくれないかとアルゴに頼んだ。ただ俺がどうやってアルゴに

頼んだのかは覚えていない。というか手伝いを承諾してくれたのを知ったのはその夜に届いたアルゴからのメッセを見たからだだった。

それ程までに俺は動揺していた。

キリトは自身が動揺していた原因を気付けなかった。ただ遠くない未来自分はその原因を知ることができると確信に近い何かを感じ取ったのだろう。キリトは灯りを消し静かに瞼を閉じた。

第2の被害

「それでどうダ、キー坊」

今、俺の左手の甲には貫通、継続ダメージ込みのショートピックが刺さっている。

視界の端では圈内へ入った時に出る表示が薄くなっていく。

hpバーには目立つ変動は………無い。

「圈内に入った瞬間にダメージは無くなった。圈内で感じるのは異物が刺さっている違和感だけだよ」

これまでに思いつく手段の全てを実験してきたが、やはり圈内に入るとダメージは全く入らない。

これであの殺人が決闘モードによってhpが全損したか、それとも俺たちでは思いつかないようなシステムの穴を見つけたかの2択になった。

ピピ、と電子音がなり視界の端には手紙のマークが浮かぶ。

『すまん、少し立て込んでな。

後1、2日でカタがつく筈だからそれ次第お前に会いに行く。

俺も調べるから要件だけ返してくれ』

要件のみを書き、要件のみの返信を求める他人とのコミュニケーションを一切度外視したメツセージ。

俺でも少し引いてしまうような簡潔さだが、コミュ障な俺には余計な事を考えずに書けるからありがたい。

俺は事件のこと、槍のこと、検証結果のこと、その他の事件に関係しそうな事を全て書いた。

その量メツセージ10件分。

「待たせて悪かったよ、アルゴ。

一応だけ警戒の強化と前に知らせたような注意をもう一度して欲しい。頼めるかな?」

「わかったぜ。オネーサンに任せときナ」

俺とアルゴはそこで別れた。

その夜、再びピピ、と電子音が頭に直接響く。

『キリト君、明日ヨルコさんから話を聞くんだけど一緒に来てくれないかな？』

俺はアスナに肯定のメッセを送ると宿まで帰り眠りについた。

翌日の昼頃、57層の主街地にある宿屋の一室にいる。

「それではヨルコさん、お話を伺ってもよろしいですか？」

「ちよつと待ってくれ。ヨルコさん、グリムロックという名前を知っていますか？」

ヨルこさんは領き何かを察すると話し始めた。

「前にもお話したと思いますが、カインズと私は同じギルドに所属していました。ある事をきっかけに今はもうなくなってしまうましたが……。きつとそれが今回の事件の始まりだったのでしょうか。」

あれは一年前のことです。私たちギルドメンバーは当時の最前線よりも10層近く低い層で狩りをしていました。

その時に指輪がドロップしたんです。

それは俊敏値20上げるといふ物でした。最前線でもドロップしない程の高性能な指輪を手にした私たちは話し合いました。この指輪を売るべきかと。

私たちのギルドは5人で構成されていたのでちようど良く、度々意見が二つに割れた時は多数決で決めてきたんです。だからその時も多数決を取る流れになりました。

いつもは全員が見ている状況で手を上げるのですがその時は、禍根を残すといけないから、という意見でギルマスであるグリセルダさんが決を取るといふ流れになったんです。

結果は4：1で売却するという形になりました。

後から話してわかったのですが私とカインズ、そしてシュミットが売却に賛成して
ました。

売却に決まった後のグリセルダさんの行動は早かったです。

彼女は準備を済ませると次の日には最前線へと向かいました。それから数時間後、
女のHPバーに麻痺のデバフが表示され急速に減り、そして全損したんです。

私たちは最前線まで急ぎました。彼女の足跡は圏外まで続き、門を出たところで途切
れていた。ただ一つ、ギルドの紋章が刻まれた指輪を残して。彼女は逝ってしまいま
した。

ただ不思議な点はいくつかありました。いくら最前線とはいえ私たちの中でも最高
レベルだった彼女が門から出た付近で一気にやられるとは思えないのです。一つの仮
定ですが私は他のプレイヤーに殺されたんだと思っています。

それからグリムロックスさんは塞ぎこむようになり、ギルド内の雰囲気は悪化、解散と
なりました。

それから一年。私はカインズと連絡を取り合い、会うことになりました。

そして彼は死にました。彼が死ぬ直前、彼の後ろにグリセルダさんがいたんです。い
え、顔を見たわけでは……。ただ彼女が愛用していたマントにフード姿が見えただけ
なんです。ただその姿がグリセルダさんそのもので……。

あれはきつとグリセルダさんだっただんです。私たちが売却を選ばなければ彼女は死ななかつた。だから彼女は売却を選んだ私たちを……」

突然話すのをやめたヨルコさん。

顔を見ると苦痛に満ちた表情で満たされている。そのまま彼女は力が抜けたのか窓から落ちていく。

俺は身を乗り出してヨルコさんを視認しようとする

「キリトくん、屋根を見て！」

と声がかけられる。

屋根の上にはマントを着ている奴がいる。

俺は窓から飛び降りると跳び、屋根に乗る。その時には既に誰もおらず、人混みに紛れられたのだと察した。

マントを脱がれてしまえば先ほどの人物が誰だなんてわからない。

屋根から降りるとヨルコさんが落ちたところに向かう。

そこには険しい顔をしたアスナが1人、短剣を持っていた。

そして皆いなく……

「シユミットダロ。そいつなら今は聖竜連合に所属してるぜ。ちょうど一年前ダ」

俺は今鼠と話している。違うな…… 情報を買っている。

ギルド立ち上げ用のクエストを終え、来ているメッセージを確認するとキリトから何通も届いていた。いつもの俺ならスルーしていただろうがギルドに勧誘しようと考えている手前現時点での無視は得策でないだろう。

内容を確認し、詳細を聞くと俺はある仮説にたどり着き、メッセージを返した。メッセージにはただ一文、シユミットの動向を監視してくれ、と書いて。

「オイ、聞いているノカ、はーちゃん」

グリセルダさんは殺されたんだろう。おそらく犯人はあいつらで間違いない。

なら誰が依頼したかだ。一番疑わしいのはシユミットだ。

最前線から10層も下で活動していたギルド『黄金林檎』を抜けてすぐに聖竜連合に入るなんてあり得ない。あそこはレベルだけでなく装備の品質も確認してくるからだ。寧ろ装備がしっかりしていれば入団することも可能とまで聞いたこともある。かなりの金を装備に費やしたことになるだろう。

そんな金をどこから調達したのか疑わしいが、ただ怪しすぎる気もする。もつと上手く出来るだろうにここまで怪しい要因があると逆に疑わしくなくなってくるから不思議だ。というかここここまで揃えば誰かに謀られたというのが正しいだろう。

なら、誰にだ……？

パシ

つという音と共に頭に痛みが走る。

「ねえ、話くらいちゃんと聞こうよ。考え事してると周りが見えなくなるのはアハトの悪い癖だよ」

「痛い、何すんだよネズ…… ミ？」

さつきまで前にいたはずの鼠フードは消え、代わりに浅黒い整った顔の少女が座っている。黒い綿パンに黒いタートルネックを着た少女が座っているのだ。

「…… あの、どちら様ですか？」

それにさつきまでネズ…… 情報屋がここに居たはずにやんだ…… なんだが知らないか？」

この世界で死線を幾度となく、くぐり抜けてきたとしてもやはり俺のぼっち体質は治らないらしい。もうここまできると誇りに思うレベル…… って恥ずいからこんな早く慣れたんだよ、正直に言えば。

「オイオイ、何寝ぼけたコト言ってるんだヨ。俺ダゼ俺。皆の情報屋、『鼠のアルゴ』さんダゼ」

目の前の少女はジト目で独特な口調を使った。

そういえばこんな外見だったな……。

「久々に素のお前を見たから頭回らなかつたんだよ。しかも仕事の話の途中にだぞ」

「話の途中に考え込み出すアハトが悪いんでしょ。わかつたらちゃんと聞こうよ」

「ごもつともな忠告に抗議を辞めて頭を下げる。ポツチはちゃんと弁えているものなのだ。」

「まあいいや。怪しまれてるし一回移動するよ」

移動した先は22層、俺が拠点としているホームの前。

市街地からそこそこ離れたところにあり、mobが湧かないように設定されているエリアにあった家。値段もあまり高くない人から離れた立地ということが決め手で買ったが思った以上に景色も良い。

我ながらいい物件を見つけたと密かに喜んだレベルだ。

家に帰れたのは嬉しいし、ありがたい。ただ問題が一つあるとすれば、『なぜ、アルゴが俺の家を知っているのか』だ。

俺はこの家を誰にも教えてはいないし、勘付かたたくないから帰宅するときにはかなり気を配っていた。

「なぜここを知ってるって聞きたそうな顔だね。知ったのはたまたまだよ。下層に用事がないとこないアハトが22層にだけは頻繁に来ていようような気がしてね。ここならレベル的にも問題ないし1人で探してたらアハトが好きそうな条件の家があっただけ。後はアハトが来るかを数日間張り込みしてたんだ」

頬に手を当て、恥ずかにそう言うアルゴ。

やってる事はただのストーカーということに何故気がつかないのだろうか。バレているならしょうがない。俺はアルゴを迎え入れ話を聞く体制に入る。

「この情報は誰にも売るなよ。んじゃ話を始めてくれ」

領き情報を話し出すアルゴ。

残ったメンバーの現在、問題の指輪の詳細、killの方法、etc……。

普通に考えればグリムロックが他の奴らをkillしているのだろう。ただ彼にはアリバイがあるらしい。

「ちよつと待て、今日が命日なのか？」

「うん。もつと詳しく言えば今日の16:00だよ」

2年もかけて復讐をするような相手が命日の前に2人をkillするのだろうか？

俺はよくわからないがここまで執着する奴なら命日に一掃するんじゃないのか……。

「鼠、今すぐ黒鉄宮に行つて確かめて欲しいことがある。大至急だ！」

「え、ちよ。どこに行くのさ」

「十字の丘だ！お前は絶対に来るなよ。
後は頼んだ」

鍵を出し鼠に投げる。

そのまま走り出し転移門まで急ぐ。

途中キリトからのメッセが届き転移結晶を使い19層まで飛ぶ。

どうやら想像していた最悪の未来が訪れたようだ。

シユミツトの後を追ひ、辿り着いたのは19層の十字の丘。

大きな十字架が1つオブジェクトとして置かれている所からそう名付けられた丘だ。

奴の挙動がおかしかったからアハトにメッセを飛ばした。

彼は何かに怯えているように辺りにキョロキョロと目を向け、今にも発狂しそうな様子だ。

「おい、いるんなら出てこいよー」

急に叫び出すシユミット。

隣にいるアスナが動こうとするが止める。

目で訴えてくる彼女にシユミットを見るように促すと、何かに気がついたかのように
黙る。

「俺を疑ってるんだろ。でも、あれは俺のせいじゃない。俺だって知らなかったんだよ
！」

あんな事が起こるって知ってたら絶対に言う事聞いてねえよー」

気がつくともローブを着た女性が十字架の前に立っている。

「…………… 悪かった。あんたが死ぬなんて思っていなかったんだ。本当に悪かった
よ……………」

その場に崩れ落ち、赦しを乞うシユミット。

シュミットが独白を始める。

立ち去ろうと動き出した瞬間、すごい速さでこっちに向かってくる3つの反応現れる。

「アスナ、誰かくるぞ。カーソルは……赤だ」

アスナは何も答えない。

「あと数秒でここに来る。撃退するぞ」

視界に映るアスナは強張りながら無言で頷く。

「……3、2、1、今だ！」

茂みから飛び出して奇襲は成功。あとは刀身が身体を貫くだけだ……と思つていた。

切っ先は友切包丁によつてずらされ、行き場を失くした力そのまま虚空に消えてい

く。

「ハハ、アニキの言った通りでしたね。ナーPOH！」

「そうだな、つてお前だったか『黒の剣士』」

目の前にいたのはPOH、ザザ、そして見知らぬ『アニキ』と呼ばれるフードを被ったプレイヤー。

距離を置こうとするも体が動かない。

すると左足の甲に鋭い痛みが走る。

ザザが愛用している針剣が貫き、麻痺のデバフが身体を蝕んでいた。

「いいねえ。アニキ、『黒の剣士』は俺がいただく。ザザと2人で残りの雑魚を頼みます」

甲から針剣が抜け、不快感がなくなる。

体はピクリともせず、周りの状況が全くわからない。ただわかることは他の皆はまだ無事と言うことくらいだ。

と言つても彼らは動けずに止まっていることから考えることを放置したんだろう。

「本当は正々堂々闘つて殺したかったが……。じゃあな」

俺の首めがけて振り下ろされる友切包丁はスローモーション。まるで映画のワンシーンのようだ。

気がつくとも目の前は真つ暗になっていて……。

ああ、死ぬときは最後まで目を開けていようと思つてたのに。

走馬灯つてやっぱりデマだったんだな……。

やっぱり……。死ぬのは……。怖いよ……。

後悔と....

カキーン

金属がぶつかり合う音が遠くで聞こえる。

実際は目の前の出来事なのに、だ。

俺は地面に転がっている短剣を拾い上げることなく、そのまま肩に当てていた得物を振るう。

ダメージを与えるためではない。ただ単に距離を作らせるためだ。

短剣を蹴り飛ばし他の2人にも存在をアピールする。

俺の目の前では誰も殺させない。俺から目を離すといつでも殺してやるぞ、と。

遠くで声がする。

「今度は『執行人』かよ。いいぜ、まとめて相手してやる」

「いや。ここは3人でこいつを消す。行くぞ、ザザ、POH」と。

3人が突っ込んで来る。

POHの攻撃を躲し、片手剣を弾く。その隙に突き出された針剣の腹を伸ばした手で払い、切っ先をそらす。

隙をついたつもりだったのだろう。刺さるはずだった針剣は受け止められるはずだった力が前に残り、ザザは少し前体重になりストップが遅れる。

そんな奴の鼻っ柱を殴り飛ばす。

数メートル吹き飛ばされたザザはそのままダウン。

おそらく目眩でも起こしているのだろう。

急に動きを止めザザに近づいたフードの男は片手剣を振り下ろそうとするが、POHの友切包丁が2人の間に伸ばされる。

何故か睨み合いを始めた2人だったが、フードの男が先に言葉を発した。

「もういい、こいつらは俺一人で処分する。死にたくなかったらここから消えろ」

と、静かに呟くフードの男。

POHは何も言わずにザザを抱えて走り出した。

雪ノ下を拉致った時は高圧的だったのに対し、かなりの服従っぷりで呆気に取られてしまう。

「チツ、使えないコマだ。Poh以外使えねえのにそのPohは言うこと碌に聞かねえし。あーイラつく…………… だから死ね」

そう言つて目にも留まらぬ速さで突っ込んでくる。

1撃、2撃と無茶苦茶に片手剣を振り回してくるが全てを辛うじて弾く。

奴の意識を自分一人に上手く寄せられたのだろう。こちら側の残りは痺れているキリトのみ。残りは上手く逃げられたようだ。こちら側の残りは痺れているキ

まあ茂みに隠れただけかもしれないが。

「もう直ぐ攻略組のメンツが応援に駆けつける。お前も早く逃げたらどうだ」

自らの口から出たはずの言葉はやはり、何処か遠く感じる。

「ああ、イライラする。イライラする、イライラ、ああアする！バカにしているのか！俺が貴様なんか、攻略組の奴らから逃げるだア！

いい、いいぜ。お前ら全員ここでゲームオーバーだよオ！」

そう言う奴は片手剣を構えずに脱力する。

何をするつもりなのか、疑問に思うも頭の中でシミュレーションを欠かさずに。しかし、常に視界に残し、いつでも対応できるように意識する。

奴の右足が微かに前に動く。

無意識のうちに左手を得物に添える。

右足を後ろに振った瞬間……消えた。

直感で得物を構える。直ぐ横で金属がぶつかり合う音が響く。

そこで第一撃を防げたことを理解する。

二撃三撃、三撃四撃と紙一重で防ぎ続ける。

と言つても見えているわけではない。ただ近くの殺気を感じ、得物を合わせているだけ。

一撃必殺な刃は確実にダメージを蓄積させる。

致命傷は全ていなししているが少しずつ擦り傷が増えていき、身体には無数の紅い線が刻まれている。

「アハト君！」

急に飛んできた短剣を左手で上手く掴む。

飛んできた方を確認する暇が無いから感謝は後でいいだろう。何かを引き摺る音が微かに聞こえる。

「もういいですよ、先輩！」

そのまま右手にある得物を変形させる。

変形に必要な時間は1秒前後だったが、短剣でいなし躲すことでダメージを負うこと

はなかつた。

「装備を変えた所で何が変わるってんだ！お前は俺に消されて終わりダア！」

右手の曲刀で片手剣を受け止め、左の短剣を突き出す。

手数のアドバンテージは大きく防戦一方だったさつきまでとは変わり、一気に攻撃が決まり始める。

と言っても隙を生む大振りは避ける。そのために右の曲刀でいなし、左の短剣で素早い切り返しが入る。

圧倒的手数で押し切れるはずの両手装備。なぜ誰も扱っていないかというソードスキルが制限されるからである。

簡単に言えば得物を持つことで溜めのモーションにズレが出たり、攻撃途中にバランスが崩れ無効化される。無効化されたとしてもクールタイムは同じだけ必要になるから誰も使おうとしない。

当然と言えば当然で、たった1秒されど1秒の殺し合いで生きている中、発動確率が落ち、しかもクールタイムのみが発生した日には死を覚悟しなければならない。

そんなリスクは誰も負いたくないのだ。

そんな現状の中俺は二刀流である実験をした。

結果としては実験は成功。リアリティを追求した茅場に対して感謝するしか無い。

試したのはソードスキル無しでの二刀流の実用性。それと同時にmob毎に行った部位によるHPバーの減少量や即死の確率。

mobのモデルとなった現実世界の生き物の特性が色濃く残っていて、ほとんどのmobは斬首で即死。百足など斬り落としても動くことが可能なmobもいたがコツチに襲いかかってくることなく、その場で暴れて消えていった。

ただこれを実践するには少なくとも数十のレベル差が必要になり、なかなか実践は難しいだろう。ただ一言言わせてもらいたい。両手装備は得物によって隙を全く無くし、攻撃し続けることができるということ。

対人戦において大事な技はソードスキルではなく、自身の経験による技だと俺は思っている。

ソードスキルはシステムのアシストが入るため発動速度、モーション全てが一緒になる。そのために避けることも余裕であり、隙を作ってしまう。

隙を作った瞬間に首を切られたら死んでしまうし、俺のレベルまで行けばどんな相手でも余裕で斬首を可能にしてしまう。いくら骨が硬いとしても力のパラメータをあげれば簡単に断裂させることができる。

結論は隙を作りづらい短剣でちよつかいをかけ、刀などで攻撃を弾き、相手の隙にとどめを刺すというのが対人戦では案外強かったりする。

つうか俺のレベルだったら通常の攻撃でもかなりのダメージを与えることができるから関係ないのだが。

つまり何が言いたいかというと奴の攻撃を受けることはなくなり、怒りで雑になり始めた奴の体には多くの深く広い赤線が刻まれている。

奴のhpバーが赤く染まると同時に身体から黒い何かを吹き出し始める。

「あ、ガ……アあ……………ぐアアアア！」

突然の変化に唾然としていた俺に得物を投げつけ、突っ込んでくる。

飛んで来た片手剣を弾こうと構えた瞬間それは急激に動きを変える。

急に止まったかと思うと横に振られたのだ。右横っ腹に激痛が走り吹っ飛ばされる。

吹っ飛ばされる最中に何が起こったのか理解する。

奴は片手剣を投げ俺が意識をそれに向けた瞬間走り出す。弾くか避けるか、何かしらのアクションを起こす直前で追いつきそれを振るう。

もしこの技が完璧に完成していたらどうなっていただろうか。横っ腹を斬られ、即死ではないもののかかなりのダメージを負う。

今の一撃でイエローゾーンギリギリまで削られたのだ、吹っ飛ばされずにその場で追撃を喰らい死んでいたかも知れない。

追撃を警戒し、受け身を取って急いで起き上がる。もう目の前まで奴が迫っていてもおかしくは無いのだから。

そんな俺の予想は外れていて奴は一步も動いていない。動いていないどころか奴はその場で笑っているのだ。

「ありがとなあ。こいつ俺を手に入れたのに使おうとしない。狂ってるのに狂おうとせず狂ってるようにみせていやがるんだ。

だがお前のおかげで俺が表に出てこれた。完全にこいつは狂うことができた。感謝するぜ、だから今日は帰ってやる。次会うときがお前の命日だと思よ」

再び片手剣を投げるとクイックドロウを用いて短剣を出し、時間差で投げってくる。

片手剣を弾き、短剣を受け止める頃には奴は既に見えなくなっている。索敵を発動すると赤カーソルは俺や他の9人が纏まっている方向とは反対側にもものすごいスピードで動いていく。

あと少しで俺の索敵範囲からも抜け出すだろう。

辺りの索敵を辞めずにその場で腰を下ろす。

「…… ああ、疲れた……」

まだ帰ることはできない。するべきことがまだ残っているからだ。

一息つき立ち上がると9人がいる所まで足を運ぶ。

そこには鼠、雪ノ下、一色、キリト、アスナ、黄金林檎の4人がいる。

黄金林檎の面々は急に姿を現した俺に警戒しているらしい。

それも一瞬だけで他の5人の表情を見て大丈夫だと思っただろう。3人は感謝の気持ち言葉をにする。

一気に辺りに漂っていた暗く濁っていた雰囲気は霧散していくのがわかる。

そんな雰囲気をぶち壊すべく言葉を発する。

「……グリムロックさん、ですよ。今回の事件の発端は……いえ、グリセルダさんの殺害も」

予め可能性を伝えておいた雪ノ下、一色、鼠以外が驚きを隠せずに、中には激昂する者もいた。

「グリムロックはグリセルダと結婚までしていたんだ。そんな彼が殺すわけないだろ！」

「そうよ。グリムロックさんとグリセルダさんはいつも仲が良かった。グリムロックさんも何か言ってくださいよ！」

彼は何も言おうとしない。ただただ、先程から変わらずその顔面に微笑みを貼り付けている。

彼らも薄々気が付いているのだろう。だから否定してほしい。だがそんなことは関係ない。

俺はそのまま続ける。

「……じゃあ何故グリムロックはここにいたんだ。しかもお前らとは別の所にわざわざ隠れて」

「そ、それは私たちが呼んだの。グリセルダさんを売った犯人を追い詰めたって言うて……それで」

「別々に隠れていた理由は？」

「……それは」

彼らはグリムロックを信じ、ミスを犯し、間違った答えをたどっている。

別に間違えることが間違いだとは思わない。間違つて間違つて、それでも諦めずに挑戦することを誰が馬鹿にできるだろう。それはあり得てはいけないことだ。ただそれは命をかけてまで行うことではない。

どの人も『無知は罪だ』と言うだろう。だからこそ自身が知らないことでさえも、知っているかの様に語り、ミスを犯す。

知らないことを何故認められないのか。

恐らくは人間が集団を求めること、少しでも集団内で優位に立ち続けたいという意識を少なからず持っていることが原因だろう。

まあ、ぼっちの俺には知ったことではないが、得意の人間観察からはそういう傾向が目についた。

人間とは集団で生きていく上で自分よりも下位の存在を必要とするのだろう。だからこそ隙を見せてはならない。隙を見せれば弱みを握られ今までは下位だと見下していた者に見下されてしまう。だからこそ人は自身の無知を隠し、憎み、恨み、罪とする。彼らは自身らの無知を忘れ、下位の存在を作り上げ、考えることをやめてしまった。

彼らの犯したミスは『信頼』し過ぎたことだろう。彼は彼女の夫だからあり得ない。彼女は彼女と親しかった、彼は彼女と親しかった、彼だけが彼女が死んでから大きく得している…… etc.

うわべだけを汲み取り、知った様に感じてしまったこと。其れこそが最大の『誤ち』だろう。

本当の『賢者』とは己の『無知』を知っているものであり、『無知』を認めぬ者は『賢者』足りえない。現状に満足し考える事を放棄する者はそれこそ『愚者』だ。

彼らは無意識に感情論で知らないことを知っていると信じ込み過ぎた。疑うことを、

考えることを辞めた結果がこの始末だ。

彼らは彼に言葉を求める。

俺の質問に対する否定の言葉を。

一向に変わることのない彼の態度に違和感を覚えたのだろう。彼らの表情は次第に強張り始め、今までは交互に送っていた視線が今では彼に貼り付いて離れようとしな
い。

そんな中

「ああ、ここで君たちを殺せていれば私とグリセルダのことを知る者が居なくなるはず
だった。そしてあの世でまた2人で……。そんな考えも今、君に邪魔されたが」

「……グリムロックさん……。嘘……。ですよね」

彼女の声は虚しく響く。

「グリセルダは現実でも私の妻だった。あれは良く出来た女だったよ。家を守り、夫を

たて、話をしてもらってもいつも楽しかった。そして2人で一緒にSAOに入った。だがそれは間違いだった。

初めは2人で一緒に震えていた。ただ生活が厳しくなってくると、狩りをしなくてはならない。だから私たちは攻略本を基に狩りになるようになった。

次第に狩りのためフィールドに出ることが増えていった。狩りに余裕ができてきた私に気が付いてしまったんだ。グリセルダが狩りを楽しんでたこと、これまでに見たことがない程に活き活きとしていたことに。

それから私たちは話し合い、攻略組は無理でも抗おうという結論に至り中堅プレイヤーの仲間入りをした。彼女は徐々に変わり始めた。だから私は私の知る彼女でいてもらうために殺した。私は私の知る彼女を守るためにグリセルダを殺したんだ」

3人は唾然とし、1人は泣き崩れ、1人は顔面を青くさせ、2人が哀れみとも怒りとも捉えられる表情をしている。

そんな中俺はどんな表情をしていたのだろうか。失望だろうか、それとも『本物』と勘違いした醜い気持ちの押し付けへの苛立ちだろうか。やはり自分ではわからない。

「あなたは間違っています！ どうしてグリセルダさんを愛せなかったんですか。グリセ

ルダさんもあなたが愛した人の1つの内面だったんですよ」

彼は笑いながら告げる。

「君は無条件で人間を愛することができるとかいいの。私には無理だった。そして君にも無理だろう。そんな甘い考えはやめたほうがいい」

「違う。私が言いたいのはそうじゃない。なんで愛した人のことを無条件で信じなかったんですか。新しい一面を知れたと喜ばなかったんですか。なんでそれだけで……それだけで愛する人を殺してしまったんですか」

どんどんと言葉から力が消えていくアスナ。

「彼女はあれで完成していたんだ。グリセルダなんて私が知らない一面は無駄だった。だから彼女をグリセルダが覆い尽くしてしまうために救済する必要があった。それに君にだけは言われたくな「黙れ」」

「そうかい。君は既に気が付いていたのか。いや、君ほど聡明な子なら気づいていて当然か。」

そして君にだけは言われたくないよ、『血盟騎士団』副団長、『閃光』のアスナ。私と同じように奴らを使った君なんかにはね。私を裁くと言うのなら君も同罪だよ」

「あいつがしたことは知ってるよ。少なくとも俺とユキ、クレアの3人は。んで多分鼠も気づいてるんじゃないかねえの。まあ知らんけど。」

って話が逸れるところだった。んで何が言いたいかっていうとユキも俺も怒っていない。違うな、気にしていない。

だからあんたが言ってるアスナを追い詰めるのは違うだろ。

んでグリムロックさん。死ぬか牢獄に入るかどっちがいい。選ばせてやるよ」

「ハハ、気にしていない……か。面白いことを言う。傷付けているのは君の方じゃないか。君はもつと他人のことを考えた方がいいんじゃないのかい。」

まあいいか。ぜひ私を殺してほしい。この世界から彼女の記憶が薄れる前に退出したい」

笑いながらそう言うグリムロック。

「忠告ありがとうございます。それでは………」

と一言告げると曲刀を首に振り下ろす。首を斬り落とすには十分な切れ味の曲刀に、俺のステータスだ。

グリムロックはその場に崩れ落ち、動き一つしない。
ポーチから青い結晶を取り出す。

「コリドーオープン」

もちろん俺が刃を向けて入れればの話だが。

そのまま気を失った彼を掴み上げると開いた青い光に投げ込み、閉じる。

「これで奴は黒鉄宮の牢屋だ。当分は反省してもらおうことにした。じゃあ俺はこれを消してくるから」

そう言つて頭の上にあるオレンジに染まつたカーソルを指差す。

「私も行くわ」

「私もです」

ユキとクレアも付いてくるらしい。

取り敢えず予定になかったカルマクエストが必須になつた今、本来の目的を告げることもできないだろう。

歩き出そうとした時、急に腕を掴まれる。

「ねえ、アハト君。今さっきのはそう言う事なんだよね？」

「ああ。さっきも言ったが俺もユキも気にしていない。お前は早く忘れろよ」

あの事とは雪ノ下がラフコフの連中に捕まつたことを指す。

きつとアスナは拉致だけを頼んだのだろう。それで奴らが暴走した。

ただ彼女は気がつかなければなかった。奴らは殺人者だという事、そして自分の考えが歪みきり、狂っているということに。

まあ今は反省しているようだし、後悔もしている。なら何も言うことはない。

「アハト君、その言い方は無いんじゃないかしら」

「本当に先輩もユキ先輩も甘すぎです。2人とも命狙われたんですよ。ていうかユキ先輩はもつと怒っていいはずですよ！むしろ黒鉄宮送りにしても良いと思ってるんですよ。私は。」

でも2人がいいと言ってるのに私がずっとは言えませぬしね。

でも先輩、もつと上手に言わないとユキ先輩が言うように勘違いされるかもですよ。

現にアスナの表情を見てくださいよ」

勘違いとは一体どういうことだろうか。

今は取り敢えずオレンジを消さないと悪い噂が立つかもしれないので早く行動したい。
い。

んであいつらにも話さなきゃいけないことあるし。

アスナの顔を見ろって。気にしなくて良いって言って許したのに何勘違いするってんだよ。

「アハト君！ユキさん！本当にごめんなさい！」

「私がしたことが許されないのはわかっている。でも謝らせてください。本当にすみませんでした」

それを聞いた雪ノ下と一色は俺に視線を向ける。どうやら俺に相手をさせるきらしい。

つかその『やっぱりややこしい事になった』みたいな顔やめてくれよ。

「別にいいって言うてるだろ。それに正直気にしてないことに謝れても困るしな」

「で、でも」

「んでお前は どうするんだ。謝ってもそれで終わりか？」

「いいえ。私はこれから私用でアハト君、ユキさん、クレアに近づかない。だって私が何でもするって言っても迷惑でしょ?」

ん?なんかおかしくないか。

「こら。女の子が簡単に何でもするって言っちゃいけませんよ。俺じゃなかったら大変なことになるかもしれん」

「なんでこんな時に私を注意するの。私は加害者で君達が被害者。君達には私を裁く権利がある」

「人に他人を裁く権利なんてねえよ。あるのは自分を裁く権利だけだ」

「でも「ちよつと待ったー」……クレア?」

アスナと問答をしている中、急に一色が声を出して邪魔をする。

「ちよつと待っててくださいよ、先輩。完全に話噛み合っていないですから。じゃあまずアスナ。アスナは今の現状をどう思ってる」

「私のせいでユキさんとアハト君が死にそうになったのに気にしてないって言われた。私のことなんてどうでもいいって言われてるみたいで……。だから私は距離を置こうと思つて」

「ちよつと待っててくれ。俺はそんなこと思つてないぞ。事の大きさに気がついて反省してるようだしもう言うことはねえつてことだよ。」

それにお前らはまだまだ子供だ。実際の世界だったら親に対して迷惑をかけるような、な。

でも親は気にしたりしない。だろ？親にとって自分の子供を正しい道に導くのも仕事の1つだからな。

ゲームに囚われて正しい道から外れかけたかもしれない。正してくれていた人がいない今、何が正しいのかわからなくなることもあるだろう。

ただそんな時には俺を……俺やユキを頼つて欲しい。多分だがこの中で年長だろうし、それに俺やユキはアスナやキリトに迷惑をかけられたところで気にしない。むしろ

嬉しいとまで感じるかも知れん。

いつも迷惑しかかけてこないクレアのお守りもしてるくらいだしな」

「ちよつと先輩、それどう言う意味ですか。後でわかってますよね」

「今はちよつと黙ってる。

あー俺は道を正すことはできるか分からんが一緒に歩くことくらいは出来ると思う。

道を正したいんだったらユキのそこに行けよ。

えーつと、俺の言いたいこと伝わってるか？」

「つまりは頼りにしてくれってこと？」

「まあそう言うこつた。おんなじ事を何回もされたら流石に迷惑だが迷った時に手を差し伸べたり、一緒に迷つたりはできるはずだからな」

ここにきてアスナは笑みを浮かべる。

ちゃんと伝わったのだろう。一色のおかげで誤解なく伝わったようだが、やはり俺は

口下手なのだろうか？

「口下手というよりかは言葉足らずかしら。あなたと付き合いが長いか、ある程度理解があるんじゃないと本質が伝わり辛いというのは確かね」

「うっせ。でもそうか……。って口に出してたか俺？」

「いいえ。でもあなただってすぐに顔にでるもの。その感じだと当たってたようね」

雪ノ下も微笑みながら言葉を発する。

そんな俺と雪ノ下を見た一色はほっぺを膨らませながら

「何2人で笑いあってるんですか。嫉妬しちゃいますよー。それより先輩、私に何か言うことがあるんじゃないですか？」

フフン、と胸を張りながらも褒めて褒めてというオーラを全開にする。ブンブンと振られている尻尾が見える気がする。

「いつもありがとな、クレア。ほんと助かってる」

そう言つて頭を撫でてやると目を細めて嬉しそうにしている。

「今更機嫌とつても遅いですよーだ。後で付き合ってもらいますからね」

「んで、この話はもう終わりでいいだろ？」

俺たちの中では既に終わっていた話だ。異論など出るはずがなく話は終わるはずだった。たった一人を除いて。

「また今度皆の前で説明するから。だから……………」

「ならちようど良いや明後日の朝、リズベット武具店に集まろう。俺も話がある」

そんな俺の話をまとめる姿を見てアスナは

「なんだかアハト君、お父さんみたいだね」

「何言ってるんだよ。アハトは兄ちゃんだろ。あ、そうだからハチ兄って呼んでもいいか」

「ん？どうしてハチ兄なの？」

「アハトってドイツ語なんだよ。日本語に直すと8。だからハチ兄」

「そうなんだ。じゃあこれからは頼りにしてるよ、ハチ兄！」

こんな感じで雰囲気は最悪から一転、いいものに移り変わった。『黄金林檎』の連中からは恐怖とも何とも言えない視線で見られているが関係ない。

それとそっちで話し合ってる4人。そろそろ俺との出来事を共有するのやめてもらっていいですか。ちよつと恥ずかしくて死にたくなるんですよ。

「アスナ、キリト。その3人は頼んだ。んで鼠を使って連絡送るから。んじやカルマクエスト行ってくるわ」

そういうと転移結晶を使い、青い光に包まれた。

自分の中の

カルマクエストの説明などいらないうらなう。

教会に行き、懺悔し、そして話を聞き続ける。

というのは建前で計24時間という長時間座り続け説教され続けるだけの時間を過ごす。

途中で寝ようものなら更に話が伸びてしまうという茅場が作ったシステムの中で一番厄介な代物だった。

ありがたいお話の中、彼は心ここに在らずといった表情だ。

厄介なことになった。

Pohも面倒なのに新しいボスが誕生していたなんてな。

名前は分からなかったが取り敢えず鼠に情報を広めてもらわないと。

それにあいつの身体から吹き出していた黒いモヤのようなもの。

あれも以前Pohが言っていた力の1つだとするならば………。

きっと俺のスキル『死神』もあいつの言うシステムの壁を超えたスキルなのだろう。ただ引つかかるのは、あいつはスキルがおしゃべりでうるさいと言っていた。……まあいいか。対策を考える必要はあるがまだ余裕はありとおもう。それよりどうやってあいつらを誘うかを考えないと。

『お前、ギルドを作れば安全になるとか考えてるだろ』

ギルドを作って団体で動いて貰えばそれだけリスクは減る。それに仲間つてのは精神的な安定にもつながる。

つかお前は誰だ。

『甘いなあ。むしろ困うことで弱点を明らかにしてる事に気付かないのかよ。』

紹介が遅れたな。俺はお前、正確には50層でお前の力になった』

お前が死神か。何故今になって出てきたんだ。

『俺は深層心理にしか影響を与えられないんだよ。だから寝てる時や戦闘時、それに集

中している時しか声を聞こえさせることができないんだよ。
つか寝てる時とかに何回かちよっかいはかけてるはずだよ』

まさかあの胸糞悪い夢はお前の所為なのか。

俺の黒歴史を扶るような……………。

『ああ、そんなこともしたかな。

でもそのおかげでお前の本質を見ることができた。

だから、ほら。スキル使いやすくなってきたでしょ』

戦闘中に余計な情報が遮断される感覚が出てきたよ。それも全部お前の仕業なのか？

『仕業だなんて失礼な。俺を使いこなすには感情を切り離す必要がある。君はもうそれができるようになっているはずだ。あとは君が俺を受け入れるだけだよ』

あとは俺が受け入れるだけ……………か。

受け入れて、感情を切り離して、それで俺はどうなるんだ。

『名実ともに死神になる。そしてこの世界を終わらせることが出来るだろう。そしてそれを成し得るのは君とキリトくらいだろうね。』

君は大体気がついてるんでしょ、茅場の正体に。早く終わらせに行かないとダメだよ』

何を言っているんだ。俺は何も知らない。

知っているなら誰が茅場なのか教えて欲しいくらいだ。

『やっぱり、この世界に茅場もいる事に気がついてるじゃないか。まあいいよ、君を怒らせるのは俺の本心じゃないからね。でも、まあ………このままじゃ君が大事にしたいと思えたものは全て消えてしまうだろうね。良く考えろといいよ。じゃあ時間だ』

ちよつと待てよ。まだこつちには聞きたいことがあるんだ。

「待てって言うてるだろ！」

「急に声を張り上げてどうした、少年よ」

目の前には白い髭を蓄えた聖職者が立っている。

自分のカーソルを見ると緑に戻っていることからカルマクエストも終わったの
う。

「いえ、何でもありません。急に失礼しました。あと、ありがとうございます」

そう言って立ち上がり教会を後にする。

俺は鼠に特別版の依頼を送り、内容を指示する。

新しいボスが誕生していたということと、2人が持つ特別なスキルに関しての注意
告だ。

ついでに、と俺の持つユニークスキル『死神』についても載せるように指示しておく。
自分のことを自分で書くなど不可能なのでここはアルゴに丸投げだ。

番外編 光と影

皆さんも『光があるところに影がある』という様な言葉を聞いたことがあるだろう。これは性善説に基づく考えだと俺は思っている。

宇宙誕生はどうだろうか。無しかない暗闇の空間に突如光を発し、宇宙は誕生した。かつての生き物は全て、光が当たらない様な深海で生き、活動して来た。それが形を、姿を変え、住む場所を深海、浅瀬、陸地と次第に光を得られるところに進んで来た。

中には闇の中で生活する生き物もいる。

ただそれは次第に個体数を減らしていく一方であり、またそれらは暗闇のみでなく、明るいところでも生きる術を身につける様になって来た。

人間は夜の暗闇を恐れ、夜に活発に活動する獣を恐れて光を、火を生み出した。だってそうだろう。人間には暗所恐怖症はいても明所恐怖症なんていない。

だから俺は言おう。

全ては影から生まれたのだと。『光があるから影がある』のではない。『影があるから光がある』のだと。

今から話すのは『哀れな狼』と『愚かな羊』の物語。『哀れな狼』が狂った物語だ。

彼は少し身体が弱く、気も弱かった。

その為か、いつも塞ぎがちだった彼にはなかなか友達ができなかった。いつも独りだった彼に大学で初めて友人と呼べるモノが4人も出来た。

大学時代を友人と過ごした彼は塞ぎがちだった性格も改善され、少しずつだったが言いたいことも言える様になっていた。

そんな彼は就職活動を終え、働き始め、金を貯める様になり余裕が出る頃に、あるゲームの発売が発表された。

それがソード・アート・オンライン。

彼は友人を誘い、仕事の休みも取り、久しぶりに友人と集まってゲームを買った。

初のVRMMORPGということで1時間もかからずにどの店舗でも完売した様で、手に入れられた時には奇跡に感謝し、友人と喜び合っていた。

ゲームを始める前に互いの名前を教え合い、すぐに合流することを約束して家へと

帰って行く。

ゲームを始めたらずくに合流でき、そのまま流れでレベリングをしていた。全員のレベルが3になる頃に、鐘が鳴り響いたのである。全てを狂わせる死の鐘が。

デスゲーム開始を知らされた彼らは話し合い、攻略組の後をゆつくりと追うという事で一致した。

彼らは常に安全に気を使い、生活に余裕を持てる程のコルを集めていた。だからきつと慢心していたのだろう。

38層

『迷宮前ダンジョン』での狩りをしていた時だった。いつも通りの場所でもいつも通りの狩りだった。……その筈だった。

ただ違和感があったとすればいつもに比べてmobの数が少ない気がしたというだけだった。

誰も何も言わないし俺の気のせいということに放っておいたが、いつも狩りを終える時間になってもいつもの2/3にしかなかった。

話し合いの結果、後1時間だけ狩り続けることになった。

この選択があんな結果になるなんて誰も思っていなかった。あんな結果になるなんて分かっていたら満場一致で帰っていただろう。

狩りを続けてから10分後のことだった。漸くいつもの様に会敵する様になったと思っていたらいつの間にかmobに囲まれていた。

いつもならば囲まれたとしても3、4体なのに対して、今は10体に囲まれている。今の状態でも絶望的なのにmobは湧き続けてくるのだ。

そういうば、とこんな時に脳裏に浮かび上がる。攻略本にはこう書かれていたのだ。

『一定の場所で長期間狩りをするプレイヤーへ

いつもに比べてmobが少なく感じた時は直ぐにその場を離れることをお勧めする。

各エリアには時間当たりのpop数が決められており、時に湧かなくなることがある。

エリア内にmobがない場合に時間がリセットされると大量のmobが湧く可能性がある』

まさにその通りの状況なのだろう。

要するに絶体絶命のピンチ。倍以上のmobを相手にどれだけ耐えられるのだろうか。そんな事を考えながら武器を構えるが恐怖には勝てなかった。

連携は乱れ、踏み込みは甘く、段々とHPバーは緑から黄、黄から赤に変わる者も出て来た時だった。

赤く染まり、身体が強張ってしまった仲間には鎌を振り下ろすmob。

明らかにオーバーキルな一撃だと言うことはここにいる全員がわかっていたのに誰一人として動こうとしない。いや、動けなかった。

自分達も既に黄色で、助けるために動けば今度はその隙に自分が死ぬ目に合うかもしれない。

ここにいる全員がそう考えているかは分からない。ただ俺はそう思ってしまった。

仲間だった彼が懇願の視線を俺に送ってくる。俺はそれを振り切ると自らの武器を握りしめて自分に襲いかかろうとしていたmobを叩き斬る。

俺は彼を見捨てたのだ。

その直後だった。突如ローブを着た奴が現れ、俺たちを囲んでいた十数ものmobを僅か数十秒でポリゴン片へと変える。

助かった、そう安堵すると俺は地面に座り込んでしまう。

そう、誰一人として犠牲を出さずに俺たちは、俺と彼らは助かったのだ。友情という大切な繋がりを犠牲に助かってしまったのだ。

「すまなかった。今日はこれまでにして宿で休んだ方がいい」

そういうとロープ姿の男は去って行く。

俺は直ぐには動けなかった。ロープの影から此方を見ていたあの目に恐怖し、畏怖し、そして見とれてしまった。

世界に絶望したように腐りきった目に。

それからというと、死にかけた彼は狩りに出るのをやめ、比較的無事だった4人のみで狩りをするようになった。

今まで5人での狩りしかしてこなかった俺たちは4人での狩りに苦戦し、また1人、また1人と狩りを恐れ最初の彼と同じように街から出なくなつた。

俺1人が狩りをするようになるまでには時間はかからなかった。

本当にあつという間だった。

1人で5人分のコルを集めるようになってからはレベルの上がりが高く、段々とソロで上の層に挑むようになった。

死にかけることもあったが見捨てたという負い目があるから辞めることはできない。そうすれば俺も彼らも死んでしまうから。

ただ、時々思うのだ。友情が無くなった俺と彼らを繋ぐものは何なのだろうか。

あの時は全員が被害者で加害者なんかいなかったはずだ。なのに何故か俺が加害者のように扱わ……ダメだ。彼らは仲間じゃないか。

仲間が苦しんでいるから俺が助けているんじゃないか。

そう思わなければ今直ぐにでも壊れてしまいたいという事には俺自身まだ気がついていなかった。

いや、気づかないフリをしていた。

………あの日までは。

あの日からひと月が経とうとしている時だった。いつもの様に1人での狩りをホームに帰ってきた時だった。

「あいつが仲間でもよかったよな」

「ああ。本当に助かるよ」

ここで中に入れば良かったのだ。

ただいま、と言い扉を開け、何の話をしてたんだと笑いながら聞く。

そうすればみんなはきつと笑いながら過ごして行けたんだらう。

ただ少し俺が動きを止めなければ良かったんだ。

「あいつに見捨てられた時はマジで死んだと思ったけどな」

「でもそのおかげであいつは俺らの分も稼いでくれるんだろ。生きてるんだし結果オーライだな」

「本当にだよな。つとそろそろ帰ってくる頃か」

聞こえてくる笑い声は歪んで聞こえる。気持ちが悪い。

奴らの言う仲間は俺の考えていた物ではない。ただ自分たちに都合が良いからそう

呼んでいるだけのただの他人なんだろう。

もういい。疲れた。この皮を被り続けるのはもう辞めよう。俺の中の怪物を解き放とう。

記憶に残っていたのはあの日見た腐った目と仲間だったモノがポリゴン片へと変わる瞬間の断末魔だけだった。

気がつく俺は『ラフィンコフィン』というギルドをつくり、ギルマスになっていた。そして気がつく。俺は狂ってしまったのだと。だから俺は探す、あの人を……。

誰が為の....

25層リズベット武具店

『黄金林檎』の件が終わった2日後の午前10時、俺を含めた7人が集まっていた。店主であるリズベットには前もって午前中は店を閉めるように頼んである。

「今回俺はギルドを作ることにした。あとはメンバーと名前が決まれば設立だ.....」

「先輩、私は入りますよ！メンバー一番目です」

ちよつとまだ最後まで言っていないんだが.....

「じゃあ私は二番目という事になるのかしら」

前もって話を通してあった一色と雪ノ下はすぐに話に乗り辺りを見回す。

「別に返事は今すぐじゃなくていい。俺は74層が開放されるとともにギルドを始めようと思ってる。だからゆつくりと考えて欲しい」

「私も入るよ、アハト先輩。……とうとう私もギルドの専属鍛冶屋つてわけだ。ちよつと感慨深い、かな？」

「シー、オネエサンみたいな情報屋はギルドに所属しないほうがイイんだろうケド、面白そうだし入るヨ」

「んー。俺もそろそろソコの限界を感じてたし、ちよつどいい機会かもしれないな。それに知らない奴のギルドよりハチ兄のギルドの方が安心だ」

アスナは他の全員がすぐに決めるのを見てあつげにとられる。彼女はギルドに所属している関係、勝手に決められないのだろう。

「私は少し考えさせて」

それに彼女は副団長というかなり大きい役職についている。まずはヒースクリフに相談するところからだろう。

解散し、各々が仕事に戻っていく。

残っているのは雪ノ下、一色、それとアイコンタクトで残るように指示したキリトだけだ。

「んで八にい、俺を残した理由は？」

「お前には俺がギルドを作った理由を伝えておきたくてな」

そう言うときリトは真剣な表情でこちらを見る。

「俺とキリトはラフコフに狙われる。だから弱点……違うな、人質にされそうな奴を囲んでしまおうと考えた。俺の関わった人間はこれで全てだが、お前はまだいるんだろ
う？」

誘ってみたらどうだ」

「ラフコフに狙われる……か。俺も八にもラフコフ相手にやりすぎたからなあ。今回のも合わせると相手の堪忍袋もブツチしてもしょうがないか」

その通りだ、と頷く。

それから少し話をし、キリトと別れた俺たちは迷宮区の攻略に来ている。

現在は73層、74層の解放に向けて尽力（笑）していた……はずだった。

ほんの数分前まではガイコツ男であったり、ゾンビなどアンデッド系のmobを3人で屠っていたんだが。

10分前急に彼女は俺の目の前に現れ

「素材集めを手伝って」

といい、俺1人を連れて行こうとする。

べつに不満がある訳では無いが急に呼び出されたと思いきや材料集めを手伝えと言

われるとは誰が考えているだろうか。

しかもわざわざアスナとキリトという護衛まで引き連れて73層の迷宮区に来ただぞ。

俺の後ろにいた2人から視線が突き刺さるのを感じる。

俺は鈍感系じゃ無いからやめて欲しい。俺の背中に突き刺さる視線は彼女にも刺さっているはずなのに無反応。むしろにこやかに挑発的な態度を取っているのだからもう勘弁して欲しい。

俺の胃はすでに中破状態でこれ以上何かが起こるまでにこの場を離れたい。

「1週間以内に返すからお願ひします」

どうやら俺に決定権はないようで、2人の許可を得た彼女は俺を引っ張り、キリトとアスナを置いて歩き出した。

ここまでが10分前までの出来事。

それからは70層迷宮区を探索し、アイテムを探している。

「ちゃんと約束通り週に3回手伝ってるだろ。今日はどうしたんだ」

「ギルドに加わる前に今注文されている分を作っておきたいんです。これを見てくださ
い」

リズベットから手渡されたのはA4サイズの羊皮紙。

そこには数十種類のアイテム名と個数が書かれている。

「おかげさまで大繁盛してるんですよ。で、手伝ってくれますよね」

彼女の店、リズベット武具店では新規武器の注文方法が少し特殊である。

他の鍛冶屋と同様で材料と武器に見合ったコルを支払う方法もあるが客はもう一つの方法ばかりを選ぶ。

その方法とは客の要求したスペックの武器を材料集めから全てこちら側が準備するというもの。ただしこれにはかなりのコルが必要で、リアルの世界での商売だったら成り立たなかっただろう。ただこの世界では武器の性能が命を左右することもあるため、閑古鳥が鳴くどころか満員御礼、攻略組が多く利用している。

それもそのはずで、彼女が作る武器は魔剣級には劣るが、少なくとも手に届いた層か

ら10層先までは戦っていけるような高スペック品ばかりなのだ。

他の鍛冶屋がその層限定、良くても5層程度先が限界で、さらに自分で素材を集めなければならぬ。

金はあるが時間がない攻略組にとって彼女の店はもってこいなのだ。

「だから予約がいっぱいってのは分かるんだが..... コレは多すぎないか？」

更に差し出された注文書には1、2..... 42人の名前が書かれている。

「って攻略組ばっかじゃねえか。マジかよ、彼奴らギルドで鍛冶屋抑えてるんだしそっちに頼めよ」

つか、1週間以内って言ってたけどこれ無理じゃね。

「大丈夫。私もレベリングはしてたし予定だと4日もあれば終わると思うので」

仕方がない。

押してダメなら諦める。面倒臭いことは避ける、避けられないなら手短かに。それが信条の俺は

「わかった。じゃあ最初はどこに行く」

といい、材料集めを促す。

ありがとう、といい俺を引っ張るリズベットを見ながら『年下に甘い』というあざとい後輩の言葉を思い出していた。

どうやら俺は年下には甘いらしい、そう初めて自覚した瞬間だった。

あれから既に3日が過ぎ、ほとんどの材料は集まっていた。

リズベットは自身が言っていたようにそれなりにレベリングをしていた様で道中も苦戦することなく、俺の予想をはるかに超えていた早さで材料は揃っていった。

まあ、何度か油断していた所を助けては注意したんだがそれでも凄い進歩だと思う。

「ハイハイで最後だよな?」

最後のアイテムは、ハチmobが落とす針。アイテム名は忘れたがそこまでは覚えて
いる。

「そうです。このmobが落とす針、『命の針』は凄いです。なんと槍に使うと鋭さ
がマシマシなんです。もちろん、他の武器にも使えますけど一番は.....、取り乱しま
した。」

「気にすんな」

どうやら赤面真っ只中の彼女は、この長い生活の中で鍛冶屋というものにハマってし
まったらしい。でも、まあ偶になら彼女の鍛冶屋トークを聞くのもいいか、と思えるも
のを彼女は持っていた。

ここ71層は大自然をモチーフにした世界。

その世界観のせいで俺たちプレイヤーは小人になったかのように感じてしまう。ポ

スは面倒臭いことに蜘蛛だった。名前は確か『クライダー』。糸を出す器官から雲のような煙幕を放ち、距離を取ろうとするといつの間にか張り巡らされていた糸に絡め取られるという、こちらの行動を制限させてくる攻撃で後少して死人が出るところだった。

勝因は蜘蛛の糸でも移動に用いられる粘着力の弱い糸を足場にして、スピード特化の面々が立ち回れることに気がついたということだろう。

そのおかげでなんとか命を吹き返した攻略組は撃破したのだ。

今いるのはその層のフィールド奥深くにある蜂の巣前。

ただ、ここの蜂は階層の割に経験値が美味しいわけではなく強いため、蟻のように順番待ちなどは発生しない。ただ、ごく稀に採れる蜜が極上と攻略本に書いたことからとって来てほしいという依頼が入る時もある。

71層なんて上層、ある程度強くないと死んでしまう。必然的にこの層でも問題なく動ける奴は大体が攻略組になるのだが、いかせん彼らは攻略にしか興味がない。

だからここは誰も訪れないスポットになってしまい、たまに俺がとって来た蜜は高額で売買されている。

「じゃあよろしくお願いしますね、先輩」

頷き、巢穴から出て来たmob『ヒトツキバチ』の群れに突っ込み斬る。今の装備は刀『無現』。刀身は黒く、片面に2本の、もう一面に1本の赤線が入っている。

一閃、ポリゴン片、一閃、ポリゴン片.....

5分が過ぎる頃には単純作業から解放される。というのも巢穴の前に屯していた数多のmobを全てポリゴン片に変え、狭い巢穴から出てくるmobを1体ずつ相手するだけで良くなったからだ。

「つてことで交代な」

リズベットの肩を叩きそのまま後退する。

「なにが、『つてことで交代な』よ。まあ良いですけど。その代わりお願いしますよ」

俺は頷くと納刀し集中する。

彼女の武器は片手棍だ。1撃は重く、相手に『混乱』のデバフを付与することに特化している。その代わり、扱うにはかなりの筋力値が必要となり俊敏値は低めになってしまふ。

更にソードスキルにも他の武器に比べクールタイムが長く設定されており、武器の性能が上げれば上がるほど玄人向けになっていく。

だから彼女が戦うときは基本1対1になるようにしているし、ダメージ計算をミスったときはフォローを入れる。

それが俺の役目なのだが、彼女は総武高に入れる学力を持ち、更には理系らしい。ダメージ計算はミスらないし、実質俺の役目は1対1を心がけるだけになっている。

そんな彼女も今回の材料集めでかなりの経験値を積み、1対1は完璧になりつつある。だから俺は1対2の練習をさせる事にした。

と言っても初めから体力満タンのmobを相手にさせると大変だろう。

まずは一撃を絶えられないようにHPを削りリズベットに渡す。

「行つたぞ。気を付けろよ」

「ちよ、ちゃんと処理してくださいよー」

そう言いながら目の前にいるmobの顎部分へ片手棍でアッパーを当て、そのまま体をひねり俺が逃したmob目掛けて片手棍を振り下ろす。

片手棍がめり込んだmobはポリゴン片と化し、そのまま彼女は溜める。すると片手棍は緑に輝き、背中目掛けて針を突き出すmob目掛けてソードスキルが炸裂する。

『レイジ・ブロウ』

下から振り上げる一撃、頭の上を通し横への一撃、そして遠心力を殺さずに踏みこみ振り下ろす一撃。

計3発の攻撃でmobは再びポリゴン片に変わる。

「どうやらポップ数を越えたようだ。一回休むか」

どうやら時間当たりのmobポップ数の限界を越えたようであたりは静まり返っている。

ウィンドウを操作する先輩はコップを2つと何かが入ったボトルを取り出す。

その何かを注ぎ、満ちたコップを私に1つ渡すともう1つのコップに口をつける。手渡されたコップの中に満ちているのは黒い液体で、匂いは何処か懐かしい。

先輩を見ると珍しく頬を緩めながら味を楽しんでいる。どうやら現実にあつた飲み物の再現のようで満足できるレベルの味だったようだ。

「いただきますね」

恐る恐るコップに口を付け、黒い液体を口に含む。

液体が下に触れると、黒々とした液体からは想像ができない甘みを感じる。

「これは…………… MAXコーヒーじゃないですか！

…………… 完成度高いな、です」

「お、なんだ。リズベットにはこれの美味さが分かるのか。美味しいよな、やっぱり苦い人生、コーヒー位は甘くないとな」

「なんですか、それ」

なんて話していたうちにどうやらポップのクール時間がリセットされたらしい。

コップを先輩に返すと片手棍を持ち直し突っ込んでいく。

上手く立ち回れば1人で戦える迄には強くなっているはず。先輩にいいところ見せたけれど、でも助けても欲しいし.....。

そんな葛藤を胸に秘めながら巣穴から出てくるmobを一体一体確実に屠っていく。

「そう言えば、この巣穴に入ることって出来ないんですか」

何気ない質問だった。

何も考えずに、ただ感じていた疑問を口にしただけだった。

通常のmobはポップする時、地面から生えてくる。

それなのにこのmobは巣穴から這い出てきていて、ポップの仕方が異なっているように感じてしまったのだ。

「わからん。考えたこともなかった」

そういうとより一層集中して観察を始める先輩。攻略本の情報収集をしていることから未知の情報は検証したいと考えているのかも知れない。もしかしたらただけど一人来てたら突っ込んでたのかな？

「先輩、行ってみましょうか」

そう私は提案していた。

それからは早かった。先輩は一閃でmobを倒し、私を引き連れて巣穴の入り口へと走る。

どうやらmobが出て来たらしく、入ることが出来ない。何故だつて、さっきまでは一体ずつ湧いていたmobが一気に押し寄せて来たからですよ。

先輩が殆どのmobを相手取り、取りこぼされたmobを私が狩る。2人、先輩の比重が重すぎるところは悪いとは思うが、の力量に応じた役割分担がはつきりしていたために直ぐにmobのポップ数が上限を越す。

結構レベル上げたつもりだったんだけどなあ。あの感じだと私よりも20レベルは上なんだろうな。一応わたしのレベルって安全マージン十分な87レベルなんだけど……てことは先輩って100レベル超えてる？

でもこの世界のレベル上限ってどこなんだろう。

100層まであるし150レベルくらいが上限なのかな。

「よし。じゃあ突っ込むぞ」

今度はゆつくりと巣穴の入り口をくぐっていった。

エリアが変わったことを示すアイコンが視界に現れる。

『ラビリンズ』..... 多分蜂のラビリンズってことだよな。

茅場は変なネーミングセンスの持ち主の様だ。つか、なんだよ。巣がダンジョンになってるって。

壁は土壁なのだが何かでコーティングされたかのように光を反射している。おそらくだが蜂が穴を掘って表面を体液か何かで固めたという事だろう。

軽く叩いてみるとコツン、と硬い音が帰ってくる。どうやら蠟のような物でかなり硬

くなっていて激しい戦いをして崩れそうにない。

とダンジョンの解説はこの辺にしておいて、先にいるであろうボスを想像する。

巢のボスといえど勿論女王蜂だろう。かと言ってそこまで安直な発想でいいのだろうか、などと考えているといつの間にか道の両端から蜂型 mob がやってくる。

「俺が前の3体をやる。リズベットは後ろの1体を任せた」

そう言い、リズベットが頷くのを確認すると走り出す。もしかしたら巢にいる mob は外の同種よりも強いかもしれない。

最悪の場合を想像して目の前の mob に斬りかかる。

と言ってもさつきまでとは変わって突きメインになっている。

というのも穴の大きさは mob が3匹同時に突っ込んでこれるほどで戦闘前に短剣に持ち替えていたからだ。

何も考えずに長物を振り回せば壁に突き刺さっていただろう。一瞬の隙が命取りになるかもしれない戦闘ではそんな隙を作ってはならない。

そんな心配も無用に思えるほどに mob は弱く、弱点を数突きするとポリゴン片と化す。

さつさと3匹を屠るとリズを見る。

どうやら彼女は1人で大丈夫だったらしい。既に棍を腰に付けている。

「やっぱり先輩は強いですね。一体の私とほぼ同時に全部片付けるなんて」

そんなことはない、そう言うのを先を目指して歩き続ける。

それから何回か戦闘を行うがやはり楽に倒せる。

やはり外に出てきていた蜂mobの方が強く感じるのだ。

基本的にmob相手をリズベツトに任せ、危険な場面になったら（ほとんどなかったが）手助けするという流れで進んで行く。

奥に進めば進むほど敵mobは弱くなり、次第に表れるmobも変わる。

蜂mobが主だった最初に比べ、今では恐らくだが蜂の幼虫が襲いかかってくる。

これの攻撃は単純で嘴の周りについているハサミを武器にしている。

ただ、だ。ハサミの大きさが身体の大きさにマッチしておらず、ハサミを避けながら充分に攻撃ができ、狭い通路では方向転換すら出来ずリズベツトの片手棍で頭を叩くことで頻繁に『混乱』のデバフが付与される。

頻繁にと言っても2、3回でポリゴン片へと変わるのだが...

そんな感じでリズベットでも時間をかければ問題のないmobばかりでしかも一体ずつしか出てこない。

そのままリズベットのペースで進んでいくと道は行き止まりになる。

「あちゃー、行き止まりですし戻りましょうか」

彼女はそう言うのと踵を返すが、俺はあるものを見逃さなかった。

立ち止まっている俺を不思議に思ったのか顔だけをこちらに向けて立ち止まるリズベット。

俺はそのまま壁の方に歩き、抜刀し刀を振るう。

と、目の前の壁だったものはポリゴン片と化し消えていく。その先には今いる通路よりも10倍は広い空洞だった。

「うわー広いですね。ていうか先輩どうしてわかったんですか？」

「お前の声に微かだが揺れていたんだ。それこそ気を付けてないと気が付けない程度だな」

それより、と俺が言うと被せるように

「分かってます。ボスモンスターがいるってことですよね」

どうやら彼女はただ鍛治だけをしていたわけではないようだ。
戦闘に大切な感覚を持ち合わせている。

「俺が前衛でリズベットが後衛、敵の攻撃は俺がパリイするからそこを叩く。これでいいか」

頷く彼女を見て大きな空洞に飛び降りる。

落下しながら目に入って来たのは白い大きな塊だった。

それは先ほどまで相手していたモノの2、3倍の大きさだ。

『クイーンワーム』

見た目は然程変わらず、違う部分と言えばハサミがより鋭利に、そして大きくなっているというところ位だろうか。

「行きましよう先輩」

リズベットの声を聞き、刀を再び納刀する。カチャつという音で俺は更に集中し、走り出す。

距離は約10メートルといったところだろう。

そのまま近付き3メートル程度のところまで刀を抜刀し始める。

そのまま幼虫を真つ二つにすべく横を走り抜ける。所謂抜刀術だ。見た目は柔らかそうなのに対してかなりの硬さなのだろう。俺が付けられた傷は表面の浅いところしか見られない。

クイーンは器用に身体を丸めると胴体で俺をなぎ払う。

バックステップ2回で距離をとって回避しているとリズベットが片手棍で顔面をブン殴っている姿が見える。

が、かなりの重量なのだろう。少しも身体をそらすこと無く空中で動くことの出来な

いりズベツト目掛けてはさみを突き出す。

俺が刀で受け止めるとそのままハサミを閉じてくる。しやがむと頭上から風を切る音が聞こえり。

そのまま俺目掛けてのしかかりとさまざまな攻撃をしてくる。

はさみの動きは眼を見張る早さだが他は遅く、どうやらただ硬いbossのようだ。ということとは、だ。はさみを使い物にならなくすれば安全ということである。

「りズベツト、ハサミを集中攻撃」

そう言いながら刀で攻撃しヘイトを稼ぐ。

稼ぎ、稼ぎ、パリイ。りズベツトのソードスキル、稼ぎ、稼ぎ、パリイと繰り返す。パリイでできた隙をりズベツトのソードスキルで叩き、時にはハサミを上に乗っ飛ばし、また時には地面に叩きつける。

既に『クイーンワーム』のHPは最後の一本になる直前だった。

「あと少しでラスト一本だ！集中するぞ」

HPバーがあと少しで1本になるタイミングで俺はそう叫ぶ。

俺の叫びを引き継ぐかのように『クイーンワーム』も叫ぶ。

違和感があった。まだラストにはなっていないのに突然叫び始めたボス。そんな違和感に一瞬思考を取られてしまった。

目の前の敵に集中していた俺は突如増えた敵を示す赤丸を見落としていた。

いや、違う。見落としていたのではなく、見えないように『クイーンワーム』の赤点に被して上空から近づいて来ていたのだった。

気付いた時には腹部に攻撃を喰らい吹っ飛ばされていた。

順調だった。そう、順調だったんだ。

先輩と2人で幼虫型のボスと戦っていた。先輩から発せられた指示に従いつつ、でも基本は私自身の動きで戦い危ない時は先輩のフォローが入る。

本当にスムーズに戦いは進んでいた。

それは目の前の『クイーンワーム』を見たら分かることで2人でだけど30分でラスト1本近くまで追い詰めた。

先輩は警戒をラスト1本になった時の警戒を促して、私も最後の1本にするために叩きつけをソードスキルでなく通常攻撃をとったのも警戒のためだった。

そのままステップで下がり変化を確認しようとするど気がついたら後方にいるべき先輩がいない。

おかしいと思つてミニマップを確認するとフィールド端に緑が1個、中央付近に緑がもう1個、その周りに2個の赤があつた。

そう、赤が2個、だ。

ヤバいと思つた状況を把握するためにバックステップから走りに切り替える。

どうやら先輩は新しい敵に吹き飛ばされてしまったらしい。

走つて距離を取り、先輩の近くでフィールドを見渡すとまだ1本と少しのHPを残した『クイーンワーム』とその真上で羽根を震わせている新しいボス『ザ・クイーン』が確認できる。

恐らくは女王蜂なのだろう。これまでに出てきた蜂型mobと同じような見た目だが大きさが比べ物にならないほど大きい。

まだまだ戦いは続くのに頼みの先輩は気絶中。今の私はレベル的にギリギリで先輩の助けがないと1体相手が限界だろう。

そう、今のままなら。

ここで使わずにいつ使うのだろうか。

後ろには気絶している先輩。いつもは守ってもらってばかりの私が先輩を守れる機会なんてそうそう来ない。今こそ私が先輩を守って、先輩の隣に立てることを証明する。

そのままアイコン操作を行い片手棍を消す。代わりに右手に剣を左手に盾を出す。

まずは『クイーンワーム』から。でも『ザ・クイーン』を無視することはできない。

剣を腰に一度差し右足のポーチからスローピックを取り、装備する。そのまま走り出すとピック一本を女王蜂へ、右手が空くと勢いを殺さずに剣を引き抜き幼虫へと斬りかかる。どうやら幼虫の方はラスト一本になっても動きは特に目立った変化はないらしい。

といっても2体の相手はかなり厳しいです。

絶対絶命なんですから早く起きてください、先輩。

それまでは私が時間稼ぎます。

自身の為の

目が覚める。

見回すが周りには何も無い。

さっきまで『クイーンワーム』と戦っていて、急に不意打ちを食らった。なのに何故俺は何もないこんなところにいるんだ。

もしかして…………… 死んだのか。

『まだお前は死んじやいないよ。あんなので死ぬほどお前は弱くない』

姿は見えない。でも声は聞こえてくる。

「死神か…………… じゃあここはお前の作り出した空間なんだろう、早く出してくれ」

『そう焦るなよ、君と俺の中じゃないか。』

…
もうちよつとゆつくりしていきなよ《お兄ちゃん》」

懐かしい声。この世界に来るまでは唯一毎日聞いていた声だ。

「どうしてお前が妹の、小町のことを知っている」

『私はー君の過去を見たんだよー。お兄ちゃんが愛して止まない小町のことだって知っているに決まってるじゃん。あれ、これ小町的にポイント高い』

「小町の真似をやめろ。これ以上小町の真似をするなら…」

どうするのかなー、と言いながら黒かった世界に1人現れる。

それはどこか懐かしいスカートに上着を着ている何かだった。

見てはいけない、そう本能が警鐘を鳴らしている。そんなはずがない、あるはずがない。なのに俺は目を背けられずにいた。

そう、目の前に現れたのは総武高校の制服を着た小町だった。

俺の記憶から小町と制服を照らし合わせただけの虚像。そんなことは分かっている。

「お兄ちゃん、小町はお兄ちゃんのこと大好きだよ。でも、お兄ちゃんは違う……んだよね」

そんな言葉に惑わされない。惑わされてはいけない。

「お兄ちゃんはむしろその逆」

違う、これは現実じゃない。

「お兄ちゃんは小町のことが大っ嫌い」

無視をすれば良い、そんなの分かっている。

でも耳を塞ぐことすら許されない。自身が許していない。

そんな状態の中俺の中に侵入してくる小町の言葉。

「お兄ちゃんは小町のことを恨んでる」

そんなことない、そう否定の一言を告げるだけで良い。
なのに口から言葉が出てこない。

「嘘ばかり。ならここで『小町、愛してるよ』っていつてよ」

「小町……愛し……て……」

「ほらやつぱり言えない」

『さあ、言え』

「……こま……ち……」

「でも、そんなお兄ちゃんでも小町は大好きだよ
『早く壊れろ』」

「……もう、やめてくれ」

「だからさ、早く帰って来てよ。小町寂しいんだよ」

『沈め』

「……… 黙れ」

「小町、ずっと待つてるんだよ。お兄ちゃんだったら早く帰って来てくれるよね」
『沈め、沈め』

「…… 俺は…… 小町を………」

「だって小町を見つけてくれたのはお兄ちゃんだけだから」
『バイバイ』

「………」

俺が9歳の時だった。

それは俺へのイジメが始まって少し経った時だった筈だ。

俺は学校ではイジメられ、家では居ないかのように扱われる。ただ一人小町だけはお兄ちゃん、お兄ちゃんと言つてついて来ていた。俺は小町が自分のイジメに巻き込まれるのを恐れて家以外では小町といたくないようにしていた。

そんなある時、隠された靴を探してから家に帰ると家には誰もおらず、玄関に赤いランドセルが投げ捨てられていた。

可愛くて仕方がない妹が消えたのだ。

幼かった俺は町中を探し回った。ただ純粹に小町が心配で探していたのかと言われると嘘になるかもしれない。俺がいて小町がいなければ両親は俺にキツく当たるかもしれない。心配7割、両親への恐怖が3割といったところだろう。

走り回って探し続けること2時間。家から少し離れたところにある公園まで探しに来た。

小さい小町が一人で来るには遠く、道も怪しかったはずだ。だが小町はここにいた。公園の遊具、半球に幾つかの穴があり中に入れる、の中で寝ていたのだ。きつと泣き疲れていたのだろう。頬には白い跡が残っていた。

そう思つて小町に近づくと目が覚めたらしい、パツチリと開かれた目と目が合う。それからはなく小町とそれをあやす俺。

話を聞いていると、今回のプチ家出は寂しかったかららしい。

親は帰って来るのが遅く、最近俺が冷たい。私って要らない子なの？だそうだ。

その時に俺に芽生えてしまった感情を俺は未だに忘れられない。

俺は妹に対して怒りを覚えてしまったのだ。俺は両親にも相手にされず、学校でもイジメられているのに何故恵まれているお前が泣いているのかと。構ってちゃんもいい加減にしろよと。

それからの俺は凄かった。この気持ちに蓋をし、鎖でグルグル巻きにした後、重りをつけて自分の心の奥深くに沈める。そして演じ始めたのだ。俺は小町が大好きだ、と。好きで好きで仕方なく小町のためならなんでもしてみせると。

そう思わなければ、俺は最後の抛り所をなくし今いないだろう。

俺の最後の味方だった小町にさえ距離を取られ、嫌われてしまったら俺は俺で無くなる。

だから俺は『偽り』続けていた。

小町は愛すべき対象だ。憎むべきは他人で、小町は他人ではない。自身の大切な人だと。

そうしなければ、そう思わなければならぬ程に積もった恨み、憎み。だからこそ俺は壊れてしまった。小町には無条件の愛を、そんな壊れた思考を肯定してしまうまでに

は。

「お兄ちゃん、思い出したでしょ？小町のことを嫌いだったこと」
『後ひと押し』

「…… ああ、俺は小町のことを……」

「素直になりなよ。目の前の小町はリアルの小町じゃないんだよ。仕返しなら今すればいい。小町を好きにすれば良い」

『さあ、やれ』

「…… このまま怒りに、感情に流されてしまってもいいのかもしれない」

「ほら。おいで」

小町は両手を広げて俺を迎える。そのまま一歩、また一歩と近づく俺の目は小町からはどう見えているのだろうか？

目の前にあるのはゴミを見るような目でも、虫を見るような目でもなく……ただただ悲しい色に染まっている。

気がつくとも腰には刀が差さっている。

俺は抜刀すると目の前にいる小町へと振り下ろした。

「どう、して……小町を、『俺を切らなかつた』」

目の前にいる小町の姿にはノイズが走り、所々死神の姿が見える。

振り下ろされた手には何もなく、刀は後ろに落ちている。

理由か。

理由があるとするならば、

「俺が小町の兄ちゃんだからだろうな。その当時は憎んでいた。でも俺は兄貴で兄貴は後から産まれてくる妹や弟を守るために先に産まれてくるんだ。でも俺は兄貴で兄貴は

んな一時の感情のみに流されてたまるかよ」

それに小町のお陰で今はそれ以上に充実してるんだ。過去の事なんて気にしてられ

ない。

まあ口にするのは恥ずかしいから言わないが。

それに、と話を続ける。

「お前言つてたよな。無意識の状態でしか俺を操れないつて。だから俺に精神攻撃をした。俺の心を壊してしまえば操り放題になるから。でも俺はそんな手には乗らないし、俺を信じてくれる人がいる間は絶対に屈しない。

それに今はリズベツトが大変なはずだからな、早く帰らないとダメなんだわ」

「だからすまん小町。あと少しで帰れると思うからもう少し待つててくれ」

そういうとノイズが走っていた小町は正常に戻り

『わかったよお兄ちゃん。小町待つてるんだから早く目を覚ましてよね！

早くしないとお兄ちゃん以外の男の人を好きになっちゃうんだから』

といたずら笑顔をこちらに向ける。

「大志じゃないだろうな。お兄ちゃんはそんなの許しませんよ。

だからすぐに帰ってみせるよ、小町」

いつもの家での軽いトーク。すでに2年程経っているのにもかかわらず口をつくその言葉はまるで毎日言葉を交わしているようにスラスラと出てくる。

「じゃ、兄ちゃん言ってくるわ」

という小町は行ってらっしゃいと返してくれる。

先輩が倒れてから2、30分くらい経ったように感じる。でも本当はまだ2、3分くらい。

集中すると時間が早く進むって言った人出てきて欲しい、ぶん殴ってあげるから。

本当の極限状態での集中はどうやら逆に時間を遅くしてしまうようで、先の事を考えるのをやめる。

今は目の前の一瞬に身体を反応させ、考える事を優先する。

なんとか防いではいる。でも先輩のところへと女王蜂が行かないように攻撃を織り交ぜながら、あとHPが1本になった幼虫をメインに攻撃する。といっても女王蜂への攻撃は盾に仕込んだピックを投擲しているだけだが。

一刻も早く幼虫の撃破を優先する。

挟み撃ちの状態で攻撃をくらいバランスが崩ればそのまま一気に畳み込まれてしまうだろう。だから早く且つ慎重に。

そんな時だった。幼虫が急に動きを止めたのを確認し警戒する。

幼虫の頭の上には鎌を持ち、それを幼虫の首に当てている先輩が立っている。

先輩は微かに口を動かすと鎌を引き、まだラスト1本の半分以上残っていたHPを削りきる。

「先輩！無事だったんですね！」

先輩からの答えはなく、違和感を感じる。いつもの先輩ならここで憎まれ口の1つでも入れるのにそれがない。しかも他の人の前では基本的に使わない鎌を使っている。

それに先輩はまだmobを狩ると微かに哀しそうな表情を浮かべる。といってもそ

れに気付いているのは片手で数えられる程度の人数だろう。先輩自身も気がついていないようだし。

ポリゴン片に変わる直前に飛び降りた先輩は私の目の前に着地し、私を観る。

「貴方は誰ですか」

私の質問にソレは何も答えない。

私を無視して横を通り過ぎて行く時

《風》

と呟いたのを確かに聞いた。

急いで振り向くとそこには誰も居ない。目に映るのは女王蜂だけ。

次の瞬間急に女王蜂のHPバーが大きく減る。

甘いコーヒーの香りを乗せた風が私の横を過ぎて行く。

急な事で敵から目を逸らした私は悪くないだろう。

目を向けた先には再び倒れている先輩が。

先輩の安否を確かめたいものの確実に女王蜂のヘイトは先輩だ。
急いで前を向くと走り出し、突撃する。

エリアボスとは言え、さつきまでは1対2で何とか耐えられたんだ。今更1体だけに遅れを取れるわけがない。

私はとある人の戦い方を真似するかのように武器を構えて攻撃を開始した。

気がつくとなんは冷たい地面に頬を擦り付けていた。

飛び起き現状把握に勤める。

先ずは辺りを見渡す。どうやらリズベットは無事のように。『クイーンワーム』も見当たらず、目の前にいる『ザ・クイーン』という蜂型のボスを狩ればいい。

あと変わっていたことといえばリズベットの装備が片手棍から片手直剣に盾という編成になっており、自分の傍に鎌が落ちていることくらいだろう。

また俺は操られていたらしい。

おそらくだが奴の世界にいる時に俺は操られているのだろう。

対策を考えなければならぬが取り敢えずは置いておく。

先ずは目の前のボスだ。

「すまん、リズベット。今から参戦する」

そのまま鎌を構える。

鎌という武器は案外戦いづらい。というのも鎌の刃は内側にしか付いておらず、柄も長い。

槍ならば距離の優位に立てるのだが鎌にはそれがなく、短剣や他の武器のように手数も期待できない。

鎌というのは一撃で敵を屠らなければならないのだ。

そのせいなのか鎌という武器には急所ボーナスが多めに割り振られているようだった。ただし他の武器よりも判定はシビアになっている。

だから鎌を使った戦闘では敵に気付かれる前にサツと刈り取る必要があり、それを失敗するとゾリ貧になってしまう。

といつても最近はや々なソードスキルを習得してきたため最前線でもやっていける程度には使うことができる。

「ちよ、先輩何ゆつくりしてるんですか！加勢頼みますよ」

「もうちよつと自分で頑張れ。あと俺が見えなくなつても動揺するなよ」

とやんわりと加勢する事を断り、代わりに声をかける。

このまま俺が片付けてもリズベットの為にはならない。それに戦い方にも興味が湧いてしまった。当分は見物に回る事だろう。

なぜなら彼女は片手直剣以外にも攻撃手段を取っているのだから。

鍛冶職人らしい面白い武器、いや一応は盾か。

一時的に剣をストックできる様にしてあり、投擲用のピックを備える場所も用意されている。というか実際にそこから今もピック投げてるし。無駄のない動きで剣からピックに持ち替えていることからかなり練習していたことがわかる。

さらに驚くべきは盾の先に刃が付いている事だろう。

どう握っているかはわからないがここにも一工夫あるんだろう。

盾としても使っているが、リズベットのバトルスタイルは『ガンガンいこうぜ』の様に双剣スタイルで手数を増やして相手に好きを与えない。

ひとつひとつの動きに無駄がなく、ストレンジス寄りに振られたステータスだったからこそできる盾の武器使用化。

更には敵に隙ができた瞬間片手直剣のスキルを発動させしている。彼女の片手棍も十分強かったがこっちも負けず劣らずかなりの精度になっている。そろそろいいだろう。ダメージ調整的にもそろそろ動き出さなければ不味い。

『凧』

そう考えた俺は存在を限りなく消すと動き始める。

これまでうまくいったことがないが一瞬でも隙が生まれれば良い。それにこれがダメでも他に手はある。

そのまま後ろに回り込み大きくジャンプし敵の身体に乗る。

そこで存在が濃くなるがもう遅い。

一気に駆け上がるとそのまま鎌を構えて、引く。

それに驚いた敵は一瞬動きを止め、その隙を見逃さなかったリズベットは最後のソードスキルを放つ。

踏み込みが甘かったのだろうか、僅か数ドット分だけ赤が残っている。リズベットの硬直時間が解けるには数秒かかる。女王蜂はどうやらリズベットだけでも道連れにしようとしているらしい。頭の上の俺を無視して攻撃モーションに入る。

そんな事許すわけもなく、柄を頭に突き刺す。シエツと空気が漏れる音を最後にポリゴン片へと化す女王蜂。目の前にはアイコンが現れこの戦いの報酬一覧が映し出される。

硬直が取れたのだろう、リズベツトがやって来る。俺は自身のウィンドウをリズベツトに見せ、鍛冶に使いそうなアイテムを探させる。

そのアイテムを全てリズベツトに渡し、残ったアイテムの整理を出したコーヒー片手にしている。と今回のドロップアイテムの中に面白いモノを見つけた。

『珀継』

実体化させてみると2個、飴色のブレスレツドが現れる。材質は分からないが3個の輪を2箇所繋がれており、戦闘の邪魔にならない様になっている。

「ほれ、お前にやるよ」

そう言ってブレスレツトを渡すと一つ押し返される。

どうしたんだ、と不思議に思い顔を上げると少し不安そうな表情を浮かべるリズベツト。

「…私もお揃いがいいです」

その言葉を聞き、我が師の小町による教えを思い出す。

確か、女の人と会うときに他の女の人から貰った物を身に付けたらダメ、だったか。

何故、と不思議そうな顔をしていたのだろう。

女の方はそういうのに凄く敏感だから、と付け加えてくれた。

ということとは、だ。リズベツトは俺が首にかけているネックレスとその先に光る指輪の片割れの在処も感じ取っているのかもしれない。

「わかったよ」

俺は右腕にブレスレットを付けるとリズベツトは左腕に付ける。そのまま左腕のブレスレットを目線の高さまで持ち上げると嬉しそうに微笑む。

そんな仕草に少しドキツとしてしまい、頭をガシガシと力強く搔く。

「ありがとうございます」

と少し小さめの声のリズベット。次の瞬間にはいつも通りに戻って話を振ってくる。

「それで、あの……… やっぱり何でもないです。もう帰りましようか」

そういうと歩き出すリズベット。そんな彼女の後ろについて行く俺は考え事をして
いた。

今回のこと、そして今後のことを。

死神

51層からある話を聞くようになった。

年寄りのNPCの何人かがお伽話を語る時があり、それは決まって同じ話なのである。

その話とは悪いことをすると死神に楽しそうに殺されるのだ。

だが今回は少し違う。

この話は47層を攻略本用にマップの端から端まで探索している時に入った森小屋で聞いた話だ。

『昔々、どこかの森の深くに4人の兄弟が住んでおったそうなの……』

「兄さん、ゴメンね。本当なら木こりは僕の仕事なのに……」

「風邪引いてるんだからしょうがないだろ。それにお前はいつも頑張ってくれてるんだし、病気の時くらいゆっくりしてろ」

そう言つて立ち上がり、斧を担いで部屋から出て行く一番上の兄さん。街では大工の仕事をしているらしい。

他にも優しく家事をこなしてくれる姉さんに、少し冷たいけど頭が良く、街で稼いで来てくれる兄さんがいる。

僕はと言うと毎日少しずつ生活に必要な木を集めては冬に備えて蓄えている。といつても僕が集めるのは一番上の兄さんが切り倒した木を薪にして運ぶだけだ。

そんな僕が病気で寝込んでいたある日の夜、扉を叩く音が聞こえ目がさめる。何事かと思ひ自分の部屋から出ると、1人を兄さんたちがとり囲んでいる。どうしたの？と尋ねると一番上の兄さんが

「一晩泊めて欲しいそうさ。だが空いてる部屋もないし無理だろう」

と。それに続き

「そうですね。ここはしかたありませんが」

と姉さんが。

一番下の兄さんは話は終わったと踵を返そうとした時

「僕の部屋でもいいならいいよ。

でも風邪引いてるしそれでもいいのなら」

と口から言葉が出ていた。

兄さんたちに囲まれているときにも思ったがかなり小さく、夜遅くに追い出すことはできなかつたんだと思う。

となりに立つと僕よりも小さく中性的な顔たち。声からして男の子だとは思うけど一緒に寝るのは不味かつたかな？

その日の夜はやけに静かだった。

聞こえてくるのは僕の隣に寝ている子の寝息と胸が微かに上下することによる衣摺れの音だけだった。

次第に眠くなつて来た僕は軽かつたはずの瞼が重たく感じそのまま身をまかせた。

どれだけの時間が過ぎたのだろうか？

突然聞こえて来た唸り声に目を覚ます。

音からしてすぐ近く、多分だけ家の周りにいるんだらう。

そう思いながら隣を見るといるはずの子がいない。

驚いて部屋から飛び出すと玄関が微かに開き冷たい光に照らされる。

「兄さん！姉さん！あの子が居ないんだ！」

誰の声もしない。

どうして誰もいないの……

もしかして、と扉に駆け寄り、飛び出す。

自身よりも大きな鎌を持った子とその周りに3匹、いや3人が立っている。

「もしかして僕のせいで殺人鬼が……」

僕のせいで兄さんや姉さんが死んでしまう。

そんな恐怖に駆られた僕は駆けようにも固まってしまう。

兄さん達の目は赤く染まり、口をキツと結びながらも端からは液体を垂らしている。

その姿はまるで獣のようだ。

固まった次の瞬間、姉さんの首が吹き飛びその場に崩れ落ちる。

兄さん2人が鎌を持った子に襲いかかろうと体勢を低くした瞬間

「兄さん！それに君ももうやめてくれ！」

と叫ぶ。

突然の声に驚いた素振りを見せる子に一番上の兄さんは飛びかかり、もう1人の兄さんは僕の方に駆け寄って来た。

その時に僕は気が付いてしまった。

兄さんたちは僕の知っている兄さんたちではないことに。

兄さんたちの目には躊躇いなどなく、僕と彼を本当に殺しに来ていて、僕の声に驚いた彼の方がよっぽど人間らしい。

僕のたつた3人の家族は獣になってしまったということに。

迫り来る兄さんの赤い目に覚悟を決めて目を閉じる。

あと1秒もしないうちに僕はこの世から立ち去ることになるだろう。

.....

いつまでたつても来ない一撃に驚き目を開けると、目の前に彼の目があった。

彼は鎌を持っていない。

「君は私を恨む権利がある」

そんな顔をしないでくれよ。君の仕事なんだろう。君は結果的に僕を助けてくれたんだろう。悪いのは僕の兄さんたちだったんだろう。君は結果的に僕を助けてくれた

「ありがとう。これ以上の罪を負う前に止めてくれて」

彼はその言葉を聞くと苦しきで満ちた顔を少し緩める。

そのまま彼は腰につけていた光源に手を伸ばす。

それは青い炎を灯したランタンで彼は兄さんたちだった物を集めるとランタンの火を移す。

「君の家族は人を殺していた。何回も何回も。次第に罪の意識も薄れていった。それはもう人じゃない」

そのまま突き刺していた鎌を回収すると

「私についておいで。君たちはまだやり直せるから」

すると大きい炎から3つの火が浮かび上がりユラユラと揺れながら彼の後ろを追っていき消える。

そして残された僕は、再びあの子に会えるように待ち続けている。
彼が忘れていったランタンに火を灯しながら、僕の終わりを見届けて貰うために……。

『